

ないかと云ふと、それは他人の空似と云ふものと打消し、何も己れが彼より生れたと云ふ證據が無いと云ふて非難して居る者があるが、是等は即ち妄想の好適例である。また山縣公の落胤だなど云ふてわざ／＼萩から出て来たと云ふ婦人なども矢張此妄想狂である、また不敬罪を犯す人間は多く此種に屬する狂者である。それからまた好訴狂と云ふて訴訟を好んでする病者もある、或婦人の如きは、自分の地面が少しく他家の領分に入つて居るからそれを取返すと云ふて訴訟を提起したが、此婦人は女は三十歳にならぬ内は一入前で無いと傳々云はれて居つた爲めに三十歳になる迄は我慢したが、三十歳になつてとう／＼訴へ出した、そして最初には役場や巡査、或は縣廳に訴へたが効が無いので裁判所に持ち出し、區裁判所より地方裁判所、控訴院、大審院等を経て皆敗訴に歸したので今度は上奏すると云ふて上京した處を品川で押へられた。此婦人の云ふことを聞くと、地所は僅か百圓かそこらの物であるが、妾は法律擁護の爲めに假令拾萬圓か／＼つても厭はぬなど飛んでも無い熱を吹いて居るが、世にはかゝる人間が少くないことと思ふから、其關係者は無論のこと、社會でも餘程注意せねばならぬ、さも無いと澤山金を使つた擧句、腦病院の厄介となる許りであるから大に警戒を要する次第である。

其他種々の症状

私はまた今日の乞食は殆ど其大部分は病氣然も早發性痴呆だらふと思ふて居る、と云ふのは精神病者は集癖と云ふてマツチの殻だとか、ボロだとか種々役に立たぬものを集める癖なるが、乞食の物を無茶苦茶に集むるなどはよく之れに似て居る。そして禮容の心も無ければ審美感または厭氣心も名譽心も無い處は能く似て居る殊に彼等、特有なる放浪生活は精神病の大部分を占め居る所謂早發性痴呆の症状である等より、私は常に乞食を精神病者と思考する次第である。

放浪生活の少年は道徳心が無いから、親がよく注意しないと遂には相與みして家をも世をも害することになる。殊に白痴の兒童になつては泥棒等のお先きに使はれて放火することなど間々ある、現に何時かの本郷の大火は此白痴兒が放火したのであつたと聞いて居る、そして此等は一度放火すると遂にはそれを想ひ出して度々放火を行ふ癖になるから、白痴兒を持つて居る親達は斯る兒童を決して世の中に出してはならぬ。

それからまた相當の年齢に達して大に淫慾に耽る人等も矢張早發性痴呆に多い、世間に能く此等の人を内情

狂と云ふが、事實内情狂なるものは無くして、早發性痴呆の一症候に過ぎぬ、即ち色情狂も、放火狂も、または上癡狂、好訴狂も皆早發性痴呆の一症候、唯其行方方が違ふと云ふに過ぎぬのである。處て斯る忌むべき恐るべき早發性痴呆は皆此破瓜期時代に起るものであるから、子孫の保護者は深く此點に注意して、災を未然に防がれたいものである。

### 第四十九節 精神病豫防としての中年時代の注意

人間の二十歳乃至四十歳時代即ち中年時代は實に人間の花の時代であるが、此時代には目立つて精神病や癡病が殖える、思ふに早れば各自生存競争場裡に立つて外部から受ける害が多いからであらう、尤も此時代には精神感情が圓熟して居るからして内界から起る害は左程でないが、男子ならば自己の存在、家族存在の心配、職業に對する心配等所謂外界から受ける害の爲めに精神を犯さることが多い。また職業の爲めに怪我し、其怪我の爲めに起る精神病もある、鐵道過剰などは此一例であつて、其外に神經衰弱や「ヒステリー」も起ればまた「アルコール」飲料を飲む爲め、或は梅毒の爲めにも精神病が起る、そして身體、精神共に過慮の心配苦悶をするから、精神病の十憂ある者は勿論、十憂無きもの迄も滔々相率めて精神病の渦中に捲き込まれるのである。そして此際に發る精神病の多くは、精神病中の精神病として最も恐るゝ所の麻痺性痴呆である、即ち人の一生を通じて最も恐れ、最も注意すべき時である。

### 第五十節 麻痺性痴呆

さて麻痺性痴呆は何故に恐しき乎と云ふに、其第一は此病氣は一家の中堅たる主人を犯すのと、今一つは此病に罹れば多くは二三年の中に死する、即ち不治の病である。それから此病に罹れば誇大なる妄想が起つて、自分は非常に偉き人である、自分が一と度手を下せば天下何事か成らざらんやなどと確信し、また自家の財産は實に莫大なるものでいくら使つても使ひきれぬなど云ふて非常なる豪華を極め大事業を企てたり、相繼ぎ手を出したり、斯くして財産も薄盡し、名譽も毀せられて殆んど一家離散の状態に立ち至れば御本人はボカと死んで了ふ、死ぬ人は善からうが後に殘されし一家餘族は實に目も當られぬと云ふ有様になるのは、此麻痺性痴呆患者一家の最後の歸である。然らば如何にして此惡魔の主人公たるを免るべきやと云ふに、それは麻痺

性痴呆初期の徴候を知つて財産浪費を未然に防ぐより外に仕方があるまい。即ち此病に罹れば、氣質の變異は著しきもので、謙直な人が大事業を企てたり、消徳觀念が無くたり、審美感を犯さる、機嫌が變り易く怒りつぽくなる等は大に注意の價値がある。また梅癡なる精神觀念の類するも此病に著しい徴候の一つで、また無茶苦茶に手紙を濺洒したり、然も其文字に間違が多く、字型が震へて居る、歩行することが下手になつたり、手に持った盃を落したり、言葉が拙くなり、よく物忘れ然も近いことを忘れる等も此病の初徴の一つである。それからまた社會的には、是れ迄禮容の正しかつた一人が急に野卑になり、或は舊物の置方が下手になり、または放蕩を始めるとも皆注意すべき點である。それから時としては神經衰弱に能く似た症狀を以て來ることもあるから、若し神經衰弱の治療をしても容易に癒らんと云ふ人であつたら、速に相當の處置をせねばならぬ。

麻痺性痴呆初期の症狀は右に述ぶ通りであるが、少年時代からの神經質あると大に間違易いから餘程精密なる注意を拂はねばならぬ。現に彼の有名なるニエツチエ（一千九百年死）なども其一例で少年時代より天才と云はれ、そして彼には痲疾の偏頭痛があつた、そして一千八百八十八年に始めて麻痺性痴呆の徴候が表はれ

たと云ふことである。尤もメビュースは一千八百八十二年に既に之れを診断したと稱して居る、それは何を以てしたかと云ふに、ニ氏が會心の著「樂しき科學」は、彼の一大名著で其内容の豊富である文章燦爛たる實に人目を眩する底のものであつたが、其第四卷「サラストラ」の叙事の處、然も最も大切な處に甚だ拙い文句が挿入されてあつたので、メビュースは大に驚き、且つ之れが原因を探つて遂に麻痺性痴呆の初期であると診断したと云うのである。

### 第五十一節 婦人の情精神病

それから此時代に於ける婦人は男子のそれ程職業や其他に就する苦心こそ尠いが、妊娠、分娩、授乳と云ふ三大厄の爲めに、妊娠時の情精神病、産褥時の情精神病、授乳期の情精神病が起る、殊に産褥時に非常なる心配をすれば、多くは情精神病に罹るものであるけれども此時代に於ける婦人の情精神病に男子のそれとは事變り、多くは癡癡性精神病であつて、適當の治療を爲せば全治に至るものであるから、豫後の點には覺得安心である。

第五十二節 精神病豫防としての初老時代の注意

それから更に年齢が進んで四十歳乃至五十歳六十歳となると精神病は比較的少くなるけれども、婦人にあつては四十五歳乃至五十歳の閉経期即ち女の職分の正に終らんとする時期に在つては女の職分に入る破瓜期同様、頗る精神病が多く、所謂退行性憂鬱症に陥ることがある。此病の恐るべきはあらゆる方法を以て自殺を企圖するにあるので、或婦人の如きは世を悲観する餘り佛堂に入らんとしてこれを遮りられ、次には井戸に飛び込んで自殺せんとして人に妨げられ、それから剃刀で喉を切らんとして之れも果さず、最後に舌を噛み切つて死なんとして之れも目的を果さず、とうとう精神病院に入れられる者もある。また海に投せんとした者もあるが、奇蹟なことには首を絞むるとか鐵道往生を企てるものは絶無である。

經閉期に於ける婦人に何れか悲觀するかと云ふに、彼等は悲觀と云ふ青い眼鏡をかけて世間を見るから、世の中の總ての出来事は皆悲しく見えるのである。されば此等の人を慰安せんとして或は劇場に誘ひ、音楽場に伴ひ、または温泉地に連れ行くなど總て樂しみの方面を以てするのは、慰安の方法の最も善いもので、此

等善意の慰安は反つて患者をして病を重らしめ或は死地に陥らしむるのであるから、之れを慰安するには彼等と共に悲み、彼の悲哀の半分を分けてやると云ふ風にするのが何等の方法で、丁度足らしびれた時に撫でも擦つても苦しいが唯壓へるのが効があると同じことである。

第五十三節 精神病豫防としての老人時代の注意

それから六十歳以上の老人になれば精神病も甚だ少くなる、尤も此位迄生きて居る位だから餘り病氣のあり様はない、けれども此時代には老業性痴呆なる一種の精神病があつて、物忘れしたり、一種恐ろしい様な、大きな様な妄想に驅られ、妄想性の空想に陥ることもあれば、精神が刺戟性になつて居るからよく家族と衝突したり、また色慾が異常に亢進して一家の安亂を來たすも皆此病氣の爲めである、また動脈が弱る爲めに脈管硬變性の精神病が起り、作業力が減り、記憶力が衰へ、或は眩暈したり、朦朧として人事不省に陥ることあれば、知覺に異常を呈し所謂不全麻痺になることもあるから若し斯様の症狀を呈する様であつたら家人は大に注意せねばならぬ。

第五十四節 精神病は癒るか癒らぬか

世間の人は一或精神病に罹れば決して癒らぬものと心得て居るらしいが、これは間違である、尤も不治の症もあることはあるが全治するものも澤山ありまた全治せぬも軽快するものもある、併しこれは黙然なる醫前によつて初めて爲し與ふるものであり、また患者によりては、自殺或は危険の虞あるものもある故、入院せしむるの最上の策である。

精神病の療法としては、第一には其原因を去るにあり、原因を去るには豫防が第一である、即ち遺傳の兆あるものは婚嫁を避け、また已に精神病に罹れるものまたは病輕快に至るも未だ全治せざるものは、斷然婚嫁を禁ずるがよろしく、また遺傳の兆ある小兒にありては、酒精其他の刺激物を禁じ、滋養多き食物を興へ、成るべく刺激少き田舎に哺育を爲し、睡眠と運動とを充分にして、身心の過勞を避け學業の如きも獎勵的態度を以てこれを強てはならぬ。

また病已に發せるものによりては、眞情を以て懇切に看護を加へ、病者の心を和らげ慰め一方身心の安靜を計る爲めに、完全なる床上の安息を必要とするものである、尙ほ藥物其他に就ては一に醫師の指揮監督に待つがよい。

第五十五節 白痴の原因と其教育の方法

白痴と云ふものは誠に困つたものである、けれども、これも教育の仕方によつては多少人並らしくさせることが出来る、此點に就ては、我が國に於ける癡兒教育の創始者瀧の川學園長石井亮一氏の研究されたるものを左に摘載して參考に供することとする。

白痴の原因

一と口に白痴とか低能兒とか云ふても、それには種々の階級と程度とあり、また其原因となるべきものも種々あるが、學術上から其原因を區別すると誕生前の原因、誕生時の原因、誕生後の原因とかう三つある。そして更に之れを區別すると、

誕生前の原因

父母遠祖の精神異常——殊に癲癩白癩——癲癩、神經性疾患、アルコール中毒、梅毒、結核、腺病性、血族結婚、早婚、父母老衰、母の妊娠中の貧血、饑餓、腹部の打撲、外傷、恐怖、憂鬱の精神感動。

誕生時の原因

早産、難産、墮産に於ける頭部の損傷、浹骨盤の頭部壓迫、初生児假死、鉗子分娩。

誕生後の原因

小兒急病、癲癩、腦髓、腦腹の疾患、外傷、室扶持、猩紅熱、麻疹、天然痘、百日咳、日射病、等である。誕生後の原因中麻疹、猩紅熱等は病氣其ものが直接の原因となるのはあるまいが、病氣のために起る體温の早騰等が原因となるのであらう、併し種の無い處には芽が生れぬと云ふ諺の如く、此等の病氣の爲めに白痴となるのも、よく其系統を調べて見ると矢張多少先天性の原因を認むるものである。

次に此等の原因中如何なるものが多いか、今米國に於て三千〇五十人の痴兒に就て調査したのを見るに左の通りである。

科 内

原因	誕生時の原因と百分比例	數名	%	輕度の神經疾患	數名	%
白痴々愚の系統		八三五	二七、三八	輕度の神經疾患	七九	二、五八
母の心身異常		二五九	八、四九	血族結婚	四一	一、三四
(イ) 身體的		一五五	五、〇八	腺病性	三六	一、一八
(ロ) 精神的		一〇四	三、四一	癲癩	二五	〇、八二
結核		二三一	七、五七	心臟脈管系統の疾患	一八	〇、五九
癲癩		二一六	七、〇八	梅毒	六	〇、二〇
大酒		一三六	四、四五	瘰癧	二	〇、〇七
癲癩		九二	三、〇二	人為的墮胎	二	〇、〇七
原因				遺失(母の死外傷)	一八	〇、五九

原因	數	%
早産	三四	一、二〇
繼産	一八	〇、五九
出生後の原因と百分比		
外傷(頭部)	一九一	六、二六
顛癇	一八〇	五、九〇
急性疾患	二三〇	四、四六
猩紅熱	八四	二、七五
腦膜炎	八〇	二、六二
過失(墜落)	五一	一、六七
肺結核	三九	一、二八
腸胃病	二八	〇、九二
假死	一五	〇、五〇
癲癇	四	〇、一三
藥劑濫用	二五	〇、八一
麻疹	二四	〇、七九
養護怠慢	二〇	〇、六六
百日咳	一九	〇、六二
手淫	一八	〇、五九
小兒麻痺	一七	〇、五六
腸管扶助	一六	〇、五三
衰弱	一四	〇、四六
胎前病	一三	〇、四三

脊髄病	一二	〇、三九
實扶的里亞	八	〇、二六
インフルエンザ	三	〇、〇九
更に之を總合すると		
誕生時の原因	一、九七八	六四、八五%
誕生後の原因	九三八	三三、二三%
計	三、〇五〇	一〇〇、〇%
誕生時の原因	八七	二、九二%
誕生後の原因	三、〇五〇	一〇〇、〇%
計	三、一三七	一〇〇、〇%

痴兒と普通兒との相違

原因中誕生前即ち原因が父母に存するもの最も多く約六十五布仙即ち全數の三分の二程あるのは大に注目すべき現象で、父母たる人の注意を要する處である。

痴兒と健兒との身體的の相違は前記に述べてあるが今回は精神的作用の相違に就て述べやう、元より痴兒は健兒に比して一般に精神作用の劣つて居るは云ふまでも無いことであるが、殊に中樞と末梢との連絡總合の能

力が欲けて居る。例へば箱の中に種々の形状のものを下げ置き、兩手を穴より入れて其を探るに、同じ形のものも兩手で探り當てれば電氣作用によつて電鈴がなる様になつて居る機械を應用して見るに、普通の兒童ならば譯も無く探り當てるも、痴兒はなかく容易に出来ない。それから平行線を種々の形を畫き置き、鉛筆を持たして肘を張りながら、其平行線の内に成るべく線に觸れない様に、またそれと並行した線を畫かしむるに智力の劣つて居る子供程、先きの線に抵觸し、甚しきは線外に飛び出してしまふ。此の接觸の程度は智力の程度に正比例するもので、つまり痴兒には指の先きの感覺が鈍いのである。それから興味のあることには同じ兒童でも午前と午後とで違ふ、假へば午前には三ヶ處より觸れなかつたのが午後には五六ヶ處に觸れると云ふ風に、神經の疲勞に供ふて接觸が多くなるから。これを以て神經疲勞の程度を知ることが出来る、此の方法は同一の場處同一の時間で多數人の神經疲勞の度を計測することの出来る頗る有益のものである。

此外種々の形状、種々の色彩を施したる小板を同種類同形状によつて區別をするに、なかく出来ないまた袋の中に種々の異なつた形状の小板を入れ置き觸覺によつて同形のものを選ばせるも同様である。それから上肢を肩關節で出來得る寸早く廻轉させながら手掌を握つたり開かせたりして見るに、肩胛部の廻轉百に對し

て大人は百二十回、小兒兒童は九十五六回開閉するのに、痴兒は僅か四五十回しか開閉が出来ない耶。末梢神經の力が鈍い。また注意力の散漫なる例證としては假へば學校と云ふ文字を漢字と假名とにて二行に書き置き、痴兒をしてそれを書かしむると漢字の方は六つかしいから、それには注意を拂つてどうかか書かすが、傍らの假名はどうしても書くことが出来ないなど云ふ例もある。また述べれば澤山の例があるが際限がないから先づ此邊で止めて置かう。併し痴兒には斯様に精神作用の總てに向つて著しく劣つて居るもの許りでなく彌補性のあるものには一方に缺陷あると同時に他方面には著しく傑出したものもあるのである。例へば時間を精密に云ひ當る兒童があつて今は何時かと聞くと假令暗中であつても何時何分と分時まで明白に答へ其れは少しも誤らないと云ふものもある、また當國に曆をよく暗記する兒童があつて何年の何月何日は何曜日だと云ふことをよく暗記して居るものがある、かつて大學の某博士が此事を聞いて來國され、新舊二冊の曆を見ながら質問すると其兒童は少しも定みなく答へる、處が後で博士はどうも一日づゝ違ふと話された故私はそのことはないと、其曆を見ると、博士は本年の曆を昨年曆と心得違ひして見て居つた、即ち兒童の答が間違つたのでなくて博士の方が間違つて居つたと云ふことが判つたので、私は其のことを申すと、例の兒童はハア／＼貴



方は白痴でしかと云ふて大笑ひしたことがある。痴兒と雖も一方には斯くの如く傑出した頭腦を持つて居るものがあるが、奇蹟なことには、他の一方の缺陷部に向つて教育を加へると、それが發達し次第に妙に前の出た部分で平凡化するものである。

### 教育の必要

一概に痴兒と云ふと或る保護を與へ居る外別に手の施し處がない様に世人は誤解して居るが決してさうではない、大に教育の必要がある。白痴教育は一方に於て白痴の豫防教育ともなるものである。身體の弱い者が運動遊藝其他の有力なる體育によつて、段々と健康になり行くことの出来る如く、精神の足らぬものも其程度と訓練の如何に依りては追々と明確なる方に近いて来るのである、故に白痴の教養所から普通の小學校に轉學した實例は幾多もある、然る白痴の名を冠らしめて教へず育てずして一生を穢れ穢まる境遇に終らしむるは如何にも不憫なことである。此點は歐米などはなく至れり盡せりて、米國にては少くとも各郡に一ヶ所の白痴教養所が設備されて、多し所には二千五六百名位の痴兒を收容して居る、それから名稱は郡立であるが、經費は

歐て慈善家の喜捨で辨じて居る、また別に痴兒の検査とか調査とか云ふ制度はないが、白痴教育思想の普及された結果苟くも一度や二度はそれらの専門家の手に觸れない痴兒はないと云ふ有様である英、佛、米等の白痴學者の統計に依れば、人口五百に對して一名の白痴を有することゝなつて居るから我が日本にも八萬から十萬の痴兒が居ることゝ考へらるゝが、之れに對して未だこれぞとした定案も方針も耳にしたことがありません。痴兒には懦弱性と興奮性と二種あり、また同じ懦弱性にしても個人々々によつて種々異つて居るから、教育は無論一人々々の教育をしなければならぬ、假へば食堂に於て食事の鈴が鳴つても自分が飯を食ひたくて仕度がないが、自ら立つて行くと云ふ氣力が無い、唯泣いて居る、また子供が室内に於て面白想の遊戯するのを窓外に見て自分も一緒に入つて遊びたいが矢張自分から入る丈けの氣力が無いと云ふのは、懦弱兒の常であるから斯様の時に卒ろから推してやるとか、或はさあ一緒に行きませうと手を取つてやると非常に喜んで飛んで行く、また蒲團を敷くのが出来ないで眠いのを我慢して泣いて居るものもある、斯様のものには優しく手傳つてやると追々には自分が先きに立つて蒲團を延べる様になりしまひには其人の顔を見ると先生蒲團を延ばませうと、自分一人でやる様になる。要するに痴兒の教育は心切と同情とは最も大切のことである。

それから興奮性のもの、これは性質破壊的に傾くもの故、其短處を長處に利用すると云ふのが教育の手段である、假へば無暗に物を壊す兒を教育するには、教師が積木をして其子に壊はさす、それを既々やつた後で少し積み方に手傳つて呉れと云ふと壊はすのが面白さに積む様になる、かうなればしめたものだ、破壊的が建設的になつたので教育の目的の一步を達したもので、追々には壊はすよりも積む方が面白いと云ふ風になりそれに連れて總ての方面も建設的になつて来る、それから衣服を破るもの其他も此の心持で教育するので、然も懦弱性よりも興奮性の方が教育もし易く、また其効果も著しい。

痴兒は十人が十人まで此兒はどうも他の子供と一緒に遊ばないのが不思議ですと云ふが、これは他の普通兒と一緒になつたとて彼等の云ふことなすことは少しも了解が出来ないので、つい一人ぼつちになつて了ふ自分より優れたものと一緒に居れば追々に進歩するとは、模倣性の完全に發育した普通兒のことで、痴兒には悪い結果こそあれ、決してよき結果は得られぬ、要するに同程度の人間同趣味の人間と交はるのは最も楽しいものである。

### 痴兒と教育の影響

普通に發育した兒童でさへ少しく教育が過重であると神經衰弱を起すとか何とか不良の結果を呈するから況して普通人より數等も劣つて居る痴兒に教育を施しては定めて悪い結果が表はれるであらうと思ふ人が無いでもあるまいが、事實は全くこれと反対の現象を呈して、秩序ある教育を施すと云ふことは非常に好結果を奏するものである。此の著しい例を擧ぐると米國に於ける余が在學せる學校などで、明日は運動會と云ふ日に、癩癩性の兒童に向つて若し癩癩發作をやれば、運動會に連れて行かないと云ふと何時も起る癩癩が決して起きない、それから本園に收容せる一兒童で一ケ年中の癩癩發作が一千二百十回あつたものがある、今其發作數を別にして見ると、

科	内
一月	七十八回
二月	九十五回
三月	七十八回
四月	百〇二回
五月	百〇一回
六月	九十六回
七月	百二十七回
八月	百三十回
九月	百三十一回

十月 九十三回

十一月 八十四回

十二月 九十五回

と云ふ區別で、七八から九月にかけて發作數の多いのは暑中休暇で學課を休んだために多かつたのである、即ち課業のある月に發作少く、休業の月は發作が多い此一事で以て秩序ある教育は少しも害がない否病氣に向つても良い効果を得ると云ふことが判るのである、尤も時候と發作との間に關係があれば格別だが、今日まで右の說を發表した人のないのを見れば、余が說の誤りならざるを信するに足るのである。これはまた一ヶ月の内でも授業した日と休業との日で差別があるのを見ても判る、要するに秩序正しき教育は癲癇發作を減すると云ふことは事實である。

癲癇性の兒童には規則正しく然も疲勞せぬ程度に於て勉強せしむると云ふのは唯一の療法である、それには朝起きる時間、便通の時間、食事の時間、學業、運動、娛樂、睡眠等の時間を一定して規律ある生活をたさしむるので、現に余の處に大體から托された兒童で大學から授業しながら此規律的療法を施して居るものもある位である。

## 第二章 呼吸器の疾患

### 第五十六節 急性喉頭加答兒と其治療法

◆原因 感冒は最も繁類なる原因である、其他急性傳染病、假へば麻疹、痘、インフルエンザ、猩紅熱、丹毒に續發し、鼻腔及び咽頭の炎症に繼起し、また刺激性蒸氣の吸入、過度の咆聲、過度の發聲及び謔吟等も亦本症の原因となるものである。

◆症候 本病の主徴は聲音の變化であつて或は鈍濁となり、或は粗糙となり、甚しきは全く嘶嘎れ、聲が出なくなることもある、そして喉頭部に灼熱、乾燥、創を被りたる様の感があつて嚥下時に疼痛を發し、其他類繁なる咳嗽と喀痰を來すものである。

全身症としては、丁度熱性の傳染病に於ける如く悪寒があつて熱が出、頭痛甚しく、全身倦怠甚しく、時としては喉頭より出血することもある。

◆経過 多くは数日にして終るものであるが、稀に二週以上互ることがある。

◆療法 先づ其原因を除き、温暖なる室に静養せしめ、また談話、發聲を禁じ、頭部にはブリスニツツ氏巻法を施し、1%食鹽重曹水の吸入を行はしめ、咳嗽刺戟甚しきものにはモルヒネ、ヘロイン或ハコカイン等と與ふるも通常醫家の用ひる處方は左の通りである。

- ▲ゼネガ根浸(四、〇) 一〇〇、〇 燐酸コデイン 〇、〇一五
- 杏仁水 四、〇 單舍利別 八、〇
- 右混和一日量一日三回分服
- ▲食鹽 三、〇 結晶重炭酸ナトリウム 三、〇
- 水 三〇〇、〇 杏仁水 三、〇
- 右混和吸入料、一日數回

### 第五十七節 慢性喉頭加答兒と其治療法

◆原因 急性症が充分癒らない爲めに慢性症となるものが最も多く、其他職業的疾患として居常大聲を發するものに來り、また心臟病、呼吸器病等の慢性症の經過中に併發し、或は稀に梅毒に併發することもある。

◆症候 喉頭部に乾燥、辛辣の感があつて、聲音は嚙嗆し、咳嗽は何時まで經つても止まらず、粘稠なる喀痰もまた同様に出て、喉頭の粘膜は肥厚するものである。

◆養生法の療法 流行性感冒とか、麻疹とか云ふ病氣のある爲に起る喉頭加答兒なれば、其原因が癒らぬ間は矢張り喉頭の方も癒らぬが、飲酒とか喫煙とかの爲めに起つたのであつたならば、先づ其原因を去ること、即ち飲酒喫煙等を禁ずるのが何よりの療法である。一體此病氣は土官、演説者、活動辯士、學校教師等常に大聲を發する人、または飲酒、喫煙の習癖ある人、或は常に寒氣に抵抗する職務に在事する人、假へば電車の運轉手等に多いものであるから豫防法としては、飲酒、喫煙等の原因を避け、また常に頸部の冷水摩擦を行ひて、喉部の強壯を計りまた既に本病に罹れるものにあつては、成るべく、温き室内に居る様に心がけ、高聲の發音を慎み、百倍の食鹽水または百倍重曹水の吸入、百倍枯礬水若しくは五十倍鹽刺水の含嗽に兼ねてルゴール氏液の塗附を行ひ、頸部には濕布繻帶を施し、飲食物は總て暖きものを用ひるがよろしい。

若しまた喉頭の抵抗力が弱くて、毎年冬季になると、咳嗽が出ると云ふやうな人であつたならば、寒中は成るべく温暖なる温泉地へ轉地遊樂するが宜しい。

### 第五十八節 喉頭腫瘍と其治療法

- ◆種類 喉頭の腫瘍には良性のものと、悪性のものとあるが、良性のものには、
- ◆乳頭腫 これは喉頭腫瘍中最も多きものであつて主として幼年のものに來り、乳頭狀花椰菜狀の新生物となつて現はるゝものである。
- ◆纖維腫 も亦頗る頻繁なるものであつて、主として壯年者を襲ひ、圓隆帶、モルガニー氏室の深部、或は會厭軟骨の基底に發するものであつて、喉頭息肉と通稱するものゝ多くは此纖維腫のことである。
- ◆粘液見肉 は上記の二者に比すれば稀れであつてモルガニー氏室、會厭に發するものである。
- ◆悪性腫瘍 喉頭に來るものは、肉腫、癌腫の二種である。
- ◆肉腫 多くは會厭に發するものであるが、癌腫に比すれば遙に其數少きものである。

- ◆癌腫 は主として老人に發するものであつて、喉頭自家に發するものもあれば、或はまた他の部の癌腫に擴發するものもある、其主要なる症候は聲音の啞れること、嚥下が困難になつて、そして喉頭に疼痛があること等で、遂に患者は全身衰弱、瀕死の下に發するものである。
- ◆療法 良性腫瘍にして小なるものになつては、格別の障害を來さざるものであり、また大なるものにあつては、手術によつて之を摘出すれば、治癒に至るものであるが、悪性腫瘍に至つては、殆ど如何ともなし難きものである。

### 第五十九節 喉頭結核と其治療法

- ◆原因 喉頭に原發するものは殆ど稀れであつて多くは肺結核に續發するものである。
- ◆症候 喉頭に疼痛、聲音啞れ甚しきは全く聲が出なくなり、咳嗽、喀痰を發し、喉頭には疼痛があつて物を嚥み下す時には其痛みが殊に劇しい、患者の全身状態は漸次侵害せられ、遂に原發性たる肺結核、または喉頭水腫を發して死に至ることが多いものである。

◆療法 全身療法としては、肺結核の節下に記載せる療法を試み、局處療法として醫家の賞用する處方は左の二方である。

▲ヨドール 九、九 薄 荷 膠 一、〇

右混和撒布

▲七〇%乳酸液 五、〇 二〇%コカイン液 五、〇

右混和潰瘍塗布

### 第六十節 喉頭梅毒と其治療法

◆原因 全身梅毒に於て發するものであつて、第一期に發するものは極めて稀れに、主として第二期・第三期に發するものである。

◆症候 全身梅毒の第一期に發せるものにあつては、會厭部に扁平なる潰瘍を形成し、其邊は隆起して硬固となり、基底に汚穢の被蓋を有し、周圍は發赤するものである。

第二期に發するものは、扁平贅肉であつて、所患粘膜に炎症性の腫瘍と潮紅とを來し、聲音が嘎れて來るものである。

第三期にあつては、喉頭に護膜腫を發して、追々に化膿に陥り、潰瘍の邊縁は深く切除せられたるが如き状態を呈し、基底に豚脂様の沈着物を有し、悪臭ある膿様の痰を咳出す、嚥下に困難を來す、聲音の嘶嘎を招き、疼痛は全く無きか、若しあるも輕きものである。

◆療法 全身梅毒療法を施すの外、第二期にありては一萬倍の昇汞水吸入、第三期にありては、二百五十倍乃至五百倍ヨードカリウム溶液の吸入を施すがよい。

### 第六十一節 急性氣管枝加答兒と其治療法

◆原因 本病は頗る多き病氣であつて、寒胃、刺戟性瓦斯の吸入、沃度加里、臭素加里等の服用によつて來り、また麻疹、疫咳、インフルエンザ、腸管扶斯、癩疹、癩疹、チフテリ等に起り、また鼻腔、喉頭等隣接氣管の炎症傳播によつても發するものである。

◆症候 氣管枝加答兒と云ふと、氣管枝に寒胃を惹いて其處に炎症を起すのである。氣管は喉頭から肺臟に續いて呼吸をする管であるが、此内側の粘膜炎が寒冷や其他の刺激があると炎症を起して腫れ上り、血液の循環を害し、靜脈の腫血を起せる結果、粘膜炎に分泌物を増して痰となり、ゴホン／＼と如何にも苦しい咳嗽を發し頭痛を感じ、體温が昇る、即ち立派な氣管枝加答兒となるのである。

氣管枝加答兒も軽くて済めば、大したことが無くて済むが、急性のものを放置して置くと氣管枝肺炎と云ふ恐ろしい病氣に變症することがあり、よしまた變症しなくとも慢性に變ずると身體を弱くする原因となり従つて肺結核等にも罹り易くなる。それに小兒が此病氣に罹ると、毛細氣管枝炎と云ふて、氣管枝の種々先きの小さい枝に分れた處にまで炎症を起して、呼吸が困難となり、窒息の状態に陥り遂に不幸の轉歸を來たすことがあり、なか／＼厄介な代物である。

◆豫防法 本症や喉頭加答兒は、高年の人、年少者皮膚の弱い人、呼吸器の弱い人等が罹り易いのであるから豫防法として、冷水擦擦、冷水浴、深呼吸等によつて呼吸器を強壯にして置くが宜しい、よく人のやる頸巻、あれは斷じていけない、日本の習慣として人に逢ふとき、室内にある時等は頸巻をせざるが作法であるから、

生中あんなものを用ひると、頸部の皮膚を弱くして、頸巻を取ると直ぐに風邪を惹くと云ふ風になるものである。

◆療法 生來體弱なる者は、冬期及び初春に海岸に居住せしむるが宜しく、藥物は左の處方を用ひるものである。

▲アスピリン	〇、五	吐	根	末	〇、〇三
阿片末	〇、〇三	乳	糖		〇、五
右混和爲一包 臨時頓服		水			二〇、〇
▲サリチル酸ナトリウム	一、〇				
赤	酒				一〇、〇
右混和、臨時頓服					

それから尙ほ濕布と吸入とを兼ね行ふが宜しい、濕布と云ふのは、清潔な「フランネル」か「リント」を冷水に浸して軽く絞り、咽喉に緩く巻きつけ、其上に外科用の油紙で軽く細帯を巻き、そして温かい室に靜に寝

るのであるが、小児の毛細氣管枝炎の場合には、上胸部四分の一位の所から、上方頸部まで濕布を施すと宜しい、濕布の水は體温に温められて乾くから乾かない中に度々取代へるのである。また吸入薬は百倍食鹽水、百倍重曹水を用ひるのである。

### 第六十二節 慢性氣管枝加答兒と其治療法

- ◆原因 急性氣管枝加答兒に續發するものが多く、或は久しく塵埃、刺戟性瓦斯を吸入する爲めに起るものもある、其他職業的加答兒となりて、磨工、紡絲工、剥皮工、輕皮工者に來り、其他飲酒、喫煙を嗜む者に起るものである。
- ◆症候 咳嗽と喀痰は主要なる徴候であつて、殊に朝夕に多いものである、喀痰の量は種々あつて、時に或は缺如することもあるも、大抵は其量甚だ多きものであつて、強度のものにあつては少量の血液を混することもある。
- ◆豫後 本病は頗る頑固なる疾患であつて、其害因を除かざれば癒らぬもので、殊に高齢者にあつては往々生命の危険を醸すものである。

◆療法 其害因を除くに力め、海岸に轉住せしめて氣候療養を行はしめ、分泌物過多なればアルピン油の吸入或はミルトールの内服を與へ、尙ほ急性症の療法に準じて養生を行ふがよい。

▲ミルトール 〇、一五

右入膠囊一日數回一箇づ

### 第六十三節 臭き痰の出る病氣(腐敗性氣管支炎)と其治療法

◆原因 氣管枝擴張または肺の疾患に續發し、また慢性氣管枝加答兒の經過中に、腐敗菌の侵入あれば本病を喚起するものである。

◆療候 喀痰の性状は特有なるものであつて、それは丁度腐肉様の膿透性臭氣を放ち、其量頗る多いものであつて、これを一器中に放置すれば三層に分るゝものである、即ち最上層は泡沫より成り、第二層は汚穢緑色の粘液様な痰液より成り、最下層は濃厚なる膿液層である、そして其量は頗る多大なものであるから、醫家はこ



れを満口性咳出と名づけて居る位多いものである。

本病は慢性の経過を取るものであつて、遂に化膿性肋膜炎、肺壞疽、肺炎等を後發することがある。

◆療法 防腐的薬劑によつて喀痰の腐敗を防ぐが宜しい。即ち石炭酸、オイカルプト油の吸入、ミルトール（前節にあり）テレピン油の内服等を處するものである。

▲石炭酸 二、五 水 五〇〇、〇

右爲吸入料

▲オイカルプト油 一〇、〇

右爲吸入料、十滴を一盞に盛り熱湯を注加して之を吸入せしむ。

▲テレピン油 一〇、〇

右一日二回七滴づゝ牛乳に混じ服用

### 第六十四節 纖維素氣管枝炎と其治療法

◆原因 眞の原因は不明であつて、從來健康なる人體に俄然として發するものである、また本症は遺傳の關係はあるものにて、肺疾患、傳染病に續發することもある。

◆症候 俄然たる發熱、咳嗽、胸痛等あり、また纖維素性凝固物を咳出するものであつて、此凝固物を全氣管枝の樹枝狀を呈し、其長さ十五仙迷の大に至ることがあるが、これ即ち本症の特有なる症候である。

◆後發 本病の四分の一は死の轉歸を取るものであるとの統計的報告がある。

◆療法 氣管枝凝固物の融解を謀る爲めに、左の藥物を處するものである。

▲石炭酸 水 五〇、〇

右爲吸入料、一日數回吸入

▲重炭酸ナトリウム 水 一〇〇、〇

右爲吸入料、一日數回吸入

### 第六十五節 氣管枝擴張と其治療法

◆原因 慢性氣管枝加答兒、疫咳、慢性間質性肺炎、肋膜炎性癒着等に發し、また久しき咳嗽殊に頑固なる疫咳は比較的多く本症を誘發するものであつて、大くは下流社會の男子に發するものである。

◆症候 咳嗽は特有なる症候であつて、其量頗る多く所謂瀆口性咳出である、またこれを一器内に放置すれば洶沫層、粘液層、膿液層の三層に分るゝものである。其他患者の營養は障害せられ、顔貌は蒼白となり、食思は缺損する等の症候を呈するものである。

◆療法 原因を除き、また分泌を抑制する爲めに左の藥劑を與へ、時としては外科的手術によつて患部を切開し、以て其治癒を計ることもある。

▲テレピン油 五、〇      ペールバルサム 五、〇

ミルトール 五、〇

右混和液、一日數回五六滴を布片に滴着して、吸入せしむ

### 第六十六節 喘息と其治療法

◆原因と種類 喘息には眞の喘息即ち氣管枝喘息と症候的の喘息即ち老人の慢性氣管枝加答兒或は肺氣腫などから起るものもあれば、また一種反射性の喘息と云ふて鼻腔とか子宮とかに異常のあつた場合に反射性に喘息發作を起すものである、また草花の匂ひなどを嗅いで起る一種特異性の喘息もあるが、反射性の喘息は其原因を去る、即ち鼻腔或は子宮の病氣を治すれば直ちに全治するものであるが、眞の喘息に至つては、其原因の不明なると共に其療法も殆ど不明である。

◆症候 眞の喘息は、外にこれぞと云ふ病氣もないのに突然起つて來て、病が起ると呼吸困難殊に呼吸に困難を覺え、一種異様の高聲を發するので、此特異の音だけでも直ぐに喘息と云ふことが分るものである。そして劇しくなると物云ふことが出来ないばかりで無く、甚しく苦痛を感じる爲めに、始めて見る人は一命にかゝるかと思ふ位のものであるが、發作が止れば打つて變つて元氣も良くなり、前にあつたやうな危険の徴候は少しも無くなる、尤も後に多少の咳嗽と、いくらかの喀痰等を殘すが、病氣の發作中には咳嗽も喀痰も全く無いこれは他の呼吸器病と異なる處である、それに多くは熱も無い、一種異様の病氣である。そして其發作は短きは十數分より二三時間、長きは兩三日に及ぶものもあるが、普通は數時間にて止まるものである、また其度數

は月三回のものもあれば、或はこれより頻繁なものもあり、中にはまた年に何回と云ふ位しか起らぬものもある。

この病氣は、年齢は二十歳より四十歳の間に多く老年には極少いものであるが、幼年者稀れには一二三歳の少兒にも起ることがある。男女の關係は、男は割合に多く、中には遺傳するものもある。また神經質の人には多い傾きがあるが、其他に原因不明のものもある。

◆養生法 喘息に罹つた人は、どういふ風に養生すれば宜しいかと云ふに、これぞと極まつたことはないが、先づ身體と精神とを力めて安靜になし、飲食物を節制すると云ふことは一つの注意である。氣候の關係は住所を換へて癒つた例はあるけれども、如何なる氣候が適するかは不明である、人によつては温かい處の宜いものあれば、また其反對に寒い處の方が反つて適する人もあるが、併し概して云ふと、空氣の濕潤、氣候の變り目等は病氣によくない、轉地も良いには相違が無いが、これも海濱の適する人と、山地の宜しき人とあつて一概に云はれないから、各自に適する處を選むより外に致方があるまいと思ふ。

◆後 喘息は發作時には甚だ危険の症狀を呈するも其れが爲めに一命に罹ると云ふことは普通無いもので一

定の時間を経れば緩解するものであるが、眞の全治と云ふものは割合に少い、併し全く無いと云ふ譯ではない矢張癒るものもある、就中小兒時に發病したものは結果は宜しい。此病氣は前にも述べた通り身體に病變なくして起るものではあるけれども、發作が度重ると餘病を起し、肺氣腫などを續發することがある。

◆療法 喘息の治療法に完全なものはない、併しながら病勢によつて既定の治療法によつて癒るものもあるし起つた時には麻酔薬によつて緩解するものである。併し茲に注意すべきは、發作が度々起る、麻酔薬が其都度効を奏することより、麻酔の効に甘へて、其れが習慣となると、遂には恐るべき中毒症狀を起すことになる、此場合はモルヒネ中毒を起すことが多いもので、終には自分でもモルヒネを用ひねば堪られぬと云ふ状態に陥るものがあるから、これを豫防する考を以て治療に従事せねばならぬ。それからまた民間には喘息療法と云ふものがあるが、これは一概に効が無いと排斥の出來ぬ理由もある、と云ふのは、喘息云は神經性原因もあるから、一種の變つた治療法を行ふと、其變つた治療法は神經性に働いて治療の効を擧ぐる場合もあるからである、併し其利く理由は右の通りであるから、此療法に誰にても利くと云ふわけではないによつて、甲の入が癒つたからと云ふて、乙の人にも利くと思ふのは間違である。

米國のヘーア氏は、本病發作を遏止し、且つ治癒せしめんが爲めに一種の錠劑を製出し、喘息錠と名づけ本病に効あることを報告して居る。其處方は左の通りである。

▲ヨードカリウム 〇、一三

ロベリア丁幾 二滴

ブロームカリウム 〇、一三

オイフオリチ流動エキス 三滴

ニトログリセリン 〇、〇〇〇三

右一錠量一日三回一錠乃至二錠宛

また近時ロエントケン氏の透射線（X光線）療法を試みて奏効せる報告は澤山にある。

### 第六十七節 肺氣腫と其治療法

◆原因 本病は肺臓の弾力の減弱者しくは亡失によつて來るものであるから、此關係に於ける諸般の害因は皆本病を來すものである、即ち老年に於ける彈力減弱、諸吟、吹奏、演説、荷重、登山等の職業的勞實作用、氣管枝加答兒、氣管枝喘息等は本病の原因となるものである。

◆症候 本病の主徴は洋櫛の如き胸廓であつて、胸廓を前方に突出し、頭部を後方に傾倚せしめるものである。そして患者は靜止時には格別のことは無きも、歩行、昇降、荷重等の運動を爲せば、容易に呼吸促進を來すに至る。

◆療法 ワルデルブルク氏の氣槽、トラウベ氏の胸廓壓迫器等を用ひて空氣療法を施すにあり。

### 第六十八節 加答兒性肺炎と其治療法

◆原因 加答兒性肺炎は一名氣管枝肺炎または小葉性肺炎と云ふて、氣管枝から段々肺胞の方に炎症が移つて行くもので、壯年血氣の人よりは、小兒や老人に多いものである。そして其多くは麻疹、痘瘡、痲疹、流行性感冒、實扶埃里、猩紅熱、毛細氣管枝炎等に屬するもので、殊に氣管枝加答兒を疎末にした場合に多く起るものである。其他異物の吸入によつて起ることもあり、其發病素は肺炎重球菌、連鎖狀球菌其他の分葉菌である。

◆症候 其始め病の未だ劇しくない時分には、一寸風邪を惹いて咳嗽の少し出る位のもので、其病勢の進み方

も至極緩慢であるが、気管枝から肺に進んだのを見分けるには、元來氣管枝だけに加答兒のある時には熱の無いものであるが、それが肺に進むと熱が出て来る、即ち不正なる弛張熱三十九度内外に昇り咳嗽及び粘痰、膿痰の痰を咯き、また呼吸困難、全身蒼白色を呈するものである。

それから小兒の肺炎であると、患兒は氣分が悪しく元氣も無く、平素のやうにニコ／＼した顔貌も無く、一見どこかに病氣のあるやうな顔色を呈して居る、そしてこれが一層劇しくなると呼吸がせわしくなり、晝夜共に安眠すること無く、咳嗽も頻りに起り哺乳力も減じて来る。またそれが益々劇しくなると、終には炭酸中毒を起して蒼白色であつた手足の指の先端或は口唇などが紫色を呈するやうになるが、此等は最も危険なる徴候であつて、終りには脈も悪くなり、心臓麻痺に陥り死亡するに至るものである。これは無論惡症の場合のときのことであつて、輕いものならば治療其宜しきを得れば無論治癒に至るものがあるが、元來本症は重病の一つであつて、小兒の疫咳及び麻疹に續發するものは、多くはそれが爲めに死の轉歸を取り、また老人にあつても屢々生命の危険を伴ひ、また經久性のもにあつては、多くは肺結核を後發するものがある。本症の經過は急慢種々あつて、短きは四五日より長きは二三ヶ月に亘ることがある。

◆療法 空氣流通の佳良なる室内に臥褥せしめ、小兒にあつては全身温養法を施し、若しくは一日二回列氏二十六度乃至三十度の温浴を取らしめ、頭部に冷水を灌漑し、また胸部に芥子泥の貼用を施すがよいまた醫家の實用する藥物は種々あるも、左に其一例を掲げん。

▲セネガ根浸(四、〇)	一〇〇、〇	ピラミドン	〇、三
杏、仁、水	四、〇	安息香酸ナトリウムカフェイン	〇、八
單、舍、利、別	八、〇		

右一日分一日三回分服

第六十九節 格魯布性肺炎と其治療法

◆原因 本症は頗る頻繁なる傳染病であつて、一種の病原菌即ちフレンケル氏肺炎重球菌によつて發現するのである。

◆症候 多く青年男子に發し、殊に極めて強壯なるもの、若しくは衰弱者、老年及び酒客に於て頻繁に起るもの

のであつて、散在性或は流行性に發生し、春期に於て頻發す、また一度本病に罹れば屢これに罹るの傾向を有するものであつて、一生の間に十回本症を患ひたる實例がある。

本症の起るときは、多くは俄然たる戰慄を以て起り、次で高熱四十度若しくは四十一度に昇りて、患者は胸部に刺痛を訴へ、全身倦怠、頭痛、食氣亡失及び鑵色の喀痰を咳出するものがある。小兒の格魯布性肺炎は殊に幼稚なる小兒に發するもので、大人に於ける如く戰慄が無くして突然高熱を以て起り、甚しきは其際に痙攣することもあり、八歳以下の小兒にあつては咳嗽のみにて喀痰を見ることは稀れである、尤も輕いのである。唯熱だけで他に肺炎の徴候の見えぬこともある。

◆經過 格魯布性肺炎の其他の症狀は咳嗽に呼吸せわしく、殊に一種衝くやうな痙攣狀の呼吸をするものであるが、追々に輕快すると熱が下つて總ての症狀も快くなる、そして其熱の下り方は加答兒性肺炎の方は段々と下る。即ち三十九度のものが八度五分になり、八度になると云ふ風に下るものであるが格魯布性肺炎の方は分利と云ふて急に下る、即ち四十度より急に三十七度以下に下ると云ふ風の下り方で、熱が下れば病氣は良くなつたものと見ても差支が無い、尤もこれは病氣の良い側を云ふたので、悪い方になると、痙攣、腦膜炎等の

腦症を發するばかりで無く、遂には心臟麻痺を起して死亡するに至るものである。

◆療法 定型性のものであつては、平臥安靜の外殆んど治療を施さぬも宜しきものであつて、唯對症的療法として、胸痛甚しきものには絆創膏の一片を患側の肋骨に直角をなして貼展し、または氷葉を以て冷しても宜しい。其他左の處方を費用す。

▲オキサフォル 一〇、〇

右一日三回二十滴乃至三十滴蒸餾水に滴落して服用

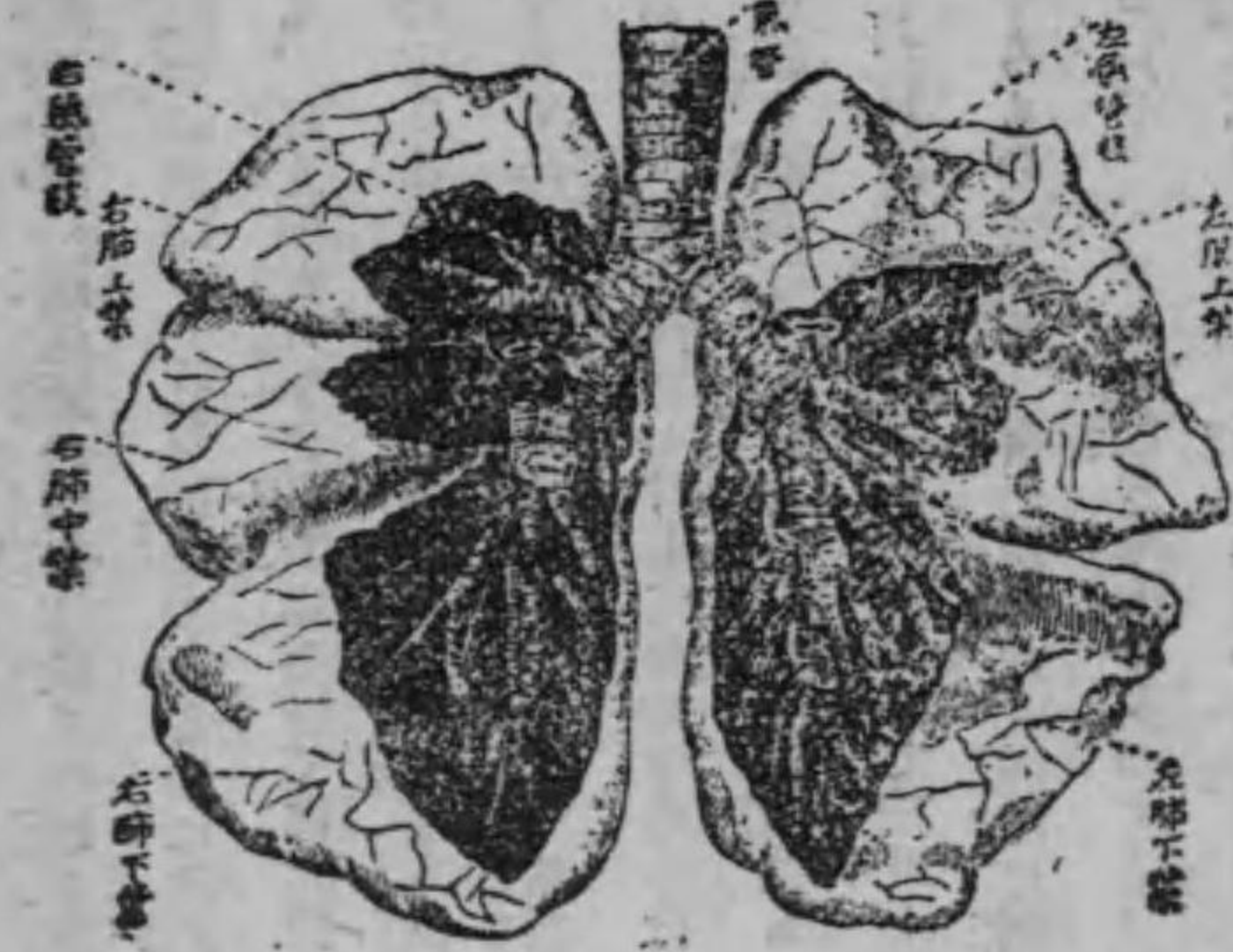
### 第七十節 肺結核と其治療法

◆肺病と結核菌 よく素人が肺病と云ふてとを云ふが、一體肺病とは肺に來る處の總ての病氣のことであつて假へば肺炎も肺病、肺結核も同じく肺病の一種である、併し俗に云ふ肺病、即ち我々の云ひ馴れ、聞き馴れて居る處の肺病は肺結核と云ふて、結核菌と云ふ一種の細菌によつて起る處の肺の炎症にて打捨て置けば終に肺に空洞を拵へて其人をして死に至らしむる處の恐ろしき病氣である。最も結核菌は獨り肺に來るばかりで無

く、喉頭を侵せば喉頭結核、腸を侵せば腸結核と云ひ、其他腸胃、皮膚等も矢張り侵されるものであるが、其中最も多く侵される處は肺臓であつて、結核と云へばア、肺病のことだなどと、素人までも知つて居る位のもので肺癆、癆瘵「フチジス」「ツベルクル」「コンサンブション」など云ふは皆肺病のこと、肺尖加答兒、肺浸潤など云ふは、此肺病の初期のことであるが、此病氣に罹るもの、數は頗る多く、全人類の大多數は殆んど此病氣に罹らぬものは無いと云ふても良い位に多くある病氣である。

此恐るべき肺病を起す處の結核菌と云ふものは、どんなものであるかと云ふに、肺病患者の喀痰中には其數幾百萬と無く見出さるる(一塊の喀痰中三億萬個を含む)下等植物であつて、菌の種類であるが、其形細微なるが爲めに、肉眼にては到底これを見ることが難く、これに一定の方法によつて色を付けて五百倍の顯微鏡に照らして検査すると、丁度毛髪を細断せるが如き形状に見ゆるものである。そして此細微なる結核菌は、若し其の一個にても、其發育に適當なる場所、假へば暗き人の肺臓内に附着する時には、丁度餅の菌が繁殖するが如くに發育増殖して、遂に肺結核を起すものであるが「コレラ」菌や「ペスト」菌の如く一二日の内に發育するものではなくして、半ヶ月乃至一ヶ月の間に徐々に發育するものであるから、従つて此等の病氣の起るよりも

肺の構造



肺結核の起るの途に緩慢なるものである。

小氣管枝と肺胞



◆結核菌の壽命 結核菌の發育は斯くの如く徐々であるけれども其抵抗力は甚だ強硬である、彼のベスト菌やコレラ菌の如きは、これを乾燥するときには忽ち枯死するに至るものであるけれども、結核菌は假令これを乾燥するも、日光の射入少き場所にあつては、三ヶ月乃至三ヶ年の久しきに亙るも、尙ほ且つ生存して其毒性を保つものである。此乾燥に堪ゆる力は即ち本菌の恐るべき特性であつて結核患者蔓延の主なる原因は實に此理由に存するものである。其他水中、土中、氷雪中或は下水、便所等に於ても矢張り數ヶ月生存することを得るのであるから、痰を消毒せずして棄却するのは何れの場合を問はず甚だ危険であることを知らねばならぬ。

斯くの如く頑固なる抵抗力を有する結核菌も日光に對しては、其抵抗力は甚だ薄弱なるものであつて日光に直射せしむれば一時間乃至五六時間にて枯死し、屋内等に於ける散光線に於ても、二三日乃至九日間にて大抵枯死するものである。併し單純なる温度に對しては他の細菌よりも耐久力の強きものであつて、腸チブス、赤痢、コレラ、ペストの如き細菌であつても、羅氏の六十度即ち華氏の百四十度の温度に達せば十五分間位で死んで了ふが、結核菌は羅氏の七十度即ち華氏の百五十八度の温度に達しても三十分乃至一時間位経なければ死なぬものであるけれども、若しこれに亞爾加里性のものを加へる、即ち七十度の温度に曹達を入れ、其中に

結核菌を入れると忽ち死滅するものである。

◆結核患者蔓延の有様 凡そ如何なる病氣にても人に損害を與へぬものはないが、中にも人の生命と財産とを奪掠して、尙ほ且つ其餘毒を近親は勿論、社會公衆にまでも發して、益汎く蔓延し、傳染の徑路は極めて廣く、豫防頗る困難にして殊に難治の病氣とも稱すべきは肺結核であつて、人の最も嫌惡する病氣である、最近の統計即ち明治三十二年より四十一年まで、滿十ヶ年間に於ける肺結核患者の死亡數を見るに、三府一道四十三縣を通じて六十八萬三千九百七十六人、一年平均六萬八千三百八十八人（全死亡者の十三分の一）と云ふ多數を示して居る、此中最も死亡者の多いのは東京府の一年平均六千二百七十五人、大阪府の四千二百六十八人、最も少いのは宮崎縣の四百十人であるが、此等の死亡數は年一年増加の傾きがある。

歐米諸國にては結核は老人に多いが、日本にては壯年者に多い、これを陸軍側に就て見るに、現役兵即ち歳二十歳より二年或は三年間、人生中最も健康な時期にある兵員に於て、明治二十年には一萬人に就て十人の結核患者あつたのが、同三十三年には非常に殖えて一萬人に就て三十五人となつた、それから段々と殖えて、明治四十二年には兵員數千人に就て新患者三人九分九厘、同死亡比例一人六分、また結核の爲めに除隊になつた



ものは、千人に就て三十五八八分の比例になつて居る、即ち非常なる高速度を以て殖えて來て居る。また海軍の方も漸次に殖えて明治四十二年には、兵員千人中新患者、八人三分四、同上死亡比例〇、四九、兵役免除は同じく毎一千に就て七人五分四と云ふ割合になつて居るから、其全數は實に莫大のものと云はねばならぬ。

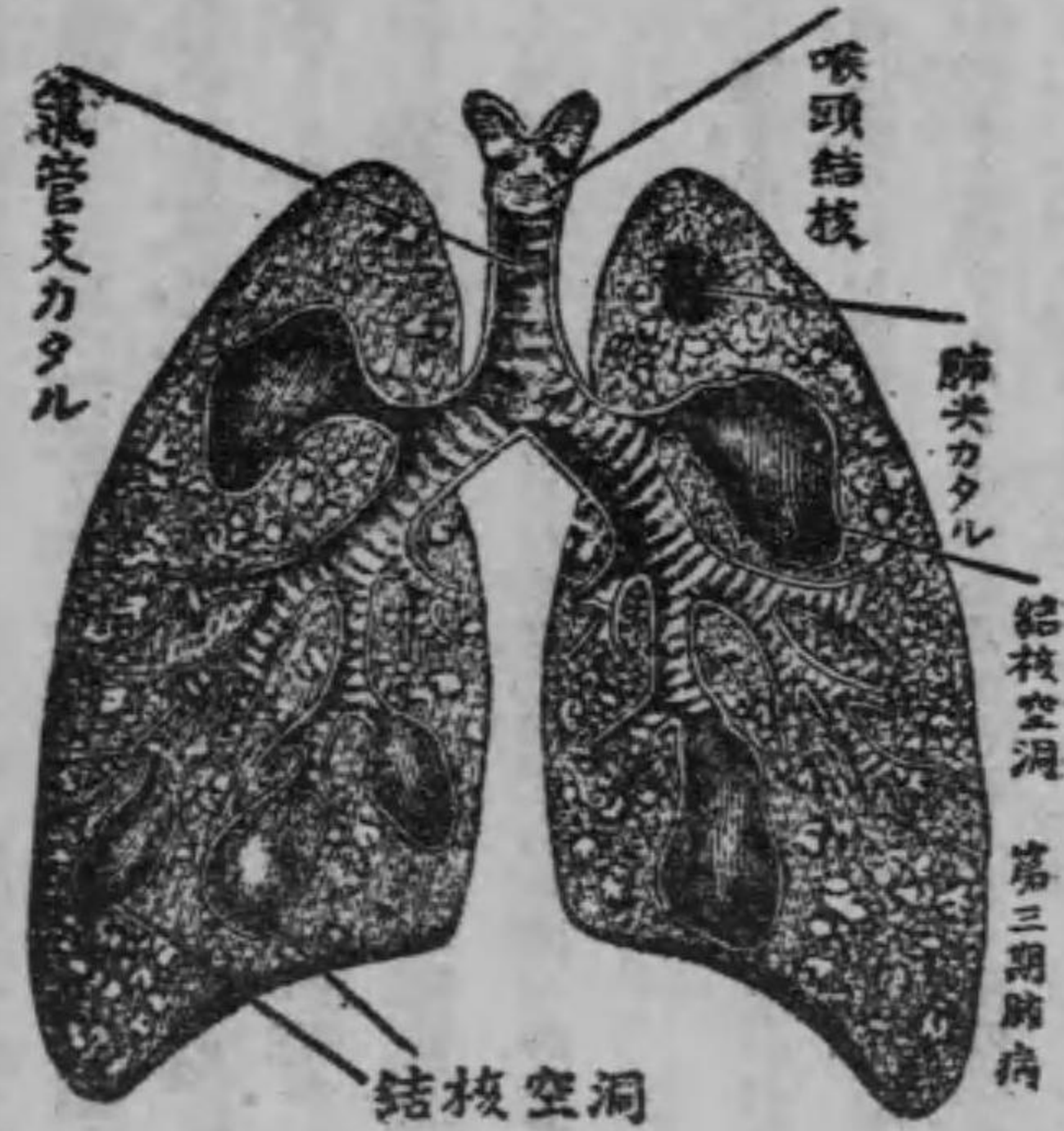
世間の人はコレラやペストが流行すると非常に恐怖するが、これが爲めに犠牲に供せらるゝ人命は割合に多くない、明治四十三年には、日本内地のみにて八種傳染病に罹つたものゝ總數は九萬一千六百七十一人にて、其内二萬二千七十二人程死んで居る、然るに同年に於ける肺結核死亡者の總數は、七萬六千五百八十九人だから、其數は八種の傳染病にて倒るゝものゝ總數よりも非常に多く、この慘害は今尚ほ繼續し、今後も尚ほ繰り返さんとするを思へば、其及ぼす處の影響は容易ならぬものでない。實に今日迄世界に行はれたる如何なる大戦争と雖も、肺結核の如く無數の生靈を奪ひ去つたものはない、實に恐るべき人類の大敵である。唯肺結核の經過は頗る長きに亘るのが常である爲めに、其毒の目目に映すること戦争の如く、また急性傳染病の如く驟然でないからして、人の注目も從つて嚴重ではないが、其及ぼす處の害は遙かに其上である。また統計の示す如く、此病魔の爲めに倒さるゝものゝ多くは、これより漸く世に出てんとする青年であるに至つては更に一

層の慘毒を流すものと云はざるを得ない、國家の生産力は、これが爲めに滅殺せられ、個人の財産はこれが爲めに消盡せらるゝ等其損害は實に計上すべからざる大數に上るものである。

◆肺結核は遺傳するか 結核は遺傳するものとは、久しき間人の頭腦にしみ込んで居つたものである、併しこれは決して遺傳するものではない。一體結核が遺傳するとせば、第一種蟲に結核があるか、第二種結核に罹つて居る卵が受播するか、或は母の胎内にある時に胎盤血行によつて結核を受くるか、此三つの内の一つで無ければならぬのであるが、これは事實に於てあり得べからざるものにて、換言すれば結核は遺傳するものではない。

◆結核に罹り易き人 肺結核は遺傳するものではないが、併し一結核は遺傳はせぬけれども、結核患者の子女は結核に罹り易い體質に出來て居ると云ふことだけは内外諸大家の均して認むる處である。然らば結核に罹り易い體質とはどんなものであるかと云ふと、胸の長き人、顔色は蒼白にして且つ細長き人、所謂身體の薄べつたき人、知覺の極めて鋭敏なる人、鎖骨上の凹み甚しき人、腋病質の人、爪は彎曲して指の尖端は丸く肉附いて短く、皮膚は蒼白く光澤ある人等は、此體質に屬するものであるから、此等の體質を有する人は大に

肺病患者の肺臓



注意を要するものである。

結核は結核菌の爲めに起る一種の慢性傳染病であるが、呼吸器、消化器等に病氣のある人、營養に障害ある人はどうしても結核に罹り易い、即ち此等は誘因となるものである。此等の病氣の中最も多く誘因となるものは肋膜炎で、肋膜炎の中には、既に結核が原因となつて居るものが多い、それから肺炎、流行性感冒、麻疹、百日咳等が結核の誘因となるものであるから、此等の病氣に罹つた人は大に注意を要するものである。

◆結核の侵入する門戸は三つ、結核菌が我々の

の身體に侵入する門戸は三つある、第一は呼吸によりて氣管より肺臓に入るもの即ち呼吸器傳染、第二は飲食物と共に胃腸内に侵入するか、或は食器其他のものより侵入するもの即ち消化器傳染、第三は皮膚及び粘膜炎の創傷より侵入する創傷傳染であるが、此三つのもの、内第一の呼吸器傳染は最も多い。一體結核菌は乾燥に對しては抵抗力が強いから、この痰が乾燥して空中に浮遊する塵埃になつて身體を侵襲する場合は非常に多いものであつて、結核菌が水分を有して濕つて居る間は傳染の機會は寧ろ少く、直接に痰を以て皮膚の創傷に觸附けるか、患者の咳嗽の場合に細菌を有する水滴が噴霧狀になつて出て來たのを吸入するか、または病毒に觸接することが多い場合、假へば結核患者を看護したとか云ふことからして傳染するのは別であるが、乾燥によつて空氣中の塵埃の中に浮遊して居るのを知らず識らず我々の呼吸器に受くと云ふ傳染の経路が尤も多いたからして停車場とか、其他轉地轉養地等で此等の機會に遭遇することが間々あると思はれる。野田防疫課長の嘗つて調査せる處によれば、我國に於ては人口の五十分の一に結核病があると云ふことであるから、人が千人集まれば其中に二十人の結核患者があるわけになるが、此等の人々は無意識に處處はす核を喀き散らすのであるから實に危険千萬と云はねばならぬ。

◆傳染の機會 肺結核は如何なる機會に傳染するかと云ふに、これに就て、大阪石神井院長が其判斷したるものを擧げたのを見ると左の通りであるから、從つて斯る場合には最も注意せねばならぬことも亦るのである。

一、嘗つて健康なりし家族の一人、偶然肺病に罹り次で其父母兄弟、姉妹に傳染し、遂には下下野等にも傳播し、數年乃至十數年間に終に一家滅亡せし例あり、これ最も悲惨の甚しきものなり。

一、學族肺病の爲めに死せし家を相續し、爲めに肺病に罹りし者あり。

一、肺病人の住居せし家屋に同居して、同病に罹りしものあり。

一、肺病患者を看護して感染せし例は最も多し。

一、學校の寄宿舎或は下宿屋にて肺病患者と同居し、又は別室にありしも常に患者に隣近して感染せしもの頗る多し。

一、肺病に罹れる夫に嫁して感染せし妻、また肺病を患ふる婦人を娶りて感染せし夫は頗る多數なり。

一、先妻が肺病にて死せし後に、新しく迎へし妻も同病に罹りて斃れ、夫の妻も、また其次も肺病にて死せしも、其夫は尙ほ健全なる二三の實例あり。

一、嘗つて健康なりし家族が、親戚、故舊の故を以て、肺患者を滯留せしめて感染せしものあり。

一、肺病に罹れる下下野を雇ひたる不注意の爲め健康なる家族中、殊に子女に傳染せし例亦少からず。

一、健康なる人、親戚或は友人の肺病患者を屢訪問して感染せし例亦多し。

一、役所、會社、商店、工場等に於て、其同僚中一人の肺病患者ありて、遂に數人に傳染せし例多し。

一、肺病にて死せし人の寢具、衣服、家具等を用ひて感染せし例あり。

◆結核の衣服傳染 結核はまた古着より傳染することが多い、これに就て瑞典國のヨゼフリン氏は警防の一助として古着類の賣買は必ず消毒を経べき警察令を出せよと云ふて居る。

衣服傳染に就て横手博士は面白き講話をされたことがある、曰く「昔し江戸の明曆の火事でありましたが、本郷圓山火事と云ふものがあつたさうであります、それを講釋其外の事に付いて見ますと一番初めに或嬢さんがあつて、それが振袖を持つて居つて大變大切に居つた、それが不忍池の側でどうかかるとか云ふやうなことがあります、其の嬢が癆症のやうな病氣で死んだ、然るに其振袖を非常に大切に居つたものでありますから、葬式の際にそれを棺の上に載せてお寺へ持つて行つた、お寺では其振袖を何處かへ賣つ

て仕舞つた、さうすると其翌年の同じ月同じ日になつて葬式があつた。其葬式を見ると、矢張り振袖と同じ振袖がかゝつて居る、病氣を聞いて見ると、ぶら／＼病で死んで仕舞つたのである、其場合にも寺では矢張り振袖を買つて仕舞つた、すると其翌年の同月同日にまた同じ振袖がやつて来て居る、一番初めの人の三週忌で、二番目の人の一週忌である、もう一つ同日同日に葬式と云ふので、三つの家族が寄り集つた、寺でも甚だ不思議だと云ふので皆な集めて見せると初めて拵へてやつた家、二番目にそれを買つたものも皆自分の家の振袖であるといふことになつた、それは甚だ不思議であるといふので御頭それを焼捨ることになつた、所が其振袖が風も無いのに飛ひ上つて其振袖の火から棟に燃えうつゝて大火事になつたと云ふ話がある。此話を説明するに元は何かの祟りである、不忍池の主の祟りであるといふやうなことを云ふて居る、色々牽強附會の説を唱へて因縁事にしてしまつた。唯これだけの話では甚だ其病氣は不思議である、併しながら今日の傳染病學的の眼を以て説明すると思ふべきでない、これは私一人の考へであるから少しこぢつてありますが、初めの娘さんは必ず肺結核で死んだに違ひない、其人が賞斷して居つた振袖でありますから、其振袖に結核菌がコテ／＼附いて居つたに違ひない、それをば第一番の娘さんが買つて、大變悦んで着て居つたのであるから其娘にうつて、肺病

になつて死んで仕舞つた、第三の人も同じやうな原因からうつて死んだものであらうと思ひます、同月同日に死んだと云ふことは説明に困るけれども、兎に角斯う云ふやうに説明すれば説明の出来ることで、私の憶測に止まるので、少し無理な解釋かも知れぬが、要するに斯様なことは衣服から傳染した所の一つの傳染病に違ひないであらうと思ふ、是等はつまり私の云ふことをば確かめる爲めに少しまづいけれども申上げただけではありませんが、衣服から傳染するといふことは疑ふべからざる事實である」と

衣服傳染の實例は他にもいくらかあるから、古着を買ふたとき、または肉身の死亡に際して片身分けなどに分つた衣服を着用するには必ず消毒して用ひなければならぬ、殊に結核患者の衣服は焼捨るか、或は消毒してから後片身分けをするに注意せねばならぬ

◆年齢の關係 或患者の統計によると、肺結核は一歳より五歳までは殆ど無く、五歳より十三歳までは多少あり、十三歳より十八歳までは多く、百人の患者中九十八人の死者を出す比例になつて居り、十八歳より三十歳までは稍少く患者百人中死亡五十三人の比例に減ず、三十歳より五十歳までは漸く少く百人中死亡二十五人、五十歳以上は稍少いと云ふことである、英國や獨逸では三十歳から六十歳までの仕事盛りのものが結核の爲め

に斃れると云ふて憂ひて居る。我國では衛生法の不行届な爲めてあるか、十五歳乃至三十歳までの間に結核の爲めに斃るゝものが多いは事實である、即ち教育の仕盛り時、技藝の仕込み時から、教育も技藝も顧出來上りて、これより社會に出て活動しやうと云ふ矢先に死ぬるものが多いと云ふのは、國家の爲め痛癢に堪へぬ次第である。

◆男女の關係　これは女子は春期發動體即ち始めて月經を見る時には男子の二倍以上の死亡結核病者があり、その他妊娠、分娩、産褥時には男子よりも稍多いが、一生を通じて平均すれば、女子の方は男子よりも結核患者が少ないと云ふことである、これは職業が最も關係するのであらう。

◆貧富の影響　結核は一名貧民病或は職工病と稱する位であるから、貧者に多く富者に少ないのは事實であり富者はよしまだ結核に罹つても藥餌其他の手當がよく行き届くからして治癒するものが多い、獨逸國ハンブル市の調査によると、所得税額と結核死亡とは反比例を爲して居る、即ち税額の少ないものだけそれだけ死亡數が多いことになつて居るが、さりとて中流以上でも決して油断してはならぬものである。

◆職業の關係　餘り家にはかり閉ち籠つて勉強して居ると肺病にでも罹るといけなから、少し戶外に出て運

動もし、また氣を散するがよい、とはよく聞く言葉であるが、これは確かに一面の眞理があるもので、餘り坐つて許り居ては運動が不足し、新鮮なる空氣を呼吸することも無く、食慾も進まず、従つて營養も充分でないから、總て座業する人、殊に精神を過勞する人、呼吸を自由にすることの出來ない、體位を取る人、溫度が度々著しく變化するで仕事をす人、刺戟性の瓦斯又は塵埃を吸入し、呼吸器を障害する仕事をす人、勞働の時間長く休憩時間の短い職業を取る人などはどうしても結核に罹り易きものである、獨逸のゾンメルフェルト氏の調査によれば、千人の死亡中肺結核數

金屬塵埃中にて勞働するもの　四七〇、五八　右機質塵埃中にて勞働するもの　五三七、〇四

粉物質塵埃中にて勞働するもの　四〇三、四三　以上平均　四七八、九五

と云ふ數を示して居る、其他の統計によつて見るに歐洲の主たる都府にては勞働者の死亡者百に對する五十四若しくは六十二と云ふ多數を示して居る、また我國に於ける明治四十三年に於ける統計によれば、各職業中最も結核患者の多いのは、各種洗濯裁縫、印刷職工にて、何れも百分の四十三、九即ち此等職業の約半數は、結核死をなして居るのである。

◆小學校教員の三分一は肺患者なり 現治四十四年五月其勝の發表、即ち最近二ヶ年間に於ける教育實務者の死亡原因を調べたる統計局の統計表によれば一肺結核の爲めに死したるもの、數は、其全體の三割三分に當るが更に教育實務者中體格の最も劣れる小學校教員を調べたなら四割に上るだらうと云ふことである」とある。

それからまた北里博士の調査によれば、全國に於ける小學校教員の總數十四萬七千八百六十八人中、一ヶ年の死亡者が一千百三十七人あるが、肺結核の爲めのみで死んだもの、數は、四百五十三人に達して居る今これを一萬人に就て死亡率を求めれば、死者總數七十七人三分、肺結核死者は約二十四人即ち總死亡者の三分の一強を占めて居る、日本全國の總死亡者に對して、肺結核患者の死亡數は七分の一であるのに、之を小學校教員だけに就て見れば、肺結核の爲めに死する者は其三分の一に達する、これを以て見るも國民の認識中肺結核は小學校教員に最も多く、且つ其患者中の最も多く死亡することは歴々たる事實である」と云ふてある。即ち何れの統計によるも小學校教員の三分の一は肺結核にて死すると云ふことが分明なのであるが、云ふまでも無く、小學校教員は現代の國民たるべき兒童を教育するのであるから、從つて其傳染の機會の多いも想像するに難からざることで、國民衛生上最も嚴重を要する問題である。

◆人の結核と牛の結核は別なり 人結核と牛結核との異同に就ては大部分學者の間に議論があつたが、今日に於ては全く別種のものであると略學者の意見は一致して居る。これに就て木博士は「一昨々年の春英吉利で歸いた結核會義の記録によると、人間の結核と牛の結核と云ふものは同じものではない、また彼等は決して移動せぬ所の一定の性状を有つて居るか云へばさうではない、多少移動はすれども同一物ではないが、併し人間はまた牛結核によつて侵される、人間の結核を調べて見ると六十プロセントは、本統の人結核によつて侵されて居つて、其外の三十二、三プロセントと云ふものは、牛の結核によつて侵されて居る、即ち牛結核は主にも人間の消化機關を侵して飲食物から毒毒が入ると云ふ決議をなして居る、それから同年の秋英國衛生學會の獨逸に開かれた際の議論の傾向はどうかと云へば、獨逸學者は主にも人間の結核と牛の結核とは區別が出来るが相互に移り變り得るものであると云ふことを主張して居るのである。また昨年のブタベストの會議に於ては、人間の結核と牛の結核とは全然別物であつて人間の結核は殆ど總て人間より感染し、決して牛の結核によつて起るものではない、けれども極く非常に稀には、牛結核によつて侵されるゝことがあるけれども、甚だ輕症で然も治癒の傾向を有して居る即ち人結核と牛結核とは全然別物と云つても宜しいと云ふことになつて居るのである

る」と云ふて居る。それにまた農商務省にては牛疫傳染病結核豫防法を發布して、各地方廳をして「ツベルクルリン」を注射して結核罹病の實否を識別し、結核ある牛は撲殺せしむる方針を取つて居るから、先づ牛乳より結核を傳染すると云ふことは絶無と云ふても宜しからうと思ふ。

◆肺結核初期の徴候 結核は慢性的の病氣で何時何處で傳染したかと云ふことが分らない、蛋に食はれれば直ぐ痒くなるから、あゝ蛋にやられたなあと云ふことが判るが、結核ではそれが判らない、微菌が身體の中に入つたと云ふことが直ぐには判らぬし、また入つても急にどうのかうのと云ふことはない、尤もこれは其人の體質の如何にも因るもので、風邪を惹いて居つた處へでも入られると、直ぐ微菌が作用し易いが、普通の場合では結核菌が肺に入つてから約一ヶ月も経つと肺の中に小さい結節が出来る、つまり結核と云ふ病名は此微菌が作用すると結節が出来る處からして出た名である。それから半年か一ケ年も経つと、結節が尙れて病毒が肺の他の部分に擴がると、其處にも此處にも新しい病癩が出来るとして一方には牛膿菌の侵入の爲めに化膿して遂には肺の中にある小さい血管を侵襲すると其と同時に結核菌から産み出された毒素のために身體が中毒する、さうすると熱、呼吸困難、動悸、食糧不進、貧血、羸瘦、頭痛、不眠、神經過敏、咳嗽、喀痰、咯血等の

諸症候を呈するに至るものであるが、かりなればどんな人でも結核だと云ふことが判る、そして此病には餘程病氣の進んだ時である。

肺結核は治療するに早い程良いもの故、病勢の進まぬ間に知ることが出来れば大變に都合が良いが、さて其初期の症候と云ふものは甚だ不定なもので、此等の症候の一二或は二三が表はれても、これが結核の初期であると感ずるのは容易でない、併し肺結核に最も多く表はるゝ症候はと云へば左の十症候である。

- 一、咳嗽の長く續くこと、寒胃を惹いたでも何でも無く、咳嗽が長くつゞく、然も乾咳と云うて痰が出ないで、エヘン／＼とからせきが出る、殊に夜分床に入つてからとか、朝眼が覺めた時とかに出る場合。
- 二、不定の發熱 大した熱では無いが、熱が不定に永く續いて出る、然も朝の間は格別無いが、午後三時頃になると熱が出る。
- 三、氣分が勝れない 何事をするのも嫌だ、仕事をする勇氣も無くなり、今迄自分が好んでやつたことも嫌になり、精神沈鬱して睡眠も充分で無く、少しのことに怒り易くなると云ふ、所謂神經衰弱の症候に似た症候を呈する場合。

四、**寝汗** 子供などが厚着すると夜寝てから汗をかくものであるが、別に厚着したても何でも無くても毎晩寝汗が出るやうな場合。

五、**胸胃症候** 若い身でありながら、どうも私は胃が弱くて困るとか、胸が悪くていけないとか云ふて居つて年中お粥で無ければいたよけませんなど云ふやうな者。

六、**身體の疲勞衰弱** 別にこれぞと云ふ原因が無いのに段々身體が瘦せ衰へて來ること。

七、**呼吸困難** 山や阪路を登る時には誰しも呼吸困難しくなるが、別に何と云ふ理由が無いのに呼吸が何と無く困しい、そしてそれが室内に静座して居る時でさへ困しいやうであれば病状は確進んで居る。

八、**肩の痠り** 何も肩の痠るやうな仕事をしたでも無いのに、無暗に肩が痠ると云ふやうなもの。

九、**動悸が劇しい。**

十、**血痰がある。**

以上の諸症候は必ずしも結核にはかり來て他の病氣には無い、所謂特異の症候と云ふわけではない、それにもまた肺病の總ての場合に此等の症候が具備すると云ふわけでも無いが、兎に角此等の症候の二つ或は三つが同

時にあるとか、或は一つでも長くそれがあつたと云ふ様な場合には、先づ結核の初期の疑ひを置いて自分でも醫生に力めると同時に、一方早く醫師の診療を求むるが良し。

◆**肺結核の初期**に取るべからざる職業 肺結核の初期にありても成るべく職業に就かざる方が宜しいのであるが、事情已むを得ざる人にあつては、假令職業に就くにしても甚大の注意を拂ふべく、不潔の空氣殊に塵埃中に執務する職業は總て之を廢し、常に屋外にありて甚しく體力を使用せざる職業を選ばねばならぬ。

また結核患者にして飲食店、料理人、下女或はパン、菓子類、鮎等の食物を製造したる販賣するもの、酌婦、藝娼妓、又は牛乳搾取及び販賣人等、其等玩具、小楊枝等を製造販賣するものは、假令初期であるとも、病毒を他に傳播せしむるの慮れあるを以て、速に其職業を廢せしめねばならぬ。

◆**肺結核は癒る病氣**なり 肺結核に罹ると殆ど不治の症と思つて居る人が少くないが、事實は決してさうではない、これに就て遠山、大澤兩博士の説を擧げてこれを證明しよう。

遠山博士は曰く「結核は漢法では癆瘵と云ふてある、瘵とは死する時の祭りのことで、結核は必ず死ぬものと決めてあつたが、それは第一初期に診斷することの出來ぬのと、其治療法の不完全な爲めに死亡するものが



多かつたのであるが、今日に於ては、結核は適當の注意と、適當の要求との本に全治すると云ふことが明白になつて來たのである。之を實例に徴するに、今より一千年以前の人で、日本で云へば支那の神農黃帝の如く醫祖として敬はれ居るヒポクラテスは肺病は癒るものだと云ふてある。傳つた實例では、醫者で名高きブレメルの如き、獨逸第一の詩人ゲーテの如き、外科醫として有名なるペアンの如きは、皆青年時代には肺結核患者であつたのだが、悉く全治して世界に其名を轟かす聖の偉人となつたのである。現今學者の統計によれば肺結核患者中二十五乃至六十プロセント、即ち百人の結核患者中二十五人乃至六十人の全治者を出し、又快方に赴きつゝあるのが四十乃至五十プロセントであるから、肺結核は殆ど全治すべきものなるは、此統計が明かに證明して居る。また佛國のプロマルト氏は屍體解剖の結果、表面無病息災の人で、結核の痕跡を發して居るのが五十プロセントあると云ふて居る、これを見ると一旦結核にかゝつても癒る、また大抵の人は結核病を持つて居るが、何時の間にか癒つて仕舞ふと云ふことが分るから、決して恐るべきものではない、またワール氏も屍體解剖の結果、總ての慢性病の中で、結核ほど良く癒る病氣は無いと云ふて居るから、益本論を證立して居ることが出来る」と。

大澤醫學博士は曰く「世間には一旦肺結核に冒されたと云ふ聲を聞くと、最早死と覺悟するものが尠くない世人の肺結核に對する恐怖は斯様に甚しい所からして、醫師の方でも現在肺結核に罹つて居ると知り乍らも容易に眞の病名を明かさぬやうにして居る。成る程結核は重い病症には相違無い、末期に及んだ患者は概ね不治と見るの外は無い、併し乍ら初期の處置にして其宜しきを得さへすれば大抵は治癒るし、よしまた全治と迄至らずとも老年期まで其身の健康を保つて行くことが出来るのだ。今其證據の一つ二つを擧げて見やうが、瑞西チューリツヒ大學教授ネーゲリが五百の屍體を剖視した成績に依ると、滿一歳までの子供には一切結核を見ないが一歳以上十四歳までの小兒は、年齡の進むと共に結核に罹るものが増して居り、且つ同年齡間に同病に罹つた患者は必死である。次に十四歳から十八歳までの半數は結核病に冒されて居り、何れも病勢の進行中の者ばかりであつて、治癒した痕跡は認め得なかつた。次に十八歳以上三十歳までのものは、大抵皆結核に罹つて居り、其中の四分の三は未治であるが、残り四分の一は全治して居つた、次に三十歳以上の屍體二百八十四體あつた中で、結核の痕跡を認めない者は僅に六體に過ぎなかつた。それによつて見れば三十歳以上の者の百人中の九十七人までは一度は結核に罹る譯合となるが、併し其結核に罹つた爲めに死する者は僅かに二十九人

強であつた、残りの中には多少未治のものもあらうが、先づ多數は全治者となるのだ。

次にまた獨逸ドレスデン市病院の解剖家ルッケルトは、千二百六十二人の大人屍體の中、百分の三十七は結核の爲めに死んだもの、百分の十六、七は結核の漸進しつゝある者、百分の三十七、五は結核に罹つて治癒したるもの、百分の九は非結核死者であつたことを實驗された。以上の解剖上から得た正確なる成績に依ると、三十歳以上で以て結核に罹らない者は皆無であるが、其中の三分の一以上は全治すると云ふことが證明し得らるゝのである。病理から考へても、統計から推して見ても結核の癒るのは明白なる事實であるのに、我國の肺癆患者の斃れ方の激しいのは、畢竟一旦肺病に罹れば遅かれ早かれ屹度其れに生命を取られるとの古臭い思想を續いて居るからであらう、それであるから不幸にして肺病に罹つても、初期の症状に注意し、手の及ぶ限り專念療法を守つて行きさへすれば、大抵は全治すべき筈のものである。要するに氣と病とは大關係あるもので人によつては君の顔色が太厚蒼いが、何處か悪いかと云はれたので、何でも無い健康體か、急に調子が狂つて來ると云ふ實例がいくつもあるが、結核患者などは就中此影響が多いのであるから、健康體の人々にもよく注意して、餘り他人の容體をかれこれと批評することは謹むべきである」と。

要するに肺病の癒るのは、學理並に事實のこれを證明するのであるが、何分にも其經過の長い爲め、病人や家族も根負けして了ふのと、今一つは醫者が肺病だと云ふと、病人が心配するから、結核の初期とは云はずに肺尖加答兒ですと安心を興へるので病人の方でも初期に充分なる手當をしないから、遂に病をして蔓延重症ならしむるに至るので死ぬものが多いことになるから、醫者から肺尖加答兒と云はれた場合、或は肺結核の初期の徴候があつたならば充分に治療すること、並にどこ迄も氣長にかまへて決して病氣に負けぬやうにさへすれば屹度癒る、併し僅か一ヶ月や二ヶ月療治して癒らないからなど、短氣を起してはならぬ、病氣が全快する迄は、五年でも十年でもと云ふ大決心を以て養生すれば百が百まで癒るのは受合である。

◆肺結核は豫防し得る病氣なり。肺結核は相當の治療によつて癒る病氣であると同時に、また相當の方法によつて豫防し得る病氣である。これに就ては北里博士の引照例を擧げて見よう。  
北里博士「歐羅巴諸國の中で豫防法が最も能く行届いて、良い成績の擧がるのは英吉利です、今日の場合では醫學隆盛の獨逸すらも一步を譲らなければならぬ有様ですが、これはエドワード第七世陛下が御在世の時から此事に就ては非常に御注意あらせられ、國民一般に結核豫防と云ふことを御獎勵遊ばした結果、かゝる良好

なる成績を見るに至りました。即ち一千八百四十五年には、一萬人に對する三十人の結核患者を出しましたが、一千八百七十年には、同じく一萬人に對して二十四人に減じ、更に一千八百八十年には十八人、一千八百九十年には十六人、一千九百年には十二人半、一千九百〇五年には十一人と云ふ様に、一萬人に對する統計上の率が減少して來りました。伯林に於ても矢張り年々結核患者の数は減少して行きます、即ち人口一萬に就て此病氣の爲め死亡せし數を茲に示せば、一千八百七十一年は即ち普佛戰爭の當時でありましたが、一萬人に對し四十人半、一千八百七十五年には三十五人、一千八百九十年には二十二半、一千九百年には同じく二十二半、一千九百〇七年には十八人の減少數を現すに至り、漸次に肺結核の数は少くなつて行きます。また獨逸一ヶ國の統計を見ますと一千八百九十年には、一萬人に付き二十五人を出し、一千九百五年には十八人を減じました。次にプロイスに於ても、一千八百九十二年には一萬人に對し二十四人、一千九百七年には十六人に減じました」と。

我日本國にては不幸にして年々肺結核患者の数は増加して行くが、これは豫防法の不行用と、患者の公徳心なきとに基因するもので、これを改めさへすれば英國諸國の如く漸次減少するに至るは勿論のことである。然

らば如何にしてこれを豫防するかと云ふに、第一は病毒の散漫を防ぎ、これを集めて消毒すること、第二は各自身體の強壯を許り、病毒の侵襲に抵抗する體力を養成することの二點に歸するものであつて、第一はまた公衆豫防と云ひ、第二は個人的豫防と稱するものである。

◆公衆的豫防法 公衆豫防の最も確實たるは、苟くも結核患者は悉く癩室所に入所せしむるのであるが、我日本にては到底行はれざる議論であるから、茲には家庭的豫防法を述べよう。家庭的豫防法を押し廣めれば即ち公衆的豫防法となるのであるが、併しこれは如何に他の人が注意しても、患者自身に注意と公徳心が無ければ到底實行は不可能なること故、此豫防は患者及び其家族共同豫防して始めて効を奏するものと心得て貰ひたい。

さて結核患者からして周圍に及んで來る危険は例の咳嗽する時に、結核菌が霧となつて散らばると咳嗽とであるから患者自身の心がけとしては、咳嗽をしながら他人に向つて談話をしかけることなどは充分に謹みべきは勿論、假令他人と對座中一無くとも、苟くも咳嗽の出る時は、ハンカチフなり、若しくは紙片なりで、鼻と口とを被ふべきことである。眼の前に人が居ないから溝はぬ位の調子で、ゴホンゴホンと結核菌を噴き出さ

れては、後に其處に來る者の危険を加減は思ひやらるゝではないか、獨りを慎むと云ふことは、必ずして実行にのみ應用すべき格言ではなく、傳染病を持つて居る患者達には、故ら守らねばならぬ格言である。それから咳嗽の防禦に用ひたハンケチなり、手拭なり、紙片なり必ず消毒の必要がある、此消毒法は豫防法中最も大切のことである。

◆唾痰其他の消毒法。ハンケチ、手拭其他の布片であつて重ねて用ゐることの出来るものは、石炭酸水又は昇汞水等に浸して直ちに消毒を行ひ、紙片に屬するものであつたならば、同じ消毒液の中に擲り込んで仕舞ふがよい。次に患者は決して痰を呑んではならぬ、痰は是非とも痰壺に吐かねばならぬ、痰をする時に口邊を試ふた場合は、其使用した物を消毒するは云ふまでも無く、手に痰がついたならば、其手をよく消毒せにやならぬ要するに結核患者は明けても暮れても、造次にも顔油にも此痰の危険物であると云ふことを忘れてはならない。然らば其痰の消毒はどうするかと云ふに、別段六つかしくはなく、痰壺に凡そ半分位も痰が溜まつたならば其中に沈澱曹達を一と攪み入れてぐらく沸騰した熱湯の壺一杯に注いで置きさへすれば、其湯の冷める頃には結核菌は瘻らず死んで了ふのだ。痰一合に付き曹達を凡て一匁の割合に混じて、五分間も煮沸するのば、誰

よりも今一層安全な消毒法である。

其他直接患者に觸れたものは何品に限らず一旦は必ず消毒せぬといけない、一口に消毒々々と云ふと何と無く事六つかしく思はれるであらうが、これは注意一つで別に金錢を要するわけではない。假へば膳、櫛、箸、皿等の食器であつたならば、一度沸かした熱湯に約三十分浸して後之を洗ひ、衣服、敷布の類であつたならば二三日隔き同じく熱湯に漬けて洗濯し、寝具等は時々日光に曝すと云ふ、それだけで立派に消毒が出来るのである。併しこれとても最初は一オツクウに感ずるに相違無いが、二三週間も勉めて、日々其丈の規律を限り、習慣を養つて仕舞ふと云ふと、今度は自分達の方からして沸騰しない水を使ふのが恐しくなつたり、日に暖さない夜具蒲團を用ひるのが厭になつたりするやうになるから、くれぐれも眼を惜しまずに、此良習慣を養ふのが何より大切なことである。また沸騰水の使用、日光消毒の應用など云ふことは健康者の家庭に於ても日常必ず實行すべき衛生法である。小槻枝や箸の製造人中には往々肺結核患者があるから、一旦消毒の上使用するとよいとか、或はパン、菓子、すしなど云ふ、外から來たまゝで直に口に入れるものは注意せねばならぬとか、唱へる連中もあるが、此等は一顧尤も至極に聞えるが、實際は左程恐るゝ程のものでもない、それよりも一

の注意を要するのは右の如き品々に限らず、總じて食物を指頭に揃んで食べる際には、食べる前に一度手を洗ふことである、一體吾人の手はどんな人間が持つて居つたか、一向素性の知れない金銭、電車のつり革などを握つた時にはよく手を洗つて食事をせねばならぬとは、大澤博士の結核家庭豫防談である。

◆肺結核の個人的豫防法 米國の市加古市と云ふ處は、世界で有名な不健康地である、同市は世界に於ても有名な工業地であるから、毎日煙囪は天を暗くする程盛んに吹き出され居るので、一寸外出しても洋服の襟は眞黒に汚れると云ふ程、空氣の不潔なる處である、斯様に不潔なる空氣を日々呼吸して居る處の市民は、普通ならば呼吸器病等に結核病など多くあらねばならぬのであるが、事實は之れに反して、人口一萬人に對して肺結核患者は僅かに十六人の比例になつて居る、唯ち歐洲諸國も最も良好なる成績を擧げて居る處の本國に相匹敵して居つて、他の諸國よりは遙に結核病者は少い、誠に不思議千萬なる成績を擧げて居る、然らば市加古市民は何によつて好成绩を得たのであるかと云ふに、彼等の身體が強壯で如何に頑固なる結核菌も彼等を受すことが出来ないからである、然らば市加古市民は何によつて、かく身體強壯なるを得たるかと云ふに、彼等は熱心に體育を勤んで居るからである、實然彼等の少年時代は勿論、六十、七十我國ならば隱居して屋内に滯り込

んで居る時代でも、寒中にシャツ一枚で、盛んに屋外運動を試みつゝある、これによつて彼等は身體強壯なるを得、其結果として結核菌の侵襲を撃退し得たのである、だから我北里博士は結核豫防法としての第一條件を「肺結核に罹らぬ第一の自衛策としては、體育を盛んにして身體を強壯にすることです」と云ふて居る。

一體我々の身體には、自然に外敵の侵襲を防ぐだけの抵抗力と云ふものがあつて、健康なれば、如何なる病氣もこれを侵すことが出来ない、假令結核菌が入つても病氣を起すことが出来ないのがあるが、若し不幸にして或原因例へば不衛生なことをしたとか、或は暴飲暴食したとか、若しくは營養が乏しかったとか云ふ場合には、病毒の侵襲に打勝つことが出来ない、遂に病氣に降伏して了ふのである、手近な隙を擧げて云ふと、我々の身體には普通は十だけの防禦力がある、病毒の力は九或は十であるから、双方互角或は病毒の方は強いかから、よし病毒が攻撃しても撃退して了ふ、然るに身體が衰弱して七或は八になると、病毒の方は遙に優勢になつて来るから、遂に病魔の爲めに侵さるゝことになるのであるから、病氣を豫防するには、何でも身體を強壯にするが一番である、假令公衆衛生が如何に進歩したからと云ふても、元來菌は眼に見えない、何時如何

なる場合に見舞を受くるかも知れぬから、個人の體格を強壯にするに云ふことは、最も確實なる豫防法即ち積極的の豫防法である、今日醫學界の大進歩として稱さるゝ自然免疫の學理も茲より出たのであるから、何でも身體を強壯にするのが最も有効なる豫防法である。

◆如何にして結核に罹りしを知るか 著者の恩師高田和安先生は、嘗て口腔診察法なる論文を著されたが、其方法中自験法と云ふて患者が自ら自分の病氣を診察し得る方法がある、これに就て先生の説明に、曰く「痰酸なり手足なりに濕疹ができて其處に汗が溜まりませう、肺臓右しくは氣管支に故障が生ずると忽ち熱をもつて来て、其處には矢張り即ち一種の液體ができるのです、人間は絶えず呼吸して其度毎に氣管支や肺臓の中を空氣が通るが、其空氣の通り路である氣管支並に肺臓の中に液體が溜まつてあると、空氣が液體に觸れてポツ／＼と音のするのが即ち水泡音、ラッセルである、又咳嗽になつたり、痰になつたりするのも亦右の液體であるのです、要するに病勢が重くなればなる程熱も強くなる、液體も多くなるからして、従つて水泡音がよく、激しく響いて來ると云ふ胸になるので、醫者が肺病患者を診察する時に、胸部若しくは背部に聴診器をあてるのは、畢竟其水泡音の有無、若しくは強弱多寡等を知る爲めである、然るに胸部聴診となると發音の部

分と聴診器との間に胸壁があるからどうしても直接とは行かない、處か口腔で聴くと云ふことになる、口腔は氣管支並に肺臓と同じ一と筋になつて居り、それに此等呼吸氣の通過する軌道の氣柱は、琴ならば琴柱、三味線ならば胴と同じに一種の強鳴器になつて居るから、琴の糸の音が琴柱に響いて強音を發する如く、氣管支や肺臓に起つた儼の水洶音は軌道の氣柱に觸れる爲め、口腔の方には強く響くから、極めて明白に其有無、強弱多寡を知ることが出来る、故に若し胸が痛んだり、惡寒がしたり、物に倦み易かつたり、身體が衰弱したりする場合は、夜間なり晝間なり出來得るだけ閑靜な室の中に仰臥になり、ハ―ハ―と呼吸をする口腔を以て、靜かに長い呼吸を數回行ひ乍ら耳を澄して聞いて居ると、氣管支なり肺臓なりに故障があれば、吃座儼の水洶音がポツ／＼と聽えるのです、幸にして聞えなければ其儘でよろしいし、不幸にして聞えたならば棄て置かず、に然るべき醫師の治療を受くるがよい」とあるが、此方法を用ひれば、自己の肺結核に罹りしを知ることが出来るものである。

◆肺結核の早期診断法 これは勿論醫者の行ふ方法であるが、結核の診断法として第一に應用されたのは、理學的診断法として視診、聴診、打診の三つである、視診は患者の胸廓の有様を見るので、肺尖が隠没して居つ

たり、胸廓の發育が悪かつたりすると先づ疑を置く。次には打診と云ふて胸をゴツゴツと打つ、一體胸廓には打診上一定の清音のあるものであるが、若し結核等の爲めに浸潤或は結節が出来ると濁音が生ずる、若しまた空洞が出来ると鼓音が生ずると云ふ風に、種々異つた音響が聞える、次は聴診と云ふて聴診器で呼吸音を聞く、結核があると水泡音が聞える、上手な醫者は此理學的診斷法によつて早期に診斷し得るのである。

理學的診斷法にては、病がほんの一小部分とか、或は奥深くあるとか云ふやうな場合には充分には分らないそれで、感これを確認る爲めに喀痰中の結核菌を顯微鏡で見ることとした、これは一定の方法によつて結核菌を染めて見るので、顯微鏡で結核菌の喀痰を見ると、結核菌が澤山にある、結核菌があれば無論結核である

と云ふことは確かであるが初期には容易に見附からない、それで今度は「アンチフォルミン」と云ふもので喀痰をしつかり溶かして、結核菌だけを沈澱させて見ると云ふ風に進歩をしたのである。然し中にはこの方法が判らぬことがある、即ち結核菌の喀痰にどうしても結核菌が見當らぬことがある、それで今度は「ツベルクリン」を注射して反應の有無を見る、其方法は先づ「ツベルクリン」一ミリグラムを注射する、そして反應熱が出るか出ないかを見る、若し熱が出ないと今度は五ミリグラムまた進んで一セン

チグラムを注射する、若し其人に結核があれば反應熱と云ふて熱が出て来るが結核の無い人には出ない、一センチグラムを注射しても熱が出なければ結核が無いと云ふ確診が出来来る。併し或場合には僅か一ミリグラム注射しただけでも三十九度以上の熱が出て非常に苦しむ患者もあるので、今度は方法を改めて「ツベルクリン」を點眼する、點眼して結膜に充血すれば結核、充血しなければ結核が無いと云ふ確診が出来来るも、これも非常に充血して甚だ困しむ場合があるので、其後に至り維也納の小兒科醫でビルケーと云ふ人が簡單にして確實な方法を發見した、それは丁度種痘をすると同じ方法で「インポソール」と云ふて、尖端は三角形になつて極く鈍くなつて居る處の針を皮膚に軽く擦ると表皮が少し剝ける、傷は何處でもよいが大抵は前脚を選ぶ、さうして「ツベルクリン」の原液と二十五プロセント及び十プロセントに稀釋したものと、針の尖にくつつけて塗るか、或は皮膚を切つた後で、一滴づゝ滴下して大抵十分間も置けば、液は其處に浸み込んで了ふ、そして一方の前脚には對照として、「ツベルクリン」を滴下せずに、其儘にして置く、すると結核患者であると二十四時若しくは四十八時間の後に反應が起る、第一原液を點滴したものは周圍の欣圖が強い、二十五プロセントでは少し弱い、十プロセントでは尙ほ弱い、丁度種痘をして感ぜぬ時のやうな欣圖が起る、併し結核の無い人

には何の反應も無い。此ビルケーの方法でやると、痛みも無ければ熱も出ない、少しの苦しみも無いで、然も簡単に確實である。で喀痰検査をしても結核菌が見えない、併し物理的診斷によると少し肺に異常はありはしないかと云ふ様な場合に、これをやつて見るとよく分る。それで今日では肺結核専門の病院では皆これをやつて居る、此方法によればいかな初期でも確診することが出来て、所謂手後れになるなど云ふことはないから、自分でも少し變だと思ふ人は、早く此方法で診斷を受けるがよいのである。

◆肺結核に利く藥の處方 肺結核に用ひる藥物は頗る非常に多い、多いと云ふのはつまり特效藥の無きを意味するのであるから今醫家の用ひる藥物にて、最も有効なりと稱せられて居るのは左の二方である。

▲カルアグレス錠

右丸一日三回毎食後に三粒づゝ服用

▲炭酸グワヤコール

右混和爲三包、一日三回毎食後一包づゝ

意 苺 仁 末

二、〇

此等の藥物は追々に其分量を増して行くことになつて居るが、其割合は、一週間にカルアグレスは一粒づゝ

グワヤコールは〇、一づゝを増して行くのである。

◆ツベルクリン療法 ツベルクリン療法に就ては、有効説と無効説の兩様あるが、今日多數醫者の信する説を擧げんに、結核の注射用として應用せらるゝものは澤山あるが、矢張コツボ氏の「ツベルクリン」が一番に賞用せられて居る。今此「ツベルクリン」中、舊「ツベルクリン」と、最新無蛋白「ツベルクリン」とを比較して見ると、舊「ツベルクリン」は比較的副作用を伴ふ弊もある、時としては廣く解熱作用を呈することありまた診斷用としては反應が鋭敏である、無蛋白「ツベルクリン」は比較的副作用無きも、解熱作用は無いと稱せられ、また診斷用としては反應が鋭敏でない。「ツベルクリン」使用の適應症を擧ぐれば左の通りである。

- 一、成るべく若年のものにして營養尚ほ甚しく衰へざる人。
- 二、及ぶべき丈初期の肺炎浸潤、肺炎の加答兒等である。

また其禁忌症は、

- 一、三十八度以上の稽留性または弛張性發熱あるもの。
- 二、粟粒結核、腸結核または稍急性の經過を取るもの。



三、著明なる心臟疾患、腎臟疾患等を合併せるもの。

四、重病恢復期、一般虛弱者。

五、咯血時、等である。要するに「ツベルクリン」療法に於ては、其量及び注射回数は、一定の法則を以て決定すべきものではなく、個人により病状に依つて適宜に取捨すべきものである。或博士の説では、初めに無蛋白「ツベルクリン」注射を行ひ、或程度迄輕快したる後、更に舊「ツベルクリン」の注射を行はざれば完全でないとのことであるが、其職能は一に熱感なる醫師の手中に存するのである。

◆肺結核の特殊療法 肺結核は慢性の經過を取るものだけに、特殊療法と稱するものも澤山あるが、其中稍信用すべきは、窒素の胸腔内送法、即ち人工氣胸法である。此は一定の器械を用ひて、窒素を胸腔内に三百乃至五百立方センチメートル程送入するものにて、これによつて同様の効を奏したる實例は澤山にある。

第一は所謂「便方療法」であるが、これにはいろいろの藥物があるが其中最も効あるものは「養育仁」で、漢家ではこれを結核の聖藥として居る（後に肋膜炎のところに詳述す）今一つは夏枯草即ちウツボ草で、これを煎じて用ひるのである。

◆結核患者の心得 肺結核患者の衛生法として心得べきことは澤山にあるが、今有名なる患者心得を示さんこれは北米ヒラデルヒア府なるドクトルテラー氏が同市「サマリタン」病院にある肺結核患者の心得として、患者が一々之を尊重せざるべからざるものである。

一、咯痰を癢りに出す勿れ、殊に廊下、道路等に於ては勿論、如何なる所と雖も雖も結核病原の殺生に適せざる所に於て咯痰する勿れ。

二、咯痰を嘔む勿れ、咽喉にある咯痰は胃中に嚥下すべからず、一定の痰壺に出すべし。

三、痰壺に嚥出せよ。

四、能ふ可くは常に自ら痰壺を持て。

五、陶製、土製の痰壺を用ふる者は、常に之を「クロール」石灰水に入れて消毒せよ。

六、金屬製痰壺を用ふるものは、其内側の紙製袋を出して焼却し、金屬壺は熱湯にて洗ふべし、五及び六件は何れも毎日一回以上行ふべし。

七、「ハンケチ」を用ふる勿れ、咯痰または口腔を拭ふ時は必ず紙片を用ひよ、而して其紙片は直に焼却せ

- 八、若し痰壺に喀出し能はざるものは、紙製「ナフキン」に喀出せよ。
- 九、常に紙「ナフキン」を用ひて口腔を拭ひ、決して手に口に觸るゝ勿れ。
- 十、常に廉價の紙製袋を持ち、喀出せる痰を包める紙「ナフキン」を此袋に入れる。
- 十一、常に此事を忘る可からず。
- 十二、毎夕就床前喀出せる痰は、それ〴〵消毒の處置をなすべし。
- 十三、喀痰を決して口唇、手、衣服、寢具、家具等に附けざる様注意すべし。
- 十四、若し誤つて喀痰を附けし、紙「ナフキン」を落しまたは痰壺を倒したるが如き時は、直に焼却、または「クロール」石灰にて消毒すべし。
- 十五、鼻あらは成るべく之を剃り、或は喀痰の附着せざる様注意すべし。
- 十六、常に口唇、手指を洗ひ、殊に飲食前に於ては殊更ら清洗すべし。
- 十七、クシヤミの突然出てたる如くにして喀痰を出したる時は、直に脱脂綿にて拭ひ焼却すべし。

- 十八、呼吸を高むる勿れ、牛乳其他飲料物は熱きものは冷却を待ちて飲むべし。
- 十九、握手、接吻を必ず爲す可らず、若し斯くの如き事を爲す時は、知己友人をして亦結核病に罹らしむるのみならず、又自己も他人より疾病を受けて、己れの病状を更に重體ならしむべし。
- 二十、努めて咳嗽を爲すべからず、若し咳嗽を爲す時は、口に「ナフキン」を蔽ひ、然る後爲すべし。
- 二十一、戸扉を離れて立つ可し、廊下に於て成るべく手摺に倚るべからず。
- 二十二、醫師より勧められたる外、決して過激の運動をなすべからず。
- 二十三、成るべく窓を開きて眠るべし。
- 二十四、疲勞を求む可らず。
- 二十五、早く眠に就く可し。
- 二十六、如何なることあるも、醫師より與へられざる藥品を用ふ可らず。
- 二十七、「アルコール」類を一切飲む可らず。
- 二十八、牛乳と牛乳の懸濁を食することを忘るなかれ。

二十九、精神を平安にして、感情的の小説を讀む可らず。

◆性慾の注意 肺結核患者の衛生中最も注意すべきは性慾である、性慾の發動即ち房事は適當に行へば元より害あるべき筈のものではないが、結核の如き身體の消耗甚しきものにあつては、絶対に之を禁止するの必要がある。然るに如何なる理由であるか結核の初期には性慾が非常に亢進する、従つて慎み無き人にあつては、其度を過して病の經過を非常に迅速ならしむるものであり、それにまた相手方に病毒を傳染せしむる虞れがある故、夫健にして妻弱き場合に或は妻健にして夫病める場合には餘程注意すべきことであるによつて、成るべくならば別居するか、或は適當の方法にて房事を禁止するがよい。また結核の婦人が妊娠すれば、これまで潜伏して居つた、或は一生涯無事で済むべき結核も妊娠によつて、所謂奔馬性結核と云ふて、急に勢を増して來るのが普通である、或人の實驗によると、二十三人の結核妊婦の中十四人は分娩の時死し、七人は産後二週間の中に死んだと云ふことであるから、これを見ても房事の恐るべき影響あるは判るのである。

◆結核の人の良き食物 食物は身體の營養に缺くべからざるものであるから、病人でも健康者でも無くてはならぬものであるのは、誰人も知つて居る處である、殊に肺結核の如き身體の消耗の甚しき病氣によつて、成

るべく滋養食を多く取つて、體力の消耗を補はなければならぬ。結核の治療に就ては、種々特異な意見を持つて居る學者があるが、如何なる治療法を取るにしても、體力の維持増進、即ち滋養食を充分にやらなければ其効果を擧げることが出来ぬと云ふことだけは、誰人も否むことの出来ぬ眞理である。體力が弱壯、あれば假令病毒が勢を逞うしても、これに對抗することが出来るから、結核を患ふる人は、胃の許す限り成るべく澤山の滋養物を取るやうにすることが大切の注意である。

滋養物と云ふと大抵の人は、牛乳とか鶏卵とかに限るやうに心得て、嫌ひでも何でもかまはずに我慢して食べると云ふ風があるが、何も滋養物は此等のものに許り限つてあると云ふわけではない、米飯は勿論、魚鳥獸肉其他何でも食物の中には皆滋養分を含んで居る、だが人間は活き物であるから、いくら結構なものでも嫌ひなものは食べても消化しないしまた同じものを食べ続けると飽きて來る、それにまた經濟上の關係もあるからよく其邊を斟酌して、出來得るだけ滋養分の多き、消化し易きものを澤山に食べるのが宜しいので、然も其食物は一方に偏せずに、五穀、蔬菜、果實、魚肉、鳥肉、獸肉等種々なる食物を適宜併用するが宜しい。それから肺結核は脂肪分の消耗の甚しき病氣であるから牛乳、バター、鰵卵、肝油、落花生、胡麻、鳥獸肉等成

るべく脂肪分の多いものを食べるのが宜しく、日本人には矢張りどうしても米食を主として他のものを副食とした方がよい。

◆結核患者に忌むべき飲食物 總て不消化物は宜しくない、それから胡椒、辛子、ワサビ唐辛等の香辛類は禁物と心得ねばならぬ、酒類は一般に禁物であるけれども、食慾不振のもの、寢汗あるものには葡萄酒の少量を

取るに差支がない。それから下痢、咯血等ある時は固形物を避け、お粥、米湯、または片栗湯に鶏卵を混じたるもの等を用ひ、發熱ある時も成るべく固形食を少くして流動食を攝るが宜しい。

◆肺患者の轉地は山が善きか海が善きか 肺結核患者の轉地に適する處は、高地氣候を呈する處、低地氣候を呈する處、及び森林地、海濱等であるが、一般に云へば空氣清良にして塵埃なく、水質純良、交通便利にして新鮮な食料等を得易く、且つ熱帯なる醫師のあつてこれを監督する等の主なる條件の外少くとも、冬は比較的暖和にして夏季は稍清涼、また晝夜寒暖の差の成るべく少き土地を選ぶがよい。我が日本の僻き島嶼にあつては是等の要求を満足せしむる處は海濱の地を指して他に求むることが出来ない、本島、四國、九州の南海岸即ち太平洋に面する海濱に於ては此要求に適すべき地は多くあるならん

轉地療養地として人に知られて居る處は、總房の南岸には銚子、小湊、白濱等、其西岸にては北條、館山、相模の鎌倉、江の島、鶴沼、茅ヶ崎、平塚、大磯、二の宮、小田原、三浦半島南岸の三崎、其西岸の逗子、葉山等、伊豆半島東岸、熱海、伊東、其南岸下田、駿河灘の沼津、興津、濱州濱松附近、紀州東岸の熊野、其南岸の田邊、西岸の和歌の浦、和泉西岸の岸和田、灘寺附近、關津南岸の灘地方、瀬戸内海にては須磨、明石並びに其附近等である。また肺病療養所として設備其宜しきを得て居るは、相州茅ヶ崎南湖にある高田先生經營の南湖院である。

◆肺病療養所とは何ぞや 肺病療養所と云ふのは、一千八百五十九年にドクトルヘルマン、ブレイメル氏がゲルベルスドルフと云ふ處に始めて建設したもので、空氣清良にして塵埃無く、土地氣候ともに衛生に適せる健康地に肺病患者を收容して、一般醫療を加ふる外、専ら空氣、日光及び良好なる食物等を利用して患者の體質を改良し、また此等のもの、利用方法並びに消毒傳染を豫防する方法とを患者に練習せしむる、一種衛生的學校とも稱すべき病院であつて、肺病の治療上また消毒傳染の豫防上最も必要なる處のものである。

肺病療養所には、療養に必要な諸般の設備例へば冷水使用室、晝間養生室、雨天運動場、それに患者の運

動に適し、また重症患者は傾臥して新鮮の空気を吸入すべき塵埃無き森林、其他には病室検査室、及び消毒室を有し、病室は特に日光射入と空気の流通とに注意し、醫師は日々患者の病状と身體の状態とを診察し、また一面には天候の模様等を斟酌して當日に行ふべき衛生的教授を指導する許りで無く、また患者の朋友として其相談に與る等、苟くも治療上必要な百般の利益を與ふることを努め、患者は誠實に醫師の指導する諸般の衛生的法則を遵守して自己の健康を回復し、また病室傳播を防ぎて以て自他の幸福を全うすることが出来るものである。

それからまた療養所に於て病氣の輕快せし患者、若しくは極めて初期の輕症患者は、晝間は自宅或は役所等に出て、相當なる職務を執り、夜間のみ療養所に来り、宿泊して治療を受ける便利もある。歐米諸國にては斯くの如き療養所の設立は近時著しく發達して、其恩澤を享くる者多く、獨り資力ある人ばかりでなく、また貧困者の爲めには多數の醫家、官衙、貴族、富豪等の善捐によつて、所謂庶民療養所を設立してあると云ふ。現に英國にては一百有餘の療養所があつて肺病の撲滅に努めて居る次第である。我輩は我國に於ても斯くの如き事業の一日も早く行はれんことを切望するものである。

◆空氣療法 空氣の新鮮なるは何人にも必要なものである。一體我々の身體に於ける酸化作用と云ふものは、空氣の力によつて營まるものである。百般の活動はそれが爲めに行はるものである。新鮮なる空氣は其作用完全なるが爲めに、血液の循環を良くし、食物の消化を良好ならしむるものであるが、これに反して不潔なる空氣殊に煤煙、種々の微菌等を含んで居る空氣を呼吸するのは、甚だ不衛生且つ危険である。肺結核患者が塵埃を含有せる空氣を吸入すれば病の治癒を防げ、病勢を増進せしむるばかりでなく、若し肺炎菌、化膿菌、インフルエンザ菌等の侵入を空氣より受くるときは、所謂混合傳染を發して俄に病勢の増進を來すものである。新鮮なる空氣はかくの如く大切にして、且つ有効なるものであるによつて、彼有名なるデットワイレル氏の肺結核衛生療法の一ヶ條に「新鮮にして汚れて居らぬ空氣を充分に呼吸すること」と云ふことがある。これに就て柴山博士の所説には「新鮮なる空氣を充分に呼吸するには、云ふまでも無く空氣の新鮮なる場所を要する、これが即ち肺病療養所の海岸又は山地等人家の最も少き所に建設されるわけである。それで新鮮なる空氣を呼吸するには、何れの所でもそれ／＼の注意を要するものであつて、假令海岸があつても室を閉ぢて居つては、不潔なる空氣を呼吸するわけであるから何の役にも立たぬ。また山間であつても其室が人や馬の往來する

溝路に而して居て、不潔塵埃が室内に入つて來るとか、又は家屋の構造がよくないので、窓所から煙や臭い臭氣が入つて來るやうな風では、新鮮なる空氣を呼吸することは出来ぬ。兎に角新鮮の空氣を呼吸する爲めには室内にあるときは窓障子を明け放して置くか、また風が直接に強く吹き込む時は衝立てを用ひて、之を避けるやうなことをし、夜分は窓の一部を開いて置いて空氣の交換を計ることが必要である。若し直接に風が吹き込むならば、隣りの窓を開けて置くこと云ふやうにすれば尙ほ結構である。室内でない場合には、直接に風の當らぬやうな場所、又は日光の直射する所を散歩し、四六時中出來得る限り、新鮮なる外氣を呼吸するやうにするのである。

獨逸の療養所には、横臥室と云ふて通例奥行九尺位の掘立て小屋のやうなものが拵へてある。これは普通南向きになつて、南の方は全くの明け放して、北側の方は全く板張りにし、屋根はあるが、床と云ふものは別がない。此處にズラリと寢臺が併べてあつて、患者は其上に横臥し、殆んど野犬と同じやうに新鮮なる空氣を呼吸することが出来るのである。患者は毎日午前と午後と嚴重に一定時間は此處に横臥して新鮮なる空氣を呼吸する規則で、場合によりては、冬の嚴寒の季節でも夜分の十時までは此處に横臥させられることがある。最

も其様な時は毛皮や毛布で、全身は勿論頭部までも包み、唯顔だけを出して置き、時々温き牛乳を飲みましめることとしてある。此様な風に新鮮な汚れない空氣を呼吸せしめ、或日數それを續けるなり、肺病患者の今まで熱が出て居つたのが熱が消散し、また食物の少しも進まなかつたのが、食慾が振つて來ると云ふ風に、不思議な程効力があるものであると云ふてある。

◆光線療法 歐米諸國にて光線浴或は日光浴と云ふて患者が裸體になつて日光に浴しつゝ病氣殊に結核病の如き慢性病を治療して居る。元來光線なるものは、生活上必要なるものであつて、身體や精神のこれによりて興奮するのは日常の經驗が之を證明して居る。彼の北極地方にありては夜が長く打續く故に、其處へ行く探險者は何れも貧血になり、また甚しく精神が憂鬱に陥るも、再び日光に逢へば全く快癒するのを見ても分る。今蛙に就て其排出する炭酸の量を見るに、暗き所に居るよりも明るき所に居る時の方が遙に大量を出し、其光線が強き程益々大量になるのである。これは新陳代謝が光線の作用によつて盛んに行はれる證據である。

一體日光は其實は多くの色が集合して成れるもので、此等の色は各相異なりたる方向に屈折する。換言すれば屈折率は光の色によりて異なるものである。此屈折率の差あると同時に、各色の動物體に作用する力も亦異なる

ので、運動を起さしめるとか、興奮せしめるとか、兎に角此等の刺戟を動物に與へる力の強いのは、紫、藍等で赤は最も弱い、日光のかる作用は既に昔より經驗的に知られたる事實で、羅馬時代にも、日光浴は健康を増進し、病氣の恢復には大切なものであると云はれて居つたが、近來に至り此日光作用の利用は益々盛んになり、新陳代謝を促進し、各機關の機能を順調にし、所謂身體に力をつけるには、これが最も必要であるとせらるゝに至つたのである。

光線學の鼻祖フィンゼンは、元來は虚弱な生れつきの人であつた、夏は左程でもなかつたが、太陽の光りの強い冬になると、兎角身體の工合が悪くて困つたところから、種々研究の結果、右に述べたやうな太陽光線の微妙な作用をなすことを知つて、遂に太陽や電燈の光線を利用して、自分の苦しんだ心臟の呼吸困難を除くことを發明し、狼瘡と云ふて癩病や梅毒の劇しいのに能く似た皮膚の結核を治療することにも成功し、慢性の肺結核をも治すに至つたのである。

日光はかく有効なるものであるによつて、結核患者は出來得る限り日光を利用するがよい、編者の友人が嘗つて肺結核に罹れる際、房州の外灘に轉地したのみであるが、此際に予はよく此日光を利用すべきを勸告せる

に、友人は天氣さへよければ、毎日砂地に仰向きに寝て、太平洋の怒濤を眺め、二時間も三時間も殆んど死んだものゝ際になつて、日光浴を取つて居つたので、土地の人は始めは不審に思つて居つたが後には東京の人はのんきなものと村中の評判になり、六十日ばかり仙人のやうな生活をして居つたら、遂に全快したと云ふ實例もある。従つて家屋なども成るべく日當りの良き處を選んで居るがよく、中にも寢室や居間は特に注意して光線を入れ座敷は勿論、蒲團、寝衣、枕、敷布等を充分日光に當てるがよろしいのである。

◆精神療法 昔の言葉に「病は氣から」と云ふことがあるが、これは誠に穿つた言葉である、我輩は肺病だとう／＼死の宣告を受けた、ナア、ニ君肺病だつて癒るよ、現に醫者が證明し居るぢやないか、アソーかと云へばよいが、それが迷ふ人になるとナア、ニ加減の氣休めを言つて居る、と、かうなれば元氣は日増しに消沈して日増しに重態に陥るやうになる、一體我々の身體は細胞の集つて出來て居るもので、此細胞の活動如何は一に精神の活動如何によるもので、隣から火事が出た大變だ、と云ふ時には非常に重い行李の類でも外へ持出す火事が済んでからそれを再び家の中に運び入れやうとしても一人では運も持てぬ、やつと二人一運び入れたなと云ふ例は幾多も見聞された事實であらうと思ふが、これは火事の前後に於て別に人が運つたのでも何でもない

い、曩にはこれを持ち出さなければ焼いて了ふ、大變だと云ふ精神の活動があつた爲めに非常なる力が出たのだが、後にはもう焼ける心配も何にもない精神が安心してゐるから當り前の力しか出ないのである。喉嚨の醫者の話を聞くと、死刑臺に乗ると、未だ電氣を通じない中に大抵のものは死んで了ふさうだが、これ等は吾は今死ぬ處だと云ふ觀念の爲めに所謂氣死をして了ふのである。これと同じことで人が助かると云ふてもそれを信じない、死病だと思ひ込んで居ると、終には助かる病氣も助からずに死ぬ死病だと云はれても、ナアに死んで堪るものかと云ふ意氣があれば決して死ぬものではない、こんな例は世上にいくらかもあること故、見聞された人も少くないと思ふ、彼の有名な越中富山の靈藥は、嘗つて瀧主が旅行中一服の靈藥で病が癒つてから、靈藥は富山でなければ利き目がないと云ふ信念からして、大正の今日までも勢力があるのである、昔しは瀧主の御通行の時鐘の穂尖を拭ふた紙を戴くと「オコリ」が落ちた、今日で云ふマラリアが癒つたものだから、これは御領主様が有難いと云ふ信念があつたからである、此信念の無き今日では、假令公方様のを戴いても、オコリはぬか、頭痛も癒りはしない、また神信心、願がけも、何も神さまが癒して呉れるのではない、矢張神を頼めば癒ると云ふ信念からして癒るのである、今日紅療治とか御祈禱とか、お稻荷様とか、天理教とか云ふも

の、相應なる成績を擧げ、愚夫愚婦の信仰を得つゝあるは全く此信念のお蔭である、されば肺病の如き長き病氣では尙更癒ると云ふ信念は大事で、此信念さへ堅ければ必ず癒るものである、殊に前にも云ふ如く醫者は大抵癒ると保證した病氣なれば必ず癒る

◆咳嗽の劇しき時の手當 肺結核は咳嗽のよく出る病氣で、これはなか／＼苦痛なものである、でそれを軽減するには空氣中成るべく水蒸氣を多く含ませしむる様、常に火鉢に蓋せざる鍋に水を盛りて、水蒸氣を立たしめて置くがよろしく、またテレピン油、バルサム油等分のものゝ吸入を行ふも宜しく、内服薬として處するは、

- ▲ヒヨス 煎 一、〇
- 杏 仁 水 二〇、〇
- 右混和爲滴劑、咳嗽時十乃至十五滴つゝ

また漢家にて使用せるものは、青竹の細いものゝ油を取り、それに生生姜の搾り汁を混ぜたものを服用せしむるのであるが、これはなか／＼奏効の著しきものである。また桔梗の根を煎じて服んでもよい。

◆咯血ある時の心得 肺結核患者は能く血の出るものであるが、單に血液のみ咯出するものは咯血と云ひ、單に血液の混するものは血痰と云ふのである、何れも肺中の血管に損傷があつて出血するものであるが、其量が



假令少くとも決して油断をしてはいけない、と云ふのは蟻の穴より堤の破壊するが如く、假令少しの損傷でも飲酒、運動或は精神感動等の爲めに、心臓の鼓動が高ふりて血液の循環が劇しくなると、其強い血脈の爲めに血管の損傷部が擴大して終に大出血を來すことがあるからである。また放歌、高吟、朗讀、咳嗽または寒冷の空氣、煙草、塵埃等の刺激の爲めに大出血を來すことがあるから、肺病患者は此等は皆避けねばならぬ。殊に喀血の徴があるとか、或は少しにても血痰等のある場合には、身體、精神の安靜を守り、塵埃なき清潔なる室に安臥し、聲を出して物言ふことを避け、鼻より靜かに呼吸して成るべく咳嗽を制するがよい、若しまた急に多量の喀血を來したる場合には、食鹽一握みを水飲みコップ一杯の水に溶かして服用し、仰位に平臥し胸部に氷嚢を貼して靜かに醫師の來るを待つが宜しいが、若し周章して急歩し、或はまた俚に乗つて醫師の家に驅けつけるなどは、爲めに大出血を來す原因となる故に慎まねばならぬ。

多くの患者は喀血があると死の前徴なりと信じて驚き怖れ、爲めに心臓の動悸を高め、益々出血の量を増やすが、これは子供が怪我した時に出血を見て初めて痛い泣き出すと同様の愚て寧ろ滑稽である我々はよく怪我によつて手足より出血し、鼻よりは衄血が出、殊に婦人は月經、分娩等には大出血を來すが、此等の出血に

は誰も驚かぬ。血液は全身限なく頭の頂邊より足の爪先まで行き渡つて居るから、何處から出る血でも皆同様である、獨り肺から出る血ばかりが大切のもの云ふことがない、従つて喀血があつたからと別に驚き騒ぐ程のこと無によつて、若し喀血があつた場合には、少しも驚かすに寧ろ冷静に、身體精神共に安靜ならしむるは、治療上最も大切のことであるから、これに呉々も心得置くべきことである。

肺結核患者に止血薬として用ひる薬は澤山あるが、カルチウム鹽は最もよろしい。其中でもカルアグレス錠は最も効があるから、常用一回に三乃至五個、止血用には一回に十二乃至十六個または其以上を内服するのである。

◆熱ある時の手當 結核患者の經過中最も困難を感ずるは發熱で、此發熱はまた身體を衰弱せしむること甚しきものである。一體結核の經過中に發熱すると云ふのは、單に結核毒素の障害に因るばかりで無く、他に種々な細菌の侵入、即ち混合傳染に因るもので、殊に連鎖球菌が最も多く原因をなして居る、だから其熱は容易に下がるものである。この解熱療法として、石神亨氏はワクチン療法を施して成功せる報告があるが、一般醫家の常用する解熱劑は左の處方である。

▲フエナツチン 五、〇

右分十包發熱症一包づゝ

◆民間治療法としては、蚯蚓を煎じて服用するのは頗る効あるもので、大なるもの一回に水一合を入れ、七勺に煎じて一日三回に分けて服用するのである。これは地龍子と云つて藥屋で乾したのを賣つて居るが、生きて居るものでもよろしい。

◆腰汗の治療法 熱のある腰はどうしても腰汗の出るのは已むを得ないが、寝る前に食用の酢と水と等分のも、または酒と水と等分のものにて、全身を隈無く拭ふと宜しい、薬用としては

▲アガリチン 〇、〇〇五

右分一包、十包を興ふ、朝夕一包づゝ

乳 糖 〇、四

◆消化器の保護 肺結核に最も大切なるは滋養物を澤山に取りて、以て血の消耗を補ふことであるから、消化器はよく保護して其目的に副しめねばならぬのであるが、結核の經過中には胃腸に故障を起したがるものである。で消化器の保護としては、食物は充分に噛み嚼いて用ひること、餘り多量に飲食物を取らぬこと、冷温

其度に過ぎる物を用ひぬこと、間食せぬこと等は主なる方法であるが、結核患者の特に注意せねばならぬは、喀痰を嚥下してはならぬと云ふことである、前にも云ふが如く、喀痰中には澤山の結核菌を含んで居るから、若しこれを嚥下することとなれば、遂には肺結核と云ふ病氣を起すに至るものである、肺結核に罹ると必ず下痢を起し然も其下痢は容易に癒らぬものであつて、爲めにいと衰弱せる身體をいやが上にも衰弱せしむるに至るものであるから、吳々も注意を要するものである。尙ほ故障の起つた場合の手當は次章の消化不良症に對する手當を行へば宜しいのである。

◆結核患者訪問の注意 結核患者を訪問するには二様の注意がある、一つは病人に對する注意、一つは傳染を防く自己注意である、病人を訪問するのは、一つは患者を慰むる爲めなること、肺病患者は一般に神經過敏にして物事に感動し易いと云ふことを忘れてはならぬ故に、些細のことにも注意して患者に惡感を與へぬやうに注意が肝要である、例へば「ひどくお瘦せなかつた」、「お顔の色が悪い」等の簡單なる言葉が肺病患者には劇しき感動を當へ、爲めに發熱、不眠等を來すこともあるれば、また或は患者を慰むる目的にて面白きことを話して、これを笑はしめたが爲めに、親切が反つて仇となつて咯血を起さしむることもあり、或は不知不覺長

座して退屈さしたり、或はまた家事其他患者に直接關係のあることを談して感動せしむる等は、皆患者に害を與ふることになるから、此等のことは皆避けねばならぬ、殊に甚しきは患者の室内に於て無差障に煙燻して大に患者を困らしむる等は嚴戒すべきことである。

病毒の傳染を防ぐには寒胃其他何か異常のある時氣分の悪い時などは訪問せざることにして、訪問の時は患者より少くも三尺以上を離れて坐すべく、成るべくならば正面に坐らずに横の方に坐するがよい。患者にては一切飲食せぬこと、また患者も遠慮して此等のものを下さぬが禮である。

### 第七十一節 肺の腐る病氣(肺壞疽)と其治療法

◆原因 本病は肺組織の死朽し腐敗性分解を來すものであつて、腐敗性氣管枝加答兒、肺炎、肺腫瘍、肺結核、肺癰腫等に續發することが多いものである。

◆症候 喀痰の性状は特有なるものにて、丁度腐敗性氣管枝炎に於けるその如く、腐敗性の惡臭を放ち其量多く瀉口性嚔出を惹起す、痰の反應はアルカリ性なるも、之を放置すれば酸性となる、そして放置すれば泡沫

粘液層、漿液層、膿液層の三層に分るゝが、唯其腐敗性氣管枝炎と異なるは、肺の壞疽片を含有することであつて、これは黒色或は黒灰色の點狀大或は擗指頭大の大きさを有するものであつて、試みに之を水中に容るれば浮游して其表面襍糞狀となるものである。また其他の症狀としては、咳嗽、胸痛、呼吸困難、食思缺乏、全身倦怠等を來たし、また間々頭痛、眩暈等を訴へるものである。

本症には往々咯血を初期に併發することがあり、また肋膜炎、膿氣胸を發することあり、時としては嘔吐、下痢等を來して甚しく全身の衰脱を來すこともある。

◆療法 豫防法としては食物の誤嚥を避け、嚔下困難の患者にあつては人工消息子を用ひて食物を嚔らしむるがよい。

既に本病を發せるものには、殺菌薬の吸入を以て第一の療法とするものであつて、テレピン油の吸入、ミルトール、醋酸鉛等の内服を處するのである。

◆民間治療法 それでなか／＼利かぬ漢方では瓜萎仁(烏瓜の核)を煎じて服ませるが、これは非常に利くものである。

### 第七十二節 肺に膿を持つ病氣(肺膿瘍)と其治療法

- ◆原因 本病は主として膿毒性葡萄球菌の肺臓に侵入するものであつて、肺炎、肺腫瘍、肺結核、其他急性傳染病、異物誤嚥、隣接器官の肺臓に空通する等によつて起るものである。
- ◆症候 咳痰の性状は主要なる徴候であつて、典型的のものにあつては、其咳痰は全然膿汁より成り、緑色を呈し、一種膿様或は乳脂様臭氣を放つもので、所謂膿口性咳出を爲すものである。全身症状としては肺結核の如く消耗性の發熱あり、患者は顔面蒼白色となり、寝汗に悩み、食氣亡失を訴ふるものである。
- ◆豫後 稀れに自然治癒を爲すものもあるが、多くは不良なるものである。
- ◆療法 膿液の分解を助がんが爲めに消毒薬及びバルサム類を與ふ(第六十四節參照) また患者の體力を保持せんが爲めに力めて滋養分に富める食物を與ふ。

### 第七十三節 肺膿ヂストマ病と其治療法

- ◆原因 本病は我國に多き病氣であつて、殊に熊本、岡山、仙臺に多いものである。其發病率は一種の寄生蟲であつて肺二口蟲と云ふ小さな卵形を有する蟲體である。
- ◆症候 咳痰は特徴を有するものにて、暗赤色を呈し顕微鏡にて見れば二口蟲卵並にシヤルコー氏結晶、膿球白血球を含有することが分る。其他患者は顔面蒼白色となり、呼吸困難を訴ふるも、全身の營養は比較的佳良なるものである。
- ◆豫後 本病の治療は困難なるも、直接に生命に危険を及ぼすことは無い。
- ◆療法 豫防法としては不潔なる飲食物を禁じ、療法としては單に對症的療法を施すのみ。最近エメチン注射で癒ると云ふ報告がある。

### 第七十四節 粟粒結核と其治療法

- ◆原因 肺結核其他の膿毒結核より將來するものは最も多き原因となるものである。
- ◆症候 全身倦怠、頭痛、稽留性の發熱を來し、胸膈、咳嗽、呼吸困難、鐵色痰嗽出等の症状を呈するものにて

あるが、本症に特有なるは脈絡膜結核と云ふと眼底検査上、灰白色の結核を脈絡膜に見るものである。

◆豫後 不良にして殆ど死を免るゝことは出来ぬものである。

◆療法 唯對症療法を施すのみであるが、其治療法は肺結核の治療法に準ずるがよい。

### 第七十五節 肋膜炎と其治療法

◆原因 肋膜炎の起る原因は種々あるが、醫學上では之を特發性の肋膜炎と續發性の肋膜炎と區別する。特發性の肋膜炎は外傷・打撲等によつて肋膜に充血を來すとか、或は小刀で胸壁を刺し肋膜に穴があいたとか或は何かひどい外來の刺戟假へば高い處から水中に飛び込んで胸を打つたとか、胸のひどい運動、長い間水泳をやつたとか、倒れて胸を打つたとか云ふことが起るのは外傷性の肋膜炎、それからリウマチ性の肋膜炎と云ふのがある。リウマチスは多く關節に來るが、中には其病毒が肋膜に來ると肋膜炎が起ることもある。即ちリウマチスが關節に來れば關節リウマチス、肋膜に來ればリウマチス性肋膜炎である。また其誘因となるものは塞胃で、塞胃から肋膜炎即ちリウマチス性の肋膜炎となる。それから最も多いのは結核性の肋膜炎で、肋膜と肺

とは密接の關係があるから、若し肺に結核があると、直ちに肋膜に傳染して結核性の肋膜炎となる。結核が先きにあれば、即ち結核性の肋膜炎となるが、中には結核が潜伏して居つて、發熱、咳嗽、喀痰等呼吸器の症狀が無くて肋膜炎となるものがある。結核性の肋膜炎は油斷のならぬものでいと恐ろしいものである。次には急性肺炎の經過中に肋膜炎が起ることもあり、肺壞疽、肺膿瘍、肺の梗狀出血等が原因となることもある。それから續發性には腹膜炎から波及する、つまり膈障膜の淋巴管の隙から肋膜に炎症が波及すると肋膜炎を起すが、これも結核性の腹膜炎から起るのである。それから心囊炎からもまた炎症が波及して肋膜炎が起ることもある。以上種々の原因があるが、其中に一番軽く然も經過の良いのは外傷性の肋膜炎である、尤も外傷性でも化膿したのは困難である。それからリウマチス性、これは肋膜に水が溜るが吸収されると癒るから先づ良い方であるけれども、最も多くして、而も最も恐るべきものは結核性の肋膜炎であつて、肋膜炎と云へば、先づ大抵は結核性と思ふてもよい位多い。そして直ぐに肺結核を起すから此種のものには最も恐ろしい。肺炎其他から起る續發性のもは、肋膜炎其物よりも、主たる病氣の輕重に大關係があつて主病の重い程悪く、軽い程良いは無論である。

時候の關係は夏から秋、秋から冬の入口が多い、リウマチス性も多いが、結核性も矢張り多い、急に寒くなつて、氣候の變化が起ると寒氣の刺戟で肋膜炎が起るから、秋からして冬の入口に向つて此病氣は注意を要するものである。尤も續發性のもは餘り時候とは關係が無い。

◆肋膜炎と肺結核との關係 世間の人は肺結核はひどく恐れるが、肋膜炎は恐れぬ處である、併し乍ら肋膜炎も肺結核と同じく注意を拂ひ、矢張り恐ろしいと云ふ考を持たなければならぬ、何故なれば肺結核の多くは、初め肋膜炎を發して其後に肺の方にかゝるのである、であるから肋膜炎は肺結核の先き觸れと考へてもよい位のもので、なか／＼疎末にならぬもの、肋膜炎に罹つたならば、既に肺病は門まで來たと考へて養生や醫生をせねばならぬのである。

解剖的に云へば、肋膜は薄い紙のやうな膜で肺の上を被ひ、其一部分は肋膜が胸廓の内側を被ふて居るのでつまり肋膜と肺とはくついて居る、隣り同志となつて居るので、之を擊つて見ると、丁度茹で玉子の皮を取るやうな膜があつて其れから白味がある、玉子の殼は胸壁で、薄い膜は肋膜、白味は肺と斯う云ふ關係になつて居るから、若し肋膜に病氣があれば直に肺に行き、また肺に病氣があれば直に肋膜に行くと云ふ風に、頗る

密接なる關係があるからして、肋膜炎も矢張り肺の病氣と同様に心得恐れなければならぬのである。

◆症候 肋膜炎には二通りある、濕性と乾性がこれである、濕性の方は水が溜まるが、乾性の方は水が溜まらぬ唯炎症だけである、そして病の起り始めは胸の左から右に痛みがあるから、乳房の下の方に痛みがあつて、然も深吸氣に餘計痛むと云ふ様なことがあつたら先づ肋膜炎に考を措て要心せねばならぬ、同時に發熱三十八度位になる、併しなかには熱の無いものもあるから、熱が無いとて安心は出來ぬ咳嗽は出ることもあれば出ないこともある、また水が溜れば胸が壓迫されるやうな重い感じがあるから早く醫師の診察を受けねばならぬ、乾性の肋膜炎でも矢張り痛みがある、咳嗽は出るがまた出ぬのもあり熱も出るのもあれば出ぬものもある、性質の良否を云へば濕性の方は急に起るが急に癒る、乾性の方は徐々に起つて容易に癒らぬ、と云ふのは濕性の方はリウマチス性が多いが、乾性の方は結核性が多いからである。

◆豫防法 豫防法としては平素から身體を鍛えるにある、即ち皮膚を強壯にして抵抗力を亢め、また全身の營養を亢めると云ふことが何よりの注意である、皮膚が弱いと寒氣に罹り易い、従つて其れが誘因となつて肋膜炎に罹り易くなるから、皮膚の強壯と云ふことは大切である、冷水擦などは皮膚の強壯法として最も宜しい

それから滋養食を摂ると同時に運動をよくせねばならぬ、金のある人は寒い時に避寒するもよからうし、庶民の人は寒い時には外出せぬもよからうが、若い人は成るべく寒氣に慣れるがよい、歐洲では肺結核の初期には全身を温保して雪の降る寒い冷い空氣を吸入させるが、これは強壯法として頗る有効であるから、若い人は平素から冷い空氣を吸入して肺を強壯にする必要がある、尤も弱い人には冷い濕潤なる空氣は有害であるから吸つてはならぬが、健康なる人は斯様にして呼吸器の練固法を講ずれば獨り肋膜炎のみならず總ての呼吸器病を豫防することが出来るものである。

◆呼吸器の練固法 此は栗本博士の推奨する方法であるが、其方法は毎朝冷水摩擦を終りたる後、先づ手掌を以て胸の前面を右左、右左と交るべく打つこと約二百、次で右の手掌を以て左の肩胛骨の上部(右の手掌を左の背にあてる、固くだけの程度に)を打つと同時に、左の手掌で右の胸側(脇の下)を打つ、次には左の手掌で右の肩胛骨の上部を打つと同時に右の手掌にて左の胸側を打つ、つまり右左交代にやるのである、其回数は一、二、これは肩胛骨上部肺尖等を強壯にする爲めの運動である、次には左右の手掌を胸骨(胸の真中)の左右に置き、上より下に迴轉運動をやる(拳は胸骨の左右に置きたるまゝ其れを離さず、肘をぐるぐる上げ下げ

する、丁度ぐるぐるの様な形に)此回数は一百、次は兩手をぐつと前面に延し、また兩拳を胸骨の左右に置き、前とは反対に下から上へ、ぐりぐりをやる、此回数も一百、次に左右の手掌には胸廓の前面を打つ(右にて左左にて右を打つ、大胸筋の強壯法)次で兩手をぐつと上方に伸し、また下げて兩胸を打つ、次で兩手をぐつと下方に伸す、此運動を行ふこと三十回、それから兩手を前に伸し次で高く上に擧げる、この際に深呼吸を行ふ次で兩手を下方に下るので此運動は二十回にて、これにて運動を終るのであるが、これに要する時間は七分乃至十分で、慣るれば七分間にて充分に出来るものである。

要するに運動は餘りに時間のかゝるものでは到底長く實行することは難しい、時間が長くかゝらずに比較的効果のあるものでなければならぬ、毎朝冷水摩擦を行ひたる後上記の運動法を行へば皮膚の濕潤も乾き、如何なる嚴寒でもボカ／＼温くなつて氣持がよいばかりでなく、朝飯もうまく食へる、風邪を惹くのは主として皮膚の薄弱、殊に肩胛部の皮膚の薄弱なのが最も多く原因となるから、此運動法を行へば胸廓を強壯になし、寒氣を豫防すると同時に、また肋膜炎初め其他の呼吸器病を豫防することが出来るものである。

◆療法 乾性肋膜炎にあつては、患部に温療法を施し其他芥子泥或は強酸泡膏等を貼用し、ヨード丁酸、テオ

ノール等の塗布を行ひ、左の内服薬を處す。

▲サリチール酸ナトリウム三、〇

水 一〇〇、〇  
右混和爲一日量、一日三回分服

薄荷水 五、〇

▲アスピリン 二、〇

右混和分三包、一日三回一包づつ

乳糖 一、〇

濕性肋膜炎にありては、利尿劑によりて漿液の吸収を促進するのである。

▲デウレチン 三、〇—五、〇

右混和分三包、一日三回一包づつ

カフェイン 〇、六

▲重酒石酸カリウム 六、〇

單 舍 利 別 八、〇

醋酸カルウム液 一〇、〇

右爲一日量、一日三回分服

水 一〇〇、〇

急性炎症が去つても尙ほ且つ滲出物の遺留を認むるときには左の薬劑を處し、以て其吸収を促進するがよい

▲ヨードカリウム 一、〇

單 舍 利 別 八、〇

苦味丁幾 二、〇

右混和爲一日量、一日三回分服

▲ヨ ー ド 〇、五

ヨードカリウム 二、〇

グリセリン 三〇、〇

右混和爲塗布料、一日二回づつ

若しまた漿液の滲溜多くして、隣接の機關を壓迫すること甚しきときは、速に肋膜炎穿孔を行ひ、漿液を排泄せしめねばならぬ。

化膿性の肋膜炎にあつては、肋膜切除術を行はなければ、治癒せざるものである。

以上は一般的療法であるが、肋膜炎は素人療治の出来ぬものであるから醫者から買はねばならぬ、併し呼吸器の腫い人や、結核性肋膜炎、または恢復後肺結核に罹るのを防ぐにはカルフーグレス錠(小石川製)



大家仲町三六救生藥園發賣を一日三回毎食後に服用するがよい。これは古來結核の聖藥として實用された意以の有効分にカルチウムを配合したもので凡ての結核に對して最もよく利くものである。  
肋膜炎の治療に近けるときには、胸廓牽縮を防止せんが爲め、呼吸操練法、即ち健側を壓し、上體を健側に屈け、深吸氣を行ふ處の運動を行ふがよい。

### 第七十六節 氣胸と其治療法

◆原因 本病は肋膜腔内に空氣の滲溜するものことであるが、多くの場合にありては空氣の外、液體を含有するを以て、之を水氣胸と云ひ、其液體の性状によつて漿液氣胸、膿氣胸、血氣胸等の區別がある。

肺結核は本病の最も頻繁なる原因であつて、其經過中咳嗽、努實、身體運動等に當り破裂して穿孔するものである。其他肺壞疽、肺膿瘍、氣管枝擴張等にも來ること多し、また肺臟の損傷、胸廓の外傷等によつて發現することもある。

◆症候 患者は俄然劇甚なる胸痛と窒息感覺を發し、呼吸困難を訴ふるものであるが、然も亦往々潜伏性に發

起し、胸部の理學的診斷を行ふに當り初めて之を發見することもある。其他患側の胸廓は膨大し患者は常に患側を下にして臥するものである。

◆後 原因によつて異なるが、肺結核に續發するものは其豫後不良なるものであるけれども、時としてはこれが爲めに結核の進歩を防止し得ることがあるから、此點に於ける豫後は寧ろ佳良と云はねばならぬ。

◆療法 平臥安静を命じ、モルヒネの皮下注射等によつて其疾苦を鎮靜し、時には肋膜穿刺を行ふこともある。

### 第七十七節 肋膜の腫瘍

◆種類 多くは他部の臟器より續發性に起るものであつて、轉移性癌腫即ち乳癌若しくは肺癌より來るものは最も多いものである。

◆症候 肋膜腫瘍の診斷は頗る困難なるものにして、其狀單純なる乾性肋膜炎若しくは結核性肋膜炎に似て居り、患者は胸内に壓迫、疼痛を訴へ、また頑固な咳嗽に悩まざる、胸痛は時としては頗る頑固であつて、諸種の鎮痛劑も其効を奏せざることが多いものである。

- ◆豫後 不良なり。
- ◆療法 殆ど施すべきもの無し。

第七十八節 寒胃と其治療法

◆原因 寒胃は非常に多い病氣であるが、其眞の原因に至つては不明である、或人は細菌なりと云ひ、或人は温度の不平均と云ひ、或人は身體の一部に寒冷を受ける爲めであると云ふが、兎に角寒氣が作用して、皮膚のこれに應じて變化する能はざる爲めに起るものであつて、皮膚の不潔、即ち長く入浴せぬことや、不潔の肌着を着用することや、または空腹時等にはこれにかゝり易きものである。

◆症候 寒胃の症候は何人も知つて居る通り、頭痛があり、或は寒氣がして體温が上り、食慾不振になつて味も宜しくない、咳嗽が出ると云ふのは普通であつて、重いになると身體の關節が痛むこともある。

◆豫防法 寒胃は一生の間は何處と無くかゝるものであつて、甚しきは冬にさへなれば必ず風邪を惹く夏でも少し油断すると直ぐにかゝると云ふ様な人があるが、此等の人は豫防法として皮膚を鍛練するが宜しく、冷水浴などは此方法の最も効あるものである、またカルアグレス錠を持薬として用ひて居るも宜しい。

水浴などは此方法の最も効あるものである、またカルアグレス錠を持薬として用ひて居るも宜しい。

一體風邪を惹くと云ふのは、皮膚が急激の變化に應ずることが出来ないからである、よくあることだが多くの人は、汗をかいて居る時に裸體になつて風に吹かれると直ぐに風邪を惹く、これは誰しもよく知つて居る處であるが、あれはどういふわけかと云ふと、皮膚が弛緩して居る所へ急に冷めたさが来るが、筋が十分に之に應ずることが出来ないから風邪を惹くのだ、處が冷水浴で皮膚を慣らして、寒暖の激變に應ずることの出来るやうにして置くと、何時寒さが襲ふて來ても皮膚の筋が收縮して、これに堪へるから容易に風邪をひかない、能く子供を可愛がる人達は、何でも厚着をさせたら風邪を引くまいと思ふて、未だ冬にならない秋の末方からして頭巾を冠せる、襟巻をさせる、手袋をはめさせると云ふやうに、厚着の上に様々な防寒の用意をさせるがそれは一切役に立たぬ、暖かさに馴れて仕舞ふと寒さに耐へる力が弱くなつて居るから、風邪を惹く機會はいくらも出來て來る、學校へ家から出す時には氣を付けてチヤンと着せてやるけれども、學校の休み時間に外に出るのには、手袋をはめたり、頭巾を被つたりしては居られない、さうすると直ぐに風邪をひいて仕舞ふ、さう云ふわけであるから厚着をさせるのは反つて宜しくない、就中襟巻、手袋などは老人の外用ひない方が宜し

い、老人は既々身體の各機能が減退して來て居るから仕方がないが、子供等は決して此等のものを用ひさせてはならぬ。寧ろ平生から寒暖の激變に堪へるやうに鍛練をさせて置くが宜しい。

◆療法 輕いのは唯温くして居れば宜しい。藥物は熱冷しを用ひるので安知必林(〇、五頓服)アスピリン(一回〇、五)等が賞用されて居る。また加密列(或はカミルム)の花三匁を煎じて飲んでもよろしい。

### 第四章 消化器の疾患

#### 第七十九節 口腔加答兒(口内炎)と其治療法

◆原因 本症は腸管扶斯、麻疹、インフルエンザ等の傳染病より起ることもあり、また心臓病、肺病等の腫血より、或は水銀中毒其他の中毒より來ることあるも、普通最も起る原因は飲酒、肉體の過度、過冷過熱の飲食物、齧齒、義齒の刺戟、齒牙の發生、不潔なる哺乳器等が原因となるものである。

◆症候 本症には急性と慢性とあり、急性症は口内が赤く腫れて痛み、分泌が多くなつて飲食に障害を來す。

また食味が變つたり、口内に臭氣を發すること等がある。慢性症は唯赤くなつて居るのもあれば、または痛みのあるものもある、そして急性症のものは治療宜しきを得れば、大抵二週間で全治に至るものがあるが、慢性症は數年の長きに達することあり、哺乳兒にあつては時としてこれが爲めに危險の状態を呈することもある

◆豫防法 豫防法としては齧齒ある人は之を填せしめ、義齒は夜間取り去り置き、酒、煙草其他原因となるものを避け、殊に哺乳兒にありては哺乳前、母の乳嘴、哺乳器等を清潔ならしめ、哺乳後にはまた口内を清潔ならしむるがよい、即ち保護者は爪を短く切り、清潔になしたる指尖に「ガーゼ」を巻き清水或は五十倍硼酸水を浸して口腔内を清拭してやり、また年長したる兒童にあつては自ら含嗽をなさしむるがよい、含嗽は初めの間はうまく行かぬものであるが、母親が側にあつて自ら含嗽をなし、其水をブツと吹き出して何處まで行つたなどと競争すると、兒童は興味を以て競ふて含嗽するやうになるものである。また熱病等にて口内の乾燥するものには五倍の硼酸グリシリンを添附するがよい。

◆療法 重症の口内炎にありては無刺戟性の冷い流動食物のみを攝らしめ、同處療法としては左の含嗽料を以て口内を清潔にするがよい。

▲三%鹽素酸加里水 六〇〇、〇

薄荷油 一滴

右口腔洗滌料、毎一時間含嗽、殊に食後には丁寧に數度含嗽するを要す。

尙ほ五十倍硼酸水、三プロセント硼砂水、皆常用するに足り、炎症劇しき所には二プロセント硼酸グリシリンを塗附し、口内の腫臭あるものには含嗽料として左の處方を與ふ。

▲酸 酸 糖 士 五、〇 水 一〇〇、〇

右一食匙をコップ一杯の水に稀釋して含嗽料となす。

慢性の口内炎には刺激を避け、龍肥含嗽料を用ふる外、同處療法として炎症ある場所に

▲サリチル酸 一、〇 酒 精 一〇、〇

蒸 餾 水 一〇、〇

右口内塗附料を塗附するがよい。

また酒客の慢性口内炎にニーマイエル氏は、臨臥前に大黃の小片を咀嚼せしむるがよいと云ふて居る。

### 第八十節 口腔腐爛症と其治療法

◆原因 本病は口腔粘膜炎に齒齦に於ける壞死及び潰瘍を來すものであるが、流行性に傳播することもあり、小兒は第二生齒期に、膿本病に冒され殊に虛弱なるものは多く停さる、其他水銀中毒、壞血病にも來るものである。

◆症候 患者は口腔内に疼痛を訴へ、唾液の分泌は亢進し、口臭甚しく、所患齒齦は強度の潮紅腫脹あり、出血し易く、褐色甚しきは黒色の壞死面に變ずるものである。

◆療法 口腔を洗滌を以て第一の療法となし、即ち三プロセント鹽素酸加里溶液、〇、三乃至〇、五プロセント過マンガン酸カリウム溶液等の咳嗽を施し、ミルラ丁幾の塗布を行ひ、潰瘍深き時はプローム水素酸、硝酸銀棒等を用ひて腐蝕するがよい。

### 第八十一節 口中惡臭と其治療法

◆原因 口の臭きには種々の原因がある。胃の悪い爲めに起るものあれば、齶歯の爲めのもある。また前の

口内炎の爲めに起るものあれば、或はまた齒齦壞疽になつた爲めに腐敗菌が入つて、其處に硫化水素や安息尼

亞、炭酸、ブトマイン等の臭い有害瓦斯を發して、それが口中より外に發散する爲めに起るものもある。

◆療法 胃の悪い人は胃を癒し、齶歯はこれを填充し齒齦の壞疽になつたも同じくこれを填充すると宜しい。

また口中一般衛生として左の含嗽料の何れかを常用すると宜しい。

▲深藥 丁 幾 五、〇 ラヴェンデル精 九五、〇

サツカリン 一、〇

右洗滌原料となし、コップ一杯の水に一茶匙を混じて使用に供す。

○ミユルレル氏「チモール」安息素水

▲チ モ ー ル 〇、二五 安息香酸 三、〇

オイカリブス精 一五、〇 酒 精 一〇〇、〇

薄荷油 〇、七五

右洗滌原料、コップ一杯の水に壓過し著明の濁濁を生ずるに至るを度と、使用に供す。

### 第八十二節 齒痛の治療法

◆鑑別 齒の痛みには、死んだ齒から來り、痛みであるか、まだ生きて居る齒が痛むのであるかを鑑別するの必要がある。齒の痛んで來たときに冷水を含み、或は湯を含んで、それが痛みのある齒に冷く、或は熱く感ずるのは齒の未だ生きて居る證據であり、同時にまた痛い齒を噛み合せると飛び上るやうな痛みを感ずるのもこれを活きた齒の證據であるが、それに反して死んだ齒の痛みは熱い湯にも冷い水にも感じない、齒古しいやうな一種特別の痛みがある、そして噛み合せると一寸痛みが加はるやうになるけれども、其をなほ噛み合せてギユツと締めるやうになると漸く痛みが去つて心地がよく、それを放すとまたシク／＼痛んで來るものである。

◆療法 そこでこれは死んだ齒の痛みである、活きた齒の痛みであると云ふことが分つたならば、應急手當として、活きた齒ならばクレオソートか石炭酸を脱脂綿に浸して齒の腔に入れると神經を麻痺させるから、思ひの外に特效がある、けれども死んだ齒の痛みには此等のものは無効であるから、さういふ時には齒の中にある

瓦斯を發散させると大體樂になる即ち消毒した清潔な針か、醫のやうなものを持つて痛む齒を出來得るだけ穿つて硬くて穿れなくなつたならば、決して心配はいらぬから勇を鼓して齒の奥まで突いて見ると、スーと針が痛みなしに入つて了ふ、それをまたスーと抜くと一種の臭い瓦斯が發散して痛みが軽くなるから、其處で清水で充分に含嗽するか、または五勺の水に二食匙の重曹を溶解せしめたものに、薄荷水を少しく混ぜるものを適宜水に加へたものにて、充分含嗽するとよい、そして其後は齒科醫に就て填充して貰ふと再び痛みは起らぬものである。

### 第八十二節 齲齒と其治療法

◆原因 齲齒の起る原因は、主にも口腔内殊に齒間或は齒の咀嚼面に棲つて居る食物が分解して乳酸を生じ、乳酸と細菌との作用によつて齒を腐蝕せしむるものである。其他には人種の關係等もあり、また文明は食物の調理法を進歩せしむる爲め、齒牙を用ひること少い結果不良ならしむることになる。妊娠、貧血等もまた原因となり、過熱、過冷の飲食も害を爲す、職業にては工場または鹽酸、硝酸、硫酸等の製造所に居る人、菓子

齒の構造を示せる縦断面圖



屋、砂糖屋、米屋、粉屋等に齲齒の多いもので、地方と都會とを比較すれば都會の地の住民に多いが、要するに此等の總てのものが原因または誘因となるものである。  
◆症候 齲齒は誰も知る通り、齒に穴が出來て、そして痛む病氣であるが、これは口中にある細菌の爲めに齒の腐蝕して行くものである。齒の腐つて行く其初めは齒の表面の咬み合ふ處の小さい溝が齒の横の細い縦溝の所に黒い色がつき、其處へ小楊子か針のやうな細い物を挿し込んで見ると内部へ深く入る、さうして其腐蝕の深くなるのが早い人と遅い人とあつて、早い人は僅かに二三月の間に奥深く蝕れるが、遅い人になると十年位かかることもある、このやうに最初は珪瑯質を侵し、次には象牙質を侵蝕して遂には齒髓までも侵して行く

と、其處には神經管があるのでシク痛み出すのである。  
◆預防法と療法 齲齒はなかなか多い病氣であるがこの預防法としては、齒の清潔に注意するが大切であつて毎食後、就床前

等には必ず口中を清潔ならしむるが宜しく、また既に齒に小孔の出来たものであつたならば、速に齒科醫に就て填充して質ふと齦齒の進行を停止して、永く其齒を保つことが出来るけれども、若し炎症既に進んで根部に達せるものにあつては最早これを抜き取るより外に策が無い。

### 第八十四節 齒齦炎と齒槽膿漏及び其治療法

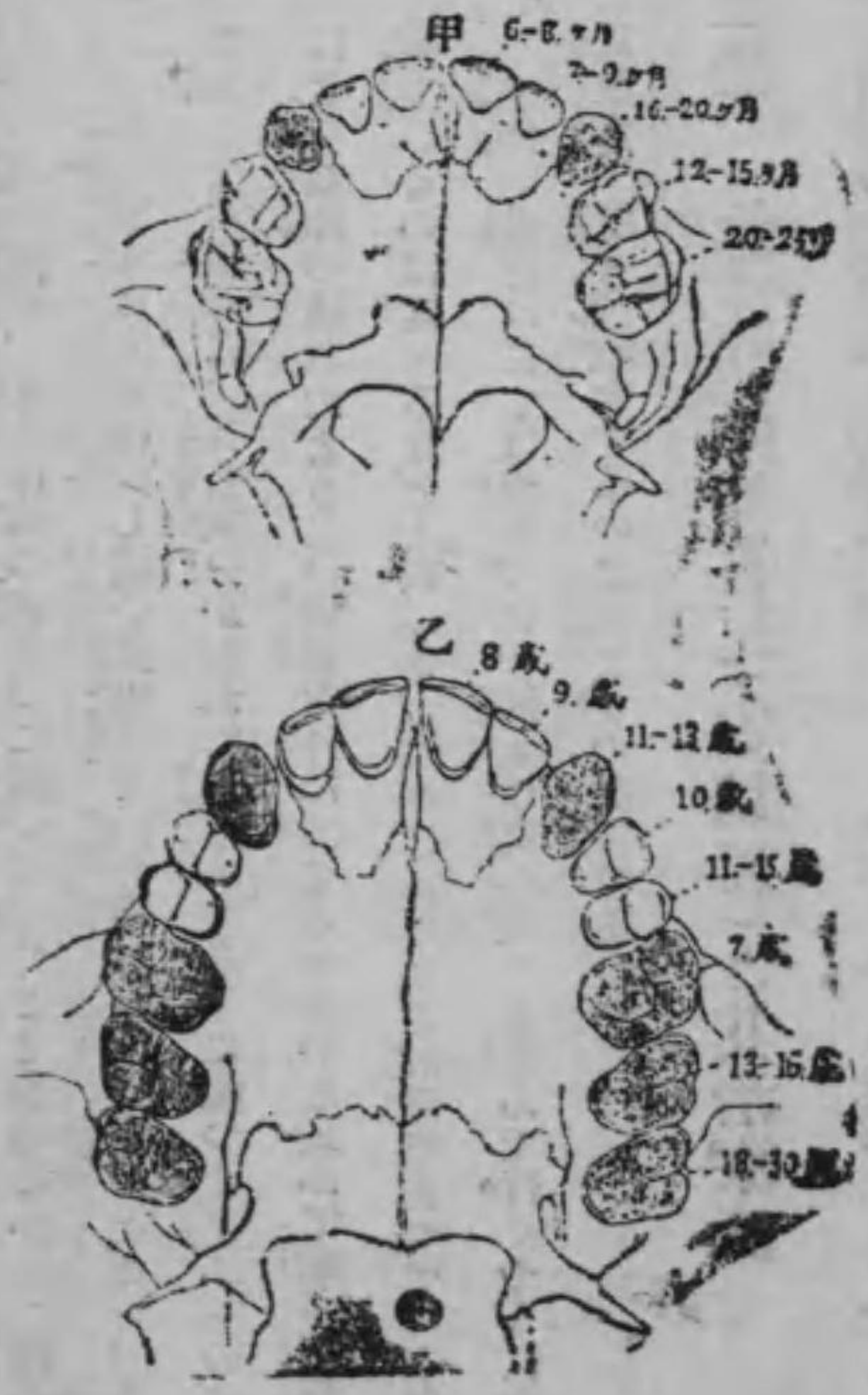
◆齒齦炎 齒齦炎は年甲齒槽が膿んだ様に充血して居て、果物でも食べると直ぐ血が出る、つまり齒齦の肉が弱い人になるもので、其處に病菌が附きたがるから起る病氣であるが、唯腫れたのなら、百倍の硝酸水を含嗽を爲し、口内を清潔にして置き、腫れた齒を脱離で拭ひ、水刃を取つて沃度一幾を塗るとよい、先きに齒齦を拭ふて置くと沃度一幾は他に取らないものである。それから今度は小楊子の先きへ脱脂綿を捲いたのに、矢張沃度一幾を含ませて齒齦の腫れた内側へ塗る。或、また清潔な毛で塗つても宜しい。そして其後は少々経つてから水で含嗽をすると、藥の滋味は取るれから、これを一日二三回繰返してやる

### 科 内

齒止其發露期を示す  
(齒久永は乙) (齒乳は甲)

大	小	犬	切	切	犬	小	大	
白	白	齒	齒	齒	齒	白	白	
齒	齒	1	2	2	1	2	3	16
上	2	1	2	2	1	2	3	16
下	2	1	2	2	1	2	3	10
上	2	1	2	2	1	2	3	10
下	2	1	2	2	1	2	3	10

永久齒  
乳齒



◆齒槽膿漏 それから膿の出るもの、これは齒を受けて居る齒の槽が腐つて膿の出るのであるが、此膿の中に

と大抵は癒つて了ふものである。

は必ず石灰分が混つて居る。早く云ふと齒の中に石が入つて居つて齒齦に石が溜る。此石が粘膜を突いて齒齦膜炎を起し、粘膜が腐つて、また其處へ石が溜る。遂には齒の底までに腐つて行くことがあるから、斯る場合には早期に治療を受けるがよろしく、素人療法としては少し濃い食鹽水を指の腹へつけて擦るとよい、さうすると鹽水の剝離で肉や粘膜が鬆つて強くなる爲めに、其石灰分が取れて重症にならずに癒つて了ふものである。尚ほ序ながら云ふて置くが、素人はよく齒齦の腫れたときに、病氣を外に出す方がよいと云ふて頬や顎を冷したり、または温めたりなど、或は鹽辛いものは食べるなどと云ふが、これは甚しき間違であつて、これが爲めに皮膚や粘膜は益弱くなつて、唯痛い處だけにては済まずに、病氣は奥へ奥へと進んで行くやうになるから、此際には斯様なことをせずに食鹽水で度々含嗽するのは何よりの療法である。

### 第八十五節 急性咽喉加答兒(安魏那)と其治療法

◆原因 猩紅熱、麻疹、腸、耳、鼻、天竺豆、疥癬等の傳染病に來り、また鼻腔、胃の炎症發熱して起ることもあり、其他化膿的、濕熱的、器械的の刺激が原因となるものである。

◆症候 咽喉に狭窄の感があつて嚥下困難、疼痛あり言語も亦障害せられ、多くは惡寒若しくは熱候を以て發熱し、熱は二三日にして消散するも、他の症候は尙ほ變るものがある。  
◆療法 靜臥を命じ、流動性の食物を請らしめアスピリン、安知必林等の解熱藥を與へ、三プロセント鹽素液カリウム水にて含嗽せしめ、患部に左の塗附藥を塗附するがよい。

▲ヨードフォルム 一、五  
稀 酒 精 五〇、〇  
右混和爲塗附料  
タンニン酸 一、五

### 第八十六節 慢性咽喉加答兒と其治療法

◆原因 急性症の反復發生するによつて發す、其他濕熱、唱歌者、俳優、教師、士官、粉商、石工、麵粉商等に職業性疾患として來りまた酒客、喫煙家に發するものである。

◆症候 咽喉部は乾燥、搔刺若しくは灼熱の感ありて嚥咳を頻發す、喀痰は多く粘液様にして間々咽喉に於け



る血管の破裂に由り、血液を凝らすことあり、其他往々反射的作用に由り頭痛、心神の沈鬱、思考力の薄弱を來し、喘息、癲癇を發することが間々ある。

◆療法 其原因を去り明礬水(二—三プロセント)、タンニン水(一—三プロセント)を以て合飲を行ひ、タンニン酸グリセリン(四—一〇プロセント)また左の藥液の塗布を行ふ。

- ▲プロタールゴール 〇、二
- 蒸 露 水 一〇、〇
- 右混和塗布料
- アドレナリン 一、〇

其他硫黃浴、食鹽浴、ヨード浴等の溫泉療法によつて効を奏することがある。

### 第八十七節 扁頭腺炎と其治療法

◆原因 安眠那の反復襲來するによりて發し、また先天性に來することも間々ある。

◆症候 多くは何の疾苦を醸さぬが、時としてはこれが爲めに慢性咽頭加答兒を誘發し、咽頭部に乾燥及び辛

刺の感を來し、扁桃腺の腫大を伴ひ、其肥大強度に達すれば、呼吸困難及び嚥下困難を來し、患者は常に口腔を開いて呼吸し、睡眠時に當り高き聲を放つ、其他氣管枝喘息、頭痛、頭重等の反射的發作を併發することがある。

◆療法 一〇プロセント沃度、幾、一〇プロセント硝酸銀水等の塗布を行ふも、多くは効無きもの故、扁桃腺切除術によりて、扁桃腺を除去するのが最も有効なる療法となるものである。

面 斷 の 頭 喉 び 及 頭 咽  
(時 の 吸 呼 乙) (時 の 下 嚥 甲)



のである。

### 第八十八節 咽頭結核と其治療法

- ◆原因 肺及び喉頭結核の併發症となりて發す、其原因發性のものは極めて稀なるものである。
- ◆症候 所患咽頭は帶黄灰白色の沈着物を有し、扁平なる潰瘍を形成し、患者は嚥下の際強度の疼痛を訴へるものである。
- ◆療法 肺結核に於ける療法を行ふの外、鹽素酸カリウム液の含嗽、三〇—七〇プロセントの乳酸水を塗布す。

### 第八十九節 咽頭梅毒と其治療法

- ◆原因 本症は第二期及び第三期梅毒に於て併發するものである。
- ◆症候 第二期梅毒性變化は梅毒性咽頭炎となりて發し、環狀状若しくは廣汎性の潮紅を呈し、類白色或は類灰色の被膜を沈着して少しく隆起するものである。

### 第九十節 食道狹窄と其治療法

- ◆第三期梅毒には、護膜腫を形成し、化膿性潰瘍によつて廣大なる崩壊を來すものであるが、これが若し破口蓋に來れば、遂に鼻腔に穿孔するものである。
- ◆療法 ヨードカリウムの内服、沃白軟膏の塗擦等一般梅毒療法を行ふがよろしい。
- ◆原因 其の最も頻繁なる原因は食道癌腫であつて、環狀に發生して食道内徑をして狹小ならしめ、甚だしきは全く之を閉塞するに至る、また隣接器官に發生した腫瘍の爲めに壓迫性狹窄を來し、誤嚥せる異物によりて異物性狹窄を發するものである。
- ◆症候 患者は嚥下困難を訴へ、液體にあらざれば嚥下すること能はず、狹窄甚しければ遂には飲料をも取る能はざるに至り、爲めに漸次餓餓の状態に陥るものである。
- ◆療法 食道消息子によりて器械的擴張法を施すの外道無し、けれども大動脈瘤の如きものにあつては消息子を用ひることは禁忌である、藥劑にては殆ど奏効するものなきも、腐蝕に因する癰疽性狹窄には、デオジナミ

ン溶液を隔日一回肩胛間部に注射して奏効せる報告もあるから、これを試みるもよからう。

### 第九十一節 食道憩室と其治療法

- ◆原因 本症は食道の壁に於ける局限性膨出のことであるが、誤嚥せる異物若しくは頸部の外傷等原因となるものがある。
- ◆症候 其初期には殆ど何等の症状を呈せざるも、漸次嚥下困難を來し、飲食物の一部分憩室に殘留し後一定時を経て食物の吐逆を來す、其食物は腐敗し甚しき惡臭を放つ、憩室の增大甚しきに至れば壓迫せられて遂に食道狭窄の症状を來すものである。
- ◆療法 百倍の硼酸水を以て洗滌するも宜しきも、根治法は外科的手術を以て其切除を謀るのが最も肝要である。

### 第九十二節 急性胃加答兒(食傷)と其治療法

- ◆原因 本症の主なる原因は食傷、即ち暴飲暴食または不良なる中毒性の飲食物を用ひたる爲めに起ることが最も多い、其他急性傳染病例へば室扶斯等に續發することがあるが、また大に個人的素因もある。
- ◆症候 本症に起る症候は主として自覺的症候即ち食思減損、惡心、嘔吐、噯氣、胃部の膨滿、疼痛、また頭痛、頭部昏迷、眩暈等を來すものである。
- ◆療法 食傷には、胃の空虚療法と云ふて、胃を洗滌するか、吐瀉を用ひて胃内物を吐出せしむるにある、吐劑中最も實用せらるる藥物は、鹽酸アポモルフィンであるが、これは毒藥にて然も皮下注射用のもの故素人には用ひられぬから、應急療法として鳥の羽毛を以て咽喉部(舌根の處)を摩擦するがよい、かうすれば大抵は嘔吐を催すものである。また指を以て舌の奥をかきまはしてもよい、嘔いたら鹽湯を澤山飲んでまた嘔くこうして胃を洗ふとよい。

▲薄 荷 油 〇、一 乳 糖 〇、五

右一包ごなし、一日三回一包づゝ「オプランド」にて服用

疼痛に對しては、胃部に溫療法を施すが宜しく、藥劑にては

を與へるがよろしい。尚ほ食餌は、始め絶食して胃の安静を計り、疼痛が止まつたならば牛乳を稀薄なる茶に混じて一日數回用ひ、其後一日二回づゝ米湯スープ等、數日の後には馬鈴薯の糊泥状になせるもの、牛乳卵、粥等を與へるのであるが、酒は絶対に禁物である。

### 第九十三節 慢性胃加答兒(胃弱)と其治療法

◆原因 長時持續する食餌上の不衛生的刺戟、即ち香料の嗜好、飲酒、喫煙、藥劑の連用、食物の咀嚼不充分、齒牙の不良、半業は主要なる原因となるものである。また一般に女子より男子に多く、小兒より大人に多く時としては胃弱家族と云ふと、一家悉く本病にかゝることもある。

◆症候 本症は日本人に最も多きものにて、通常胃弱或は胃弱と唱へて居るものゝ多くは此慢性胃加答兒である、此病にかゝると何と無く物は食べたくないが、中には非常に食べたくなるものもある、そして少し物を食べると直ぐに胃部は膨滿つて來、嘔氣や嘔雜が起り、胃部の壓痛、便秘等を來して、遂には全身倦怠、羸瘦、貧血等を來すに至るものである。

◆療法 本症の初期には胃酸過多を起して酸い液が出來て減酸性、終りに無酸症に陥るものであるから、藥劑も其時期によつて異なるものである、即ち過酸症には

▲重碳酸曹達 四、〇 大硝酸蒼鉛 一、五

ロートニキス 〇、〇六

右混和三包ごなし、一日三回毎食後三十分一包づゝ用ふ

減酸症または無酸症を來せるものには

▲稀鹽酸 一、〇 純ペプシン 二、〇

單舍利那 八、〇 水 一〇〇、〇

右一日三回毎食後分服

また粘液分泌多量なるものには

▲チアスターゼ 一、五 パンクレアチン 二、〇

重碳酸曹達 三、〇

右爲三包、一日三回毎食後十五分に服す、胃酸増強あるものには左の處方を與ふるがよい。

▲レゾルチン 〇、三 サツカリン 〇、〇五

乳糖 一、五

右爲三包、一日三回毎食前十分分に一包づゝ服用

また慢性症にはセンフリを振り出して用ゐるのが効がある。

本症にはまた鑛泉を飲用せしめて効を奏することがある、即ち過酸性慢性胃加答兒には亞爾加里性硫酸鑛泉、亞爾加里性硫酸鹽鑛泉を與へ、減酸性及び無酸性のものには食鹽泉を與ふるがよい。

本症の多くは不適當なる食養より來たるもの故、其食養生には最も注意を要するものであつて、食養が惡ければいくら藥を浴びる程服んでも決して癒らぬものである。食養生としては過酸性の場合には刺激性食物假へば香料、酒類、酸味の果實等を避け、肉類の少量づゝと、バター、乳脂、牛乳等の良好なるものを用ひ、減酸性には肉食は餘り宜しくはないから、重症であつたならば米湯、大麥煮汁、草湯、牛乳等を用ひ、時には食前に少量のポルド酒を用ひるとよろしい、輕症のものにあつては、纖維の柔軟なる鶏肉、鳩肉、其他の野禽肉を

上とし、次に赤色の獸肉脂肪の少き魚肉の刺身等は食べても宜しいが一回の分量は二十五匁を越えてはいけな  
い、また良好なるバターの少量も宜しく、總て食事は一回の量は成るべく少くして一日四五回用ひるがよろしい  
また其調理もよく手を代へ品を換ふる等の注意を行ひそれから本症には喫煙は悪しきもの故禁するの必要があ  
る。

### 第九十四節 胃潰瘍と其治療法

◆原因と誘因 本症の原因となるものは、魚骨其他の異物によつて胃を傷けたる時、胃酸の過多によつて化  
學的腐蝕を來せる時、過熱の飲食物嚥下による胃粘膜炎の火傷、胃血管の病變、貧血、惡液質、皮膚の廣汎な  
る火傷、マラリア、心臟病等である。

次に誘因または素因となるべきものを擧ぐれば、第一は男女の關係、これは男子よりも女子に來ること多く  
二倍或は六倍の多數を示して居る。年齢の關係は、女子は二十歳乃至四十歳の間、男子は三十歳乃至五十歳の  
間に多く、十歳以下の小兒、七十歳以上の老人には本症を見ることは無いと云はれて居る。それから職業の關

痙は、軀體、筋脈の如く上半身を屈曲して勞働に従事するもの、腹部を壓迫しつゝ勞働するものに多いものである。食物の關係は粗食をするものよりは、寧ろ美食する中流以上のものに多い、尙ほまた地方的關係もあるが、我日本はどういふ關係になつて居るかは明瞭でない。それから遺傳、月經閉止等も關係があると唱ふる學者もある。

◆症候 本症は其名の如く胃の粘膜に潰瘍の出來てゐるのであるから、其處に何か觸れると非常に痛む其痛みは灼熱痙攣様の一種特異のものである、そして空腹時には痛まぬが何か食べると痛む、通常食後三十分乃至一時間位にて腹痛が起り、漸次増進して遂に嘔吐するに至るものである。酸過多症の場合にも胃痛が起るがこれは何か食べると痛みが止まる、潰瘍の方は之に反して食べると痛んで來る、これが此二つの症の鑑別點であるから食後に痛むやうなことがあつたならば特に注意を要するものである。

次には胃の出血、潰瘍が胃の潰瘍を蝕食せる結果胃内に出血するので、吐血或は下血を來すに至るが通常吐血は鮮紅多量のものである、つまり前の胃痛と此出血とは本症の二大特徵である。其他嘔吐、消化不良、悪心嘔氣、吞酸噯氣、腹痛等がある、尙ほ本症にあつては、食欲が他の胃病の如く缺損するものには無く、反つて

亢進する位であるけれども、食後に起る疼痛を恐れ食を取れぬものが多い、所謂恐食症とは此状態を云ふのである。

◆療法 出血時には絶對的安靜が必要であるから、床上に仰臥の位置をなし、排尿、排便等の爲めに身體を動かすことは許されない、尙ほ病室を暗くして精神上の安靜を計り、胃部に氷嚢を貼て、止血薬の注射を行ふ、また内服薬としても同様止血薬を處す。

- ▲ゼラチン 五——一〇、〇 單舍利那 一〇、〇
- 蒸餾水 九〇、〇
- 右溶解混和、每一時間温めて一食匙づゝ服用

出血時には絶對的安静を必要とし、口渴あれば僅かに氷片を含ましむる位に止め、營養悪しきものには滋養瀉瀉を行ふ、出血止りて後も食物に對しては大に注意を拂ふべきもので、これは一に主治醫に任かすが一番安全である、尙ほ止血後毎朝天然カル、ス泉鹽五グラム乃至十グラムを服用せしめ、其他硝石、硝酸銀、オレイン油等も賞用せらる。

第九十五節 胃擴張(留飲)と其治療法

原因 胃擴張症と云ふ病名は素人が口にすればかりでなく、よく醫者も胃擴張症と云ふ診断を下すが、實際はさう多いものではない、否少いもので、普通は胃下垂症を誤診せる結果本症が多いもの、様に思はれたのである。一體胃は自己の輸送力、輸送すべき食量、胃の輸出口即ち幽門の廣さと此三つの關係が整然として居る場合には、胃の運動機能の正しきを得るものであるが、若し此三つの内の一つに不調和が現れると、其運動に支障を起すものである、併し此支障も或る程度までは代償さるゝものであるけれども、其不調和が甚しいとか、或は長いとか云ふことになるに遂に胃の擴張を來すに至るものである、即ち第一の輸送力減退を來すものは、胃アトニー症、胃筋弛緩、老癯、脂肪浸性、第二は食量の過大、第三即ち輸出口の異常は幽門部の狹窄を來すべき痕癆生物等にて、此等が皆胃擴張の原因となるものである。

症候 本症は他の胃病に於ける如く胃部膨滿、壓重の感、嘔氣、苦悶、胃痛等あつて、食欲は初め進み後に減少し、水分吸收不良の爲め口渴甚しく、また嘔吐は本病に主要の徵候であつて、夕長或は夜間に一回嘔吐するが、或は毎食後二三時間に多量の嘔吐を爲すに至るものである。尙ほ其他營養不良、尿量減少、皮膚乾燥、頭固の便秘、頭痛、眩暈、指趾の知覺異常等を來し、全身羸瘦して腹壁菲薄に、空腹時に胃部を振盪すれば著明なる振水音を發するものである、尙ほまた本症の合併症としては慢性胃加答兒、癌腫、テタニー、胃下垂症等を來すもの、頗る注意を要すべき病氣である。

療法 按摩、水治法、電氣療法等は實用するものであるが、幽門部狹窄の爲めに起れる擴張は殆ど効無く、それから胃洗滌は大に實用されて居る、藥物にては左の處方を與ふ。

- ▲ホミカエキス 〇、〇三
- ライバル 〇、〇六
- 次硝酸蒼鉛 一、〇
- サリチル酸 一、〇

右爲三十九、一日三回毎食後に十九つゝ服用  
民間療法としては、牡蠣の貝殻を焼いて粉末にしたものは頗る効がある、これは牡蠣末と云ふて藥屋にもある。一日三回一匁づゝ服用するがよい。  
尙ほ便秘あらば下劑を與へ、口渴には氷片、冷却せる飲食物等を與ふ、それから食思缺乏には卵黃を少量の

赤酒に混して與ふるがよろしく、肉類は牛肉を細割して焼き、或は軟きビステークを與へ、鶏肉、犢牛肉、豚肉のよく細割せるを焼きたるもの、魚類にありては鮭、大口魚、梭魚、植物性食品にては米飯、粥、パンビスケットの焼きたるもの、ホーレン草、若き胡蘿蔔の軟かに煮たるもの、豌豆の糊状になせるもの、砂糖等皆實用するに足るが、其一回の分量は少くして一日五六回食するがよろしく、また百方内科的療法を試みて効無きものには、外科的手術によつてこれを治療するがよい。

### 第九十六節 胃下垂症と其治療法

◆原因 本病は後天性胃變位症にして縦長なる胸廓を有する人體に發せし、強度の腹部緊扼を以て主要なる原因とするものである。

◆症候 胃は常位よりも下方に轉移し、胃運動の緩慢となり、患者は食思缺乏、嘔氣、嘔雜、胃部に壓重の感を訴へ、ヒポコンデリーに變じ、居常鬱々として樂まず、遂に業務を廢するに至るものである。

◆療法 腹部緊扼を察し、飲食物を節し、少量を一日數回に食せしめ、全身の強壯法殊に體操、冷水摩擦、水浴等を勵行せしめて強壯を計り、胃の感電氣療法、按摩療法等を行ふ。

### 第九十七節 神經性消化不良症と其治療法

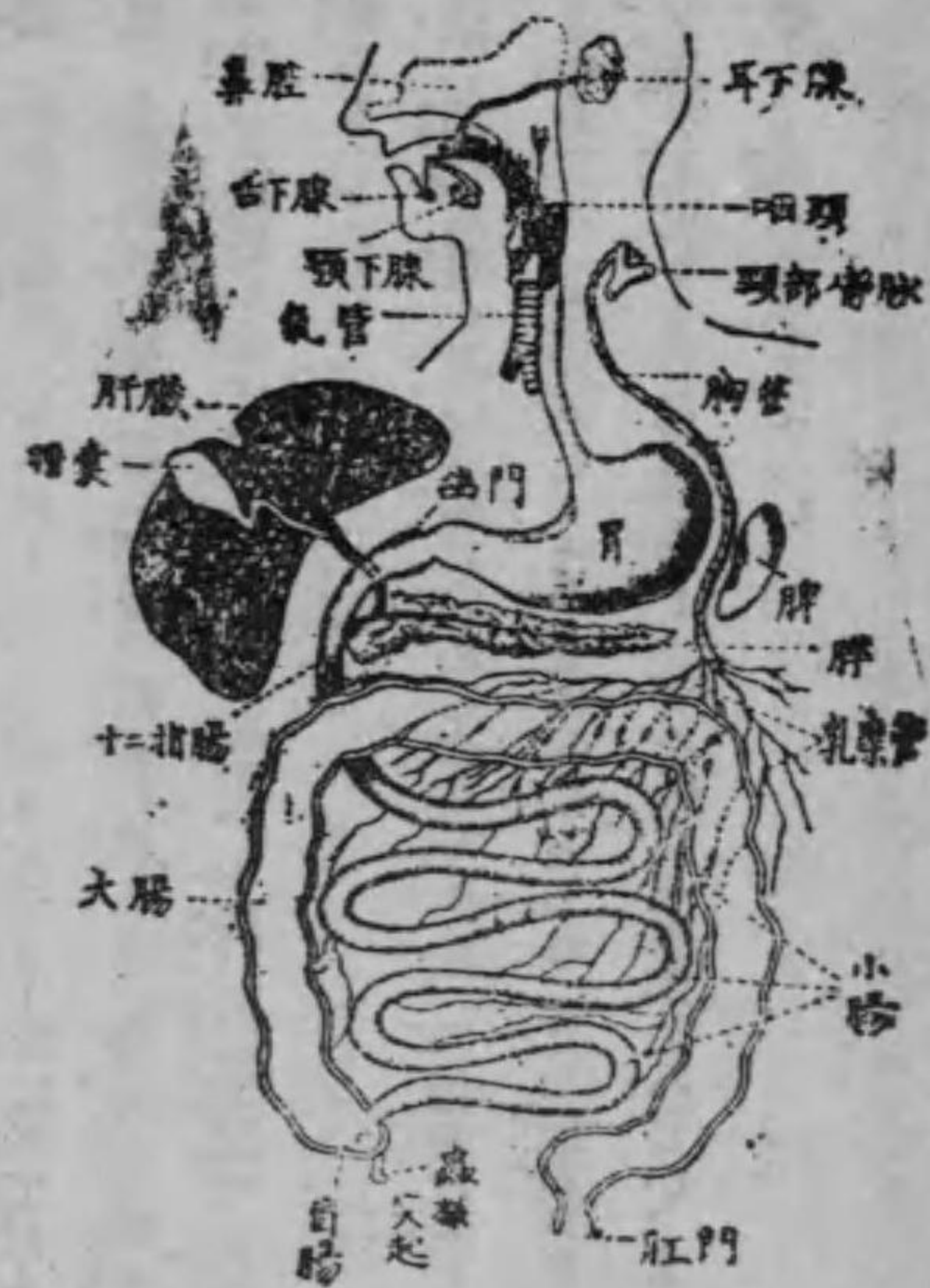
◆原因 神經衰弱症、ヒステリー、ヒポコンデリー等に於て最も多く發するものである。

◆症候 食物攝取の後胃部に壓重、膨滿の感あり、嘔氣及び嘔雜に悩まされ、或は空腹時に當り、胃部に疼痛様の不快なる感覺を起す、其他頭重、眩暈、不眠、心窩苦悶、心悸亢進、四肢厥冷、思考力萎弱、記憶力減退等を伴ふものである。

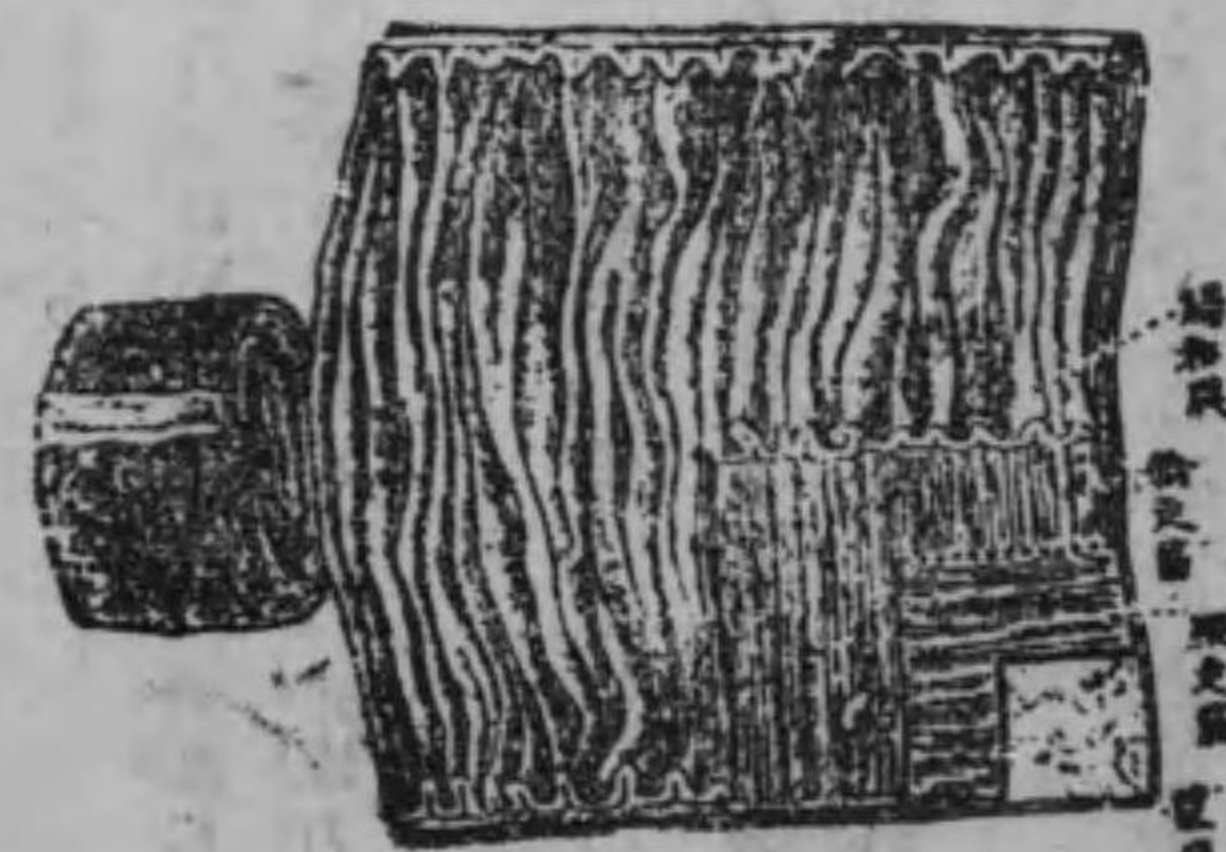
◆療法 消化し易く且つ滋養に富める食餌を與へ、内服薬は成るべくは與へず、唯苦味丁幾（一日二、〇）センプリ等を與へ、海岸若しくは山間に轉住せしめ、また皮膚の冷水摩擦法を行しむるがよろしく、尙ほまた食欲不振を來せるものには野菜スープを飲ませるがよろしい、また根治療法としてはカルピタミン錠を毎食後に三粒づゝ與へるがよろしい。



示を腺化消と管化消



示を造溝の管化消



第九十八節 胃痙(サシコミ)と其治療法

原因 ヒステリー、神経衰弱、貧血、病後の恢復期等にて身體の衰弱せる場合に起るものが多い、其他過敏

症 分泌過多、婦人生殖器病、有膿癆、マラリア、腎臓炎其他の病氣に起るものである

症候 本症は食物とは何等關係なくして起る處の心窩の疼痛である、此疼痛は多くは突然起るものであるが中には心窩に膨滿の感があり、嘔氣、惡心、頭痛、眩暈等の前驅症があることもある、そして多くは忿怒、憂苦等の精神感動が誘因となるもので、よく演劇などに見る癡、あれは實際眞を穿つて居るものである

療法 胃痙を患ふる人の多くは、神経質、ヒステリー等にて營養不良に、時としては胃下垂症、胃アトニー症等を認むるとあるも、發作時以外には殆ど胃病の徴候を認めざるものが多い。本症の療法としては、神経質のものには臭劑を與へ、有膿癆には沃度劑、マラリアにはキネネを處して原因療法を行ふの外、應急療法としては胃部に芥子泥(粉芥子を水にて練り、半紙を二つ折にして、其半枚に厚さ五厘位に芥子泥を塗り、残り半枚を其の上に重ねて用ふ)を貼し、または日本酒一勺位か若しくは熱き茶を飲ましむるがよい。藥物にてはモルフィンの注射安知必林(〇、五) 樟草丁幾(十五滴を水に和し)ピラミードン(〇、五)を頓服せしむるがよい

前にも云ふ如く本症を患ふるものは虚弱、神経質等のものが多いから、常に食物に注意して營養の恢復を計

り、カルビタミン錠を持薬として用ひ、また冷水浴、海水浴等を行ひて神経を強壯たらしめ、尙ほ蠟蟲其他寄生蟲の有無を檢べ、若しあらば速に驅除法を行ふなどは、發作時以外平素に於て行ふべき衛生法である。

### 第九十九節 酸過多症と其治療法

- ◆原因 胃潰瘍、神経衰弱、ヒステリーに於て併發したる神経性消化不良に來ることが間々ある。
- ◆症候 患者は胃部に脹重及び灼熱の感を訴へ、間々劇甚なる胃痛を來す、食後二時間に採取したる胃液は〇・二五プロセント以上の游離鹽酸を含有するものである。
- ◆療法 原因的疾患を治し、左のアルカリ性薬剤を與ふ。

▲天然カル、ル泉鹽	五、〇		
右寫一包與十包、一日三回一包づゝ			
▲重碳酸ナトリウム	三、〇	次硝酸銻	〇、五
糖	一、〇		

右寫和分三包、一日三回一包づゝ

### 第一百節 酸減少症と其治療法

- ◆原因 急慢の胃加容兒、胃癌、胃粘膜の澱粉樣變性に來り、貧血者、慢性病患者に於て發し、また一個の臟立せる疾患となりて現るゝものである。
- ◆症候 患者は嚙食後幾くも無くして胃部に膨滿、壓重の不快なる感を訴へ、往々胃痛にて悩まされ、食後二時間にて採取したる胃液は鹽酸の反應を缺如し若しくは其反應が微弱なるものである。
- ◆療法 原因を去り、稀鹽酸（胃加容兒條下參照）を處するがよい。

### 第一百一節 胃アトニー症と其治療法

- ◆原因 本症は一般に身體の薄弱なるもの、神經質、貧血狀態等に來るもので、ステイルラー氏の所謂體質的胃アトニー症はこれに屬するものである。これは先天性のものであつて、日本人の身體虛弱なるものには非常

に多いものである。其外營養不良、慢性胃加答兒、腸疾患、重病の恢復期等にも本症を誘起するものである。  
◆症候 本症は獨立の疾病として現るゝことは少く多くは他の病氣の一症候として來るもので、殊に慢性胃加答兒とはよく合併して現れ、また胃擴張症とは唯正輕重の差あるに過ぎぬもので胃擴張症の輕症なるは、殆ど本症と見做しても宜しい位である。其主要なる徵候は胃部膨滿の感があつて、食事を攝れば益々強く感じ、食後一時間位に至れば其最高に達するものである。そして空腹を感ずることがあつても、少しく食事を攝れば早く既に充滿を感ずるは本症の特徴である。其他嘔氣、吞酸、噯氣、惡心時としては嘔吐或は胃部に疼痛を感ずることあり、食慾は多く減じ、便秘を來すが常である。尙ほ全身營養不良、貧血等を伴ひ、胃は稍下垂して居るものがある。

◆療法 本症の療法は主として胃筋の緊張力を強くするに在るを以て、藥劑もまた主として強壯劑を用ふるものである。即ち通常

- ▲ゲンチアナ丁幾 五、〇      ホミカ丁幾 五、〇
- 右混和一日三回二十滴づゝ少量の水に和し用ふ。

を與へ、食慾不振、消化不良を伴ふものには、

- ▲ストリヒニンエキス 〇、〇六      コロンボ丁幾 〇、七五
- 龍膽 〇、七五

右混和爲三包、一日三回毎食前十分一包づゝ服用を與へ、貧血あるものには鐵劑を與ふ。

尙ほ其他按摩法、電氣療法等を行ひ、全身冷水摩擦、殊に腹部に冷水を灌流する等は皆費用するに足るものである。本症は一種の體質病であるからして根治には體質改善が急務である。これにはカルビタミン錠を持藥として服用するのが最も宜しいと食物は成るべく消化よくして滋養分の多きものを與へ、一日五六回少量づゝを食べるのであるが、此際には食物はよく咀嚼親切に噛み碎いてから胃に送ると云ふ風にすることがよろしくまた胃運動を催進する爲めに少量の酒精飲料、香料等を與へても宜しいものである。

第二百二節 胃癌と其治療法

◆誘因 癌腫の眞の原因は未だ闡明されて居ない、刺戟説や何かであるはあれるけれども、未だ充分の説明は出来ぬのであるから、唯癌腫を發生すべき状態、即ち醫學上云ふ處の誘因となるものを述べるより外に仕方がないが、其誘因となるべきものは、第一には年齢の關係、統計によれば胃癌の約四分の三は四十歳乃至七十歳の間に於て現るゝことになつて居る。併し中には二十代の人にも出来ぬとも限らぬもので、最近ベルヌイ氏は文獻より三十歳以下に發生せし胃癌の十三例を蒐集報告して居る。次には男女の關係、これは生殖器の癌腫は女子に多いけれども胃癌の方は暴飲暴食其他の關係からして男子に多いのは事實である。それから癌腫は遺傳の傾きを持つて居るもので、此遺傳系統の有名なるは彼ナボレホン系統であつて、那翁の父及び其妹二人は此病氣で倒れ居る。次に前に存在せし胃病は原因となるものであつて、胃の圓形瘻瘍にあつては、其入プロセント程は後に癌腫を來すことになつて居り、食物中辛辣・濃き茶、甘味を好む人には本症を來し易き傾きがある

◆症候 胃癌にかゝると通常現るゝ處の症候は、慢性消化不良症の症候と同様であるが、それが追々に増悪して、遂に食物の殘渣は珈琲球になつたものを嘔吐するに至るものであるが、男女に係はらず、四十歳以上に達して長く胃に故障のある場合には本症に疑ひを指いて、須く醫師の治療を受くべきものである。

本症の初期に於ては食欲減退し、殊に肉食を嫌惡するに至り、胃部には多く中等度の疼痛がある、尤も中には全く疼痛の無いものもあるが、痛みのある方が多い、そして酸臭或は酸酵臭あるものを吐出し後期には毎食後吐出すに至るもので、これは幽門癌に來る症候である、便通は通常便秘するが腫瘍が潰瘍に陥れば高度の下痢を來すものである、尙ほ全身は羸瘦貧血して、俗に云ふ縮細體醫學上云ふ處の癌腫惡液質と云ふ形容を呈するに至り、胃部は膨滿しこれに觸るれば、腫瘍は硬結として知らるゝものである。

◆豫後 胃癌は難治の症であるが早期に診斷を得て外科手術を受ければ回春の効を奏することもあるから、何でも早く診療を受くるのが肝腎の注意である。

◆療法 近來ラヂウム鹽并にエツキス光線は本症に應用されて癒つたと云ふ報告がある。食欲亢進、制酵等の爲めには古來「コンチランゴ」製劑を實用して居るが其處方は左の通りである。

▲稀 鹽 酸 二、〇  
 コンチランゴエキス 一五、〇

單 舍 利 別 二〇、〇  
 水 一六五、〇

右一日三回食前十分前一食匙づゝ服用

▲レゾルチン

一、〇

コンチランゴ酒

一五〇、〇

ストリヒニン丁幾

二、〇

右一、三回毎食前十分一食匙づゝ服用

蒸杏仁を用いて癌の癒つたと云ふ報告がある、即ち一日三回一匁或は二匁で其粉末を服用するのである。胃癌の大多數は胃液中の鹽酸が缺乏して乳酸が増加する爲めに、肉類の消化は比較的甚しく障害せられ、澱粉食はよく其消化を営み得るものである、それに此患者の多くは肉食を憚るもの多き故、澱粉食を主として然も成るべく柔かなるもの、例へば粥、牛乳粥、穀粉糊泥、ブツテング等に伍するに鶏卵、ビスケット或は焙燒せる白パン、または穀粉煮汁、牛乳等を與へ、また胃自家の癌腫であつて比較的運動力の障害少きものには精牛肉、牛肉、羊肉、野獸肉等の軟かなるもので香料を添へ、または鮭、大口魚、梭魚等の魚類を與へ酒類も赤酒の如きは少量を與へて差支無く、また食思缺乏せるものにあつては一時に多量を與ふるよりも數回に分ちて少量づゝ與ふる方がよいのである。

### 第三百三節 反芻症と其治療法

- ◆原因 本症は別に胃に器質的の疾患があるのではなく、人のするを見て模倣するより來るものである
- ◆症候 本症は別に病氣と云ふ程のものではない、唯一度嚥下したる食物を再び口中に戻して牛の如く再嚥するものである
- ◆療法 患者をして力めて此惡習慣を矯正せしむるがよろしく、食品をよく咀嚼せしめ、また一時に多く食せしめず、また飲量を制限するのみにて充分である、時としては飲食物の少量を二三時間毎に分服せしむるもよい、近時キヨルネル氏は食後直に氷片を與へて奇効を奏したと云ふ報告を出して居る

### 第四百四節 胃病と溫泉

- ◆入浴の効用 入浴は新陳代謝を盛んならしめて以て胃の消化を促進するもの故、胃潰瘍を除くの外總ての胃病には湯治は効あるものにて、殊に慢性の胃病には特效がある、入浴のみにては溫泉の種類を選擇する必要は

無いから、成るべく交通の便よく、空気が鮮良にして、新鮮の食料を得る處を遊ぶが宜しい。

◆内服の効用 温泉または鑛泉を内服するのは、胃の病處に直接に作用するのであるから、これは大に其性質に關係するものである。

アルカリ性炭酸鑛泉 は主として炭酸及び重炭酸曹達を含有するものに、慢性胃加答兒殊に過酸症に於て稱用せらるゝものである。

アルカリ性硫酸鑛泉 の適應症は、過酸性胃加答兒及び分泌過多症、慢性胃潰瘍、慢性下痢症、アトニー性常習便秘及び痔疾、肝臓及び胆管諸病、脂肪過多症等には、禁忌症は消化器の急性疾患、無酸性慢性胃加答兒、胃擴張、神經性消化不良症等である。

食鹽鑛泉 の適應症は、減酸症、無酸症、鹽酸缺乏に因する諸種の消化不良、便秘を伴ふ慢性胃加答兒等に於て、禁忌症は、過酸症、胃潰瘍、神經性消化不良、胃擴張、胃アトニー症等である。

硫苦鑛泉 の適應症は、一時的の催下劑として便秘症、痔疾、驅蟲療法等に應用せらるゝが、胃腸の急性炎症には禁忌である。

鐵鑛泉 は貧血に基因する消化不良症、貧血性胃腸、胃潰瘍後の貧血に應用せらるゝものである。

### 第五節 胃病と食養

病氣の中で食物の影響しないものは一つも無いが中にも胃病は直接食物が關するものであるから、其影響は殊に多大である。で其食養に就ては各病下にそれ／＼記載して置いてあるが、尙ほ一般的の心得として南博士の胃病食養十則を掲げませう。

◆第一則 ノールデン氏は「慢性胃病に原因する患者の瘦せるのは、其病氣の爲めに起るのよりも、大多數の場合に於ては、食物攝取の分量少きが爲めである」と云つてあるが、これは目下各消化機病者の均しく認めて居る處の事實であるから、障りにならぬ限りは多く滋養食を食べた方がよいのである。

◆第二則 胃の病氣の爲めに全身の營養に影響するは無論のことであるが、此際、腸が健全であると、胃消化の不充分なる點を補ふことが出来るものであるから、腸内消化を充分ならしむるやう食養をする即ち脂肪食の如きを多くするとよろしいのである。

- ◆第三則 胃病に罹ると、平素用ひ慣れたものとは全く異つた食物を與へるのは今日醫俗共に然りであるが、これは全く謂はれないことで、或特殊の場合を除くの外は、平素常用のものを與へて善文が無い、尤も其調理の方法を變へて食べるのは宜しい。
- ◆第四則 胃病に罹るとお粥、スープと成るべく軟かなものを食べる風習があるが、これも總ての場合に應用してはならぬ、不消化物は往々強せる粘膜を興奮して胃の筋肉を強壯ならしむることがあるから、胃筋弛緩症の如き場合に於ては、時々強靱なる食物を與へても宜しい。
- ◆第五則 我々の精神作用は食物の消化に偉大の關係があるもの故に成るべく其香味を佳美ならしめて精神の爽快を促し、反射的に消化機轉の滑澤を圖るがよい。
- ◆第六則 人には特異質と云ふものであつて、人によつて或食物を食べると腹痛したり、下痢したりすることがあるから、度々或食物に對して斯様の反應を來した人は、以後は此等のものを攝らぬやうにするがよい。
- ◆第十則 病氣によつては食欲の無いものもあり、或は食欲はあるも食へることが嫌ひな場合もあるが、斯様の場合には食品調理の方法を變へるか、または其形狀を變へるなどして、成るべく自己の嗜好に投ずる様にして食するがよい。

- ◆第八則 食物は成るべく其種類を多くし、また其調理の方法も千端一律なるを避け、力めて多方面の調理をすと共に全身營養の如何を顧み、徒らに胃病の救済にのみ注意して不知不覺の間に全身の衰弱を招くやうなことがあつてはならぬから、成るべく營養を攝るやうにするがよい。
- ◆第九則 胃病には運動力亢進を來せるものと、其反對に運動力減退を來たせるものとあるから、甲の場合には刺激性の食物を避け、乙の場合には成るべく食物をして胃中に充溢せしめざるやう、一日の分量を數回に分食するの必要がある。
- ◆第十則 胃液分泌の異常には夥多と減少との二種あるが、甲の場合には澱粉は成るべく糖化したるものを與へるがよろしく、乙の場合には蛋白質物は成るべく少量に攝るやうにせねばならぬ。

第百六節 酒客と胃病

酒を飲むのは胃腸に對して、如何なる作用があるかと云ふと、健康の胃腸に對しては決して飲む必要はない

のであるから、これは平素慣用せぬに限る。種々の實驗によつて見るに酒は絶対に胃腸を害するものと云ふことは出来ないが健康者には敢てこれを用ひるの必要は起らないで、唯胃腸が一朝病にかゝつた場合には病氣の種類に應じて、醫藥として奏効する場合があるが、これは醫者の範圍に屬するものであつて、素人には間違を來し易いからこれを攻究するの必要は無い。兎に角酒は所謂量無しと云ふて、諸種の弊害を伴ひ易いものであるから、先づ／＼禁じて置けば間違は起らぬものである。

酒を常に用ひ居ると、酒客加答兒と云ふ一種の慢性胃病を起して、早朝に嘔吐あり、胃粘膜に一種の炎症を起して消化不良症に陥るばかりで無く、酒客はまた胃痛にかゝり易きもの故、決して常用してはならぬものである。

### 第七節 喫煙と胃病

喫煙はどうかと云ふに、これも矢張必需食品と云ふものではなく、全く嗜好品と云ふべきものであるから好きな人はなかく廢せるものではない、唯其量を過すと酷い毒害を流すものであるから、此點は注意せねば

ならぬ、それ故成るべく少量を用ひることにするのが肝腎である。元來煙草を吸ふと知らず知らずの間に、唾液の中に「ニコチン」毒が溶け交つて胃に行き、終には消化不良を起すと云ふ様になるのである。殊に煙草を喫むのには腹加減を見るのが必要で、空腹の時にのむのは極く悪いのであるから成るべく食事のすぐ後に喫む様にするのが最も適當なのである。

平素煙草を喫みつけて居る人は、色が淺黒く、身體が瘦せて、常に胃に故障あるものである、これはニコチンの中毒で、ニコチンは人の想像するよりは消化を害すること甚しきもの故、斯様の人にして好物の煙草を廢せば、胃の障害も除れて、追々に身體の肥つて來るのは多くの人の實驗する處である。

### 第八節 急性腸加答兒と其療法

◆原因 本症は急性胃加答兒と同様の原因によつて起るものであつて、實際に於ては胃と腸との加答兒を併發するのである。さて其原因となるものは食物不衛生即ち食食、腐敗せる飲食物、冷熱其度に過ぎたる飲食物を用ふる等所謂食傷は最も多いものである。それから下腹部の冷却、打撃、藥物中毒、氣候の不順等も本原因と



なるもので、其他腸管扶助、赤痢、コレラ、化膿性疾患、重症マラリア、慢性心臓病、腎臓病等も原因となるものであるが、殊に夏季に於ては消化器系統の抵抗力が減退すると共に、水或は水の飲用、果物の嗜好、細菌の發育等によつて本症を多くならしめ、所謂夏期下痢を發生せしむるものがある。

◆症候 本症にかゝると先づ第一に起る症候は腹部の膨滿、腹鳴等であつて、次に腹痛の疼痛あり、下痢を發し輕きは一日二三回、重きものにあつては、十五回乃至二十回に及ぶことがある、殊に直腸に加答兒が起つた場合には便意頻繁であつて、何處上固してもまだ便が墜つて居る様な氣味、即ち裏急後重を呈するものである、下痢頻發すると同時に患者は追々全身倦怠に陥り、口渴増進して尿利減少を來す一般に熱は無きも、時としては少許の發熱を伴ふことがある、糞便の色は褐色、黄色、灰白色、或ひは綠色を呈し、稀薄にして腐敗性の臭氣を帯び、消化せざる食物の殘片或は粘液を交へ、或は完穀下痢と云ふて糞便は此等不消化物のみにて形を成せらるゝこともある。

◆加答兒は多くの場合に於て、胃加答兒と共に起るもので、此等合併の場合には、食慾無くして悪心、嘔吐、舌酸嗜雜ありて、舌は白苔を以て被はれ、間開口唇に匍行疹を發するものである。

◆療法 先づ其原因を去すのが療法の主眼であるから食傷性の腸加答兒ならば、速に下劑を投じて、腸内容物を排泄し、其後收斂止瀉劑或は防腐劑等を與ふるのである。

- ▲甘 汞 〇、五 乳 糖 〇、五
- 右混和爲一包、頓服(下劑)
- ▲ナフタリン 〇、一 薄荷油糖 〇、三
- 右爲一包、一日三回一包づゝ(防腐劑)
- ▲サリチル酸銲鉛 三、〇 タンナルビン 一、五
- 重碳酸ナトリウム 一、〇
- 右混和分三包、一日三回一包づゝ(止瀉劑)

また民間藥としては「ゲンノウシヨウコ」と云ふ藥草の蔭干にせるもの三匁乃至六匁を煎して服用すると妙に止瀉の効を奏するものである。尙ほ患者は牀中にあつて力めて安靜を守り、また腹部に溫濕法を施すがよろしい。

本症の重症なるものは、絶對的絶食を守り、輕症にても疼痛下痢のある第一日には絶食するがよろしい、口湯に對しては僅かに湯をまし、茶等を與へ翌二日は米湯、片栗湯、オートミル粥等を與へて飲料を稀薄したる赤酒を與へても宜しく、第三日には鶏卵、スープ、柯々阿、ビスケットの類を與へ、第四日に至つて下痢全く止みたる時は少量の肉食を許しても宜しい。

### 第百九節 慢性腸加答兒と其治療法

◆原因 本症は急性症の治療斷生其宜しきを得ざるよりして移行するものもあり、また久時に亙る食事の不衛生、飲酒、香料等の嗜好、藥物殊に下劑の濫用、心臟瓣膜病、肝臟硬化症、白血病、蛔寄生蟲、胃の疾患等が原因となるものである。

◆症候 腹鳴、腹痛、腹重、頭痛、營養不良等の症狀を呈するものであるが、其主要たる徴候は便通の變狀であつて、其症狀によつてノートナゲル氏は、これを五種に分類して居る、第一種は最も多いもの、便秘二三日或は四日位續くと、次は自然に或は下劑によつて排便するもの、第二種は下痢と便秘と規則正しく交

代するもので、初め數日間便秘して、第三五日或は六日目には粘液を混ぜる軟便或は排泄し、次でまた便秘を來すもの。第三種は毎日規則正しく軟便状態を排泄するもの。第四種は一日數回下痢的排便を來すもの。第五種は主として直腸の侵されたる場合に起るもので、烈しき裏急後重を伴ひ、便は粘液或は少量の血液を附着するものである。そして其何れの種類を問はず、營養障礙せられて皮膚乾燥し、筋肉は瘦削して甚しきはヒポコンデリとなり、間々不眠症を來すものである。

◆療法 力めて原因を去り、宿便あるものは、

- ▲リチネ油 一五、〇
- 桂皮水 一五、〇

右服用

を與へて之を排除し、下痢あるものは、一旦下劑（處方前綴）によつて腸内を清掃し、後止瀉劑（處方前綴）を與へ、疾病久しきに亙り、便秘の傾きあるものには、左の緩下劑を與ふ。

- ▲複方甘草散 一〇〇、〇

右毎朝一茶匙づゝ微温湯にて服用

▲水製大黃下幾

右一日量、一日三回分服

一五、〇  
七五、〇

單舍利那

一〇、〇

本症もまた安静を要するもの故、成るべく労働を避け、下痢ある時は安臥するが宜しい。そして下痢には温液の灌腸、便秘には冷水の灌腸を行ひ、便秘性及び交代性慢性腸加答兒には冷カル、ス泉鹽、食鹽泉の冷飲等も効があり、経過久しくして容易に癒えざるものにあつては、氣候温暖なる處に湯治せしむるがよい。

食餌は、下痢性のものにあつては、麥飯、赤飯、黒パン、硬き肉類、果物、野菜、寒冷の飲食物、炭酸含有の飲料、香料、酢の物、多量の糖分等は禁物であるが、米湯、葛湯、軟き肉類の細刻せるもの等は與へて宜しく、便秘性ものには、素刺せる肉類、軟く煮たる野菜、砂糖煮せる果もの、白葡萄酒等は用ひて差支へがない。また便秘と下痢と交代に来るものにあつては、其時々に応じて適宜食餌を選択して與ふるのである。

### 第一百節 便秘と其治療法

◆原因 腸々便秘するのは醫者の方では常習便秘と唱へて居るが、これには種々の原因がある、病的ならざる所謂生理的便秘症もあれば、また肉食、安逸、坐業等、食餌及び生活法の不衛生の爲めに起るものあり、胃腸腸、腸狭窄症等の消化器病、近隣臓器の疾患、中毒其他によつてもまた便秘を來すが、殊に婦人には便秘が非常に多く一週間位便秘して居る人などはいくらもある、また月經時になると決つて便秘する人もあれば、反對に下痢する人もあると云ふ風に婦人と便秘とは極めて關係の深いものである。

◆便秘より起る故障 常習便秘は醫者の方では之を二つに區別して居る、一は「アトニー」性常習便秘と云ふもので、腸筋の弛緩衰弱の爲めに便秘を來すもので、これは最も多いものである。次は痙攣性常習便秘と稱するもので、これは前のとは反對に亢進せる運動神經運動の結果、直腸の痙攣を起して腸内容の異常澱滯を來すに至るものであるが此種のものはい。併し何れにしても便秘或は瀉便の腐敗分解の爲めに呼吸困難、心悸亢進、頭痛、頭痛、偏頭痛、眩暈、不眠等を呈するに至るものがある、また其結果として神經症、痔核、宿便性潰瘍と云ふて腸内に潰瘍を生ずることもある。

◆食餌療法 常習便秘の治療法として行ふべきものは食餌療法、理學的療法、水治的療法、鍼灸療法、薬劑

療法とあるが、何れにしても半業者は速に之を癒し、胃腸病あるものは之を治する等根本的預防法を行ふが宜しく、食餌は人により一定の標準を定むるわけには行かぬが、兎に角、蜂蜜、梨糖、果糖殊に林檎、葡萄、甜瓜、梨子、李、桃等の如き游離植物酸を含むものがよろしく、朝起きると直ぐに冷水一碗または牛乳一茶を頓服するも効あり、弱壯なる人には麥飯または時々甘薯等を食用し、虛弱たる婦人にありては麥酒、白葡萄酒等を飲用せしめ、肉食は成るべく控へ目にし、赤葡萄酒、茶、コーヒの飲用を廢し、飲料としては麥湯、番茶の薄きものを用ひ、また脂肪分の多きものを常食とするがよい、胡桃、落花生等を材料として調味せる野菜料理はなか／＼味もよろしいものである。

◆理學的療法 理學的療法として應用すべきは按摩法と電氣であるが、これは床上に仰臥して自己の右の手指にて臍を中心としてマツサージを行ふか、または患者を仰臥せしめ、腹部を曝露し、胃腸部より右側を上りて軽く摩擦し、次で大腸の徑路に沿ふて強く擦揉し、壓迫し、摩擦する等の方法を行ひ、時にはまた約二キログラムの按摩球を用ひて右側に於て上下に迴轉すること十回、横に迴轉すること十回次に左側に迴轉することまた十回、終りに尙ほ十回迴轉運動をするのであるが時にはまた感傳電氣を用ひて電氣的刺戟を與へて奏効する

こともある

◆水治法と鑛泉療法 水治法はアトニー性便秘には冷水浴がよろしく、痙攣性便秘には温浴を用ひるのであるそれから鑛泉療法とは飲用及び温浴の二つにて、應用すべき鑛泉は主としてアルカリ性硫酸鹽鑛泉（カル、ス鑛泉）にして、アトニー性には冷飲及び冷浴、痙攣性には温飲及び温浴を用ひるのである  
◆藥劑療法 藥劑は何れにしても、本人に効能のあるものは用ひて差支かない、即ちアトニー性には常に下劑を用ひ、痙攣性には鎮痙藥を用ひるのである。

▲サクラダエキス 四、〇  
重碳酸ナトリウム 四、〇  
水 一〇〇、〇

右一日量、一日三回分服（アトニー性）

▲阿片エキス 〇、三  
▲用石鹼 一、〇  
甘草末 適宜  
右混和三十九となし、一日三回一丸つゝ服用（痙攣性便秘）

サクラダエキスは近時カラカス錠として錠劑になつて居る、これは一回二錠乃至四錠を用ひるのである。それからまた灌腸も宜しく、最も單簡なのはグリスリン灌腸である。

### 第百十一節 下痢症と其治療法

◆原因 下痢症は便秘の反動のもので、多くは腸筋運動の異常亢進より起るものであるが、其他にまた吸収官能障害より起るものもある。そして其變動亢進を來すものには、第一は食傷性下痢と云ふて、これは一番に多い、即ち不消化性食物、未熟の果實若しくは腐敗せる食物、刺戟性の飲食物を用ひる爲めに起るが、中には特異質と云ふて、或魚類または牛乳、鶏卵等を食しても下痢するものがある。第二は下劑性下痢と云ふて下劑を用ひたる爲めに起るもの。第三は宿便性下痢、宿便が常に腸粘膜を刺戟して充血及び分泌を來せるより下痢を起すもの。第四は寄生蟲の刺戟によつて起る虞の寄生蟲性下痢、第五は胃若しくは脾臓の異常分泌によるもの尙ほ此外にもあるが、主なる原因を擧ぐれば先づ右の通りである。

◆療法 下痢症のあるときには、先づ何の爲めに起つた下痢であるか、其原因をよく決め、食傷または宿便の爲めに起る下痢ならば、下劑若しくは灌腸によつて速かに其害物を除き、寄生蟲に因する場合には驅蟲療法を試み、衛生法としては運動、精神の興奮、寒冷、按摩等總て蠕動の亢進を來すべきものを避け、床中に安臥して腹部を温保し、または温湯を灌する等總て身體を温暖ならしむるがよろしく、また藥物は增加茶兒條下の止瀉藥殊にゲンノウシヨウコを用ひるがよろしい。

下痢症の食餌は總て刺戟となるものは悪いのであるから、便秘症に常用する食餌は總て禁物である。そして無刺戟にして殘渣少く消化の容易きものを温かにして與へるのが宜しいから、最初は米湯または大麥、燕麥、西穀米等の重湯を與へ、少し快くなつた處で温きスープに鰵卵、牛乳、ソマトゼ等を加へたるもの、または片栗湯、葛湯、或はコンスタデー、レグミノーゼ等にて製したる葛湯を與へ、次に米粥、馬鈴薯粥（スープにて調理す）、馬鈴薯牛乳粥、米牛乳粥、西穀米牛乳粥、オートミル牛乳粥等を與へ、飲料としては茶、コーヒ、ポルドー赤酒等タンニン酸を含有するものを推薦するが、炭酸含有の飲料、牛乳等は用ひてはいけない。

### 第百十二節 盲腸炎と其治療法

◆盲腸炎と虫食突起炎 俗に盲腸炎と云ふてゐるのは單純なる盲腸炎ではなくして、盲腸周圍炎并に蟲食突起炎の總稱であつて専門家には盲腸炎なる獨立の病氣はない、これは腸加答兒の一症であると云つて居る位であるから、單に盲腸炎と云へば蟲食突起炎を併發したものと心得て宜しい。

◆解剖的素因 盲腸は最も炎症を發し易いものである、これは何故かと云ふと、これには第一解剖的關係ある、一體此盲腸と云ふ處に誠に出入り損ひの處であつて、造物主も此處だけは非常に不手際な拵へ方をして居る、即ち下腹部の右の腸骨窩と云ふ所から結腸即ち大腸の始端があつて、これに小腸がクツ付いて居る、胎生學上大腸の出来るのは別であるが、それが結合する時に、うまく結合して呉れよばよかつたが、さううまくは行かないで、大腸の一番の下よりは餘程上の處に小腸が口を開けて居る、そして總ての食物が胃から小腸を通り次に大腸に入つて、道々に廻り廻りつて肛門に出て了ふのであるが、それが小腸が口を開けた所より下の方が順序から云へば大腸の始端上行結腸の始めである起立位より云ふと下位になる、其下の方は食物が入らないから瘻用差織と云ふて大に小さくなる、これは蟲食垂または蟲食突起と名づくるものであるが、此處の口は塞つて居らぬので、魚の骨とか、葡萄の核とかが時として入つて来る、入れば出ることが出来ない様になつて居るから、茲に炎症を起して遂に蟲食突起炎を起すことになるのである。

◆細菌的原因 第二は細菌的原因と云ふて、細菌が蟲食突起に侵入して炎症を起し、粘膜の分泌を催進し、粘液を腫張せしむると蟲食突起内に分泌物滯留を來して遂に重大なる炎症を起すに至るもので、これを起す細菌は大腸菌、膿菌其他數種ある。

◆器械的原因 第三は器械的原因と云ふて、結腸乃至淋巴線組織の腫張、蟲食突起の屈曲、捻轉及び癒着、糞石、異物等の爲めに蟲食突起の分泌物排泄の障礙せらるゝ爲め炎症を起すものである。

◆性及び年齢の關係 男女の關係は、一般に女子よりも男子の方が多數である、それから年齢は小兒に發病するのは甚だ稀れであつて、大抵は十歳乃至三十歳の間に發することが多い、それからまた多量の肉食、常習便秘、遺傳其他の關係あるを説く人があるが、これは大した關係のあるものではない。

◆症候 盲腸炎にかゝればどうなる乎と云ふに、これは種々種類があるが、一般的の症候を擧げて見ると、先づ急に惡寒がして、熱は三十九度から四十度位まで昇る、それと同時に右腸骨窩と稱へる右の下腹の處に劇烈な痛みを覺える、そして其痛みが上の方は胸までも及んだり、下の方は足の方までも痛みがあるので、患者は

通例足を申げて寝る、足を延すとひどく痛む、また咳嗽をしても痛むと云ふ風に、熱と痛みとの爲めに苦しめらるゝのと、右の下腹の少しく腫れる等が主なる徴候である。それからまた或場合には通例の軽い膈加答兒の様に下痢があつて少しく痛みがある、それが漸次に盲腸の方に波及して腸の他の方は癒つても盲腸の所だけ癒つて盲腸炎になると云ふこともある、斯様の場合には熱も少ければ痛みも軽い、殆んど本人も病氣と心附かず居ることもある、つまり盲腸炎の起り方には驟然なものと、緩徐なものと、大體は二た通りあるからなかく油斷が出来ぬ病氣である。

◆化膿は危険。それから本症は早期に診断して適當の治療を行へば幸ひにして、多くは炎症消退して治癒に至るものであるが、若し不幸にして化膿すると非常なる危険がある、化膿したならば速に外科醫の手術によつて膿を外に洩さねばならぬ、と云ふのは膿は唯局部に局限して居る時ならば宜しいが、それが兎もすると破潰し易い、破裂して膿が腹膜の方に流れ出づると、汎發性腹膜炎と云ふて、腹膜一面に膿になつて了ふ、さうなれば如何なる名醫と雖も手を下しやうがない、どうしても一命にかゝるものである。

◆再發も危険。それから盲腸炎には再發と云ふ危険がある、どういふものか、盲腸炎は再發し易い傾きを持つ

て居る、尤も非常の熱でもあつて痛みでも多い場合には、病人も醫師の云ふことを聞いてチヤンと醫師の云ふ通りになつて居るけれども、それが少し癒つて来て、熱も無く、痛みも薄らいで來ると、チツと寝て居ると云ふことは困難であるからしてまだ醫師の眼から見て十分全治したものと思はれない中に、既に身體の運動を始め、さうすると直ぐにまたそれが再發して來る、再發に再發を重ねると遂に化膿に陥ると云ふ場合に段々危険が増して來る、中には幸ひに何ともなしに三ヶ月も半年も一年も経過してから、何か急激な運動でもするとそれを機會に再發することがある、これはまだ全治しない中に瘻管を廢した結果であつて、それが爲めに再發を來せるものであるのだ。

◆特に婦人に注意。次にも一つ婦人科と本症との關係を述べねばならぬ、即ち蟲様突起の先きが小骨盤の中に入つて居る、即ち蟲様突起と、婦人生殖器の附屬器とは相接觸して居るから、間々本症と子宮附屬器の炎症と一緒になることがあつて、或場合には婦人病か本症か分らぬこともあり、また本症から婦人病を發し、婦人病からして本症を起すなど互に原因となり結果となる程密接な關係がある。そしてこれが若し妊娠の婦人であるとなつて流産の原因になる、尤も劇烈なる蟲様突起炎であれば誰でも注意するが、輕いになると、妊娠中は兎角故

障が起り勝ちであると、それを氣にかけぬ人が多い様であるけれども若し妊娠中お腹が少しづつ痛む、然も右の下腹が痛むと云ふ様であつたならば、速に醫師の診察を受ける方が安心である、妊娠と過激な起炎と合併すると大抵産産の一ヶ月前から痛みが起つて、一ヶ月ばかり経つて流産するのが常であるから、よく此點に注意が肝要である。

◆豫防法と内科的療法 本症の豫防法としては不消化の食物を避け、殊に果物の種核、骨片等を嚥下さざる様注意し、また便通を常に快くする等は普通守るべき方法である。

それから感本症にかつた場合、これは油も素人として施すべき方法も無く、一に熟練たる醫師に診るより外に仕方が無いから、詳しくことは略して其大要を述べると、第一に身心の安寧にて、殊に發病第一日は絶對的背臥位をなさしめ、其後と雖も出來得るだけ安寧ならねばならぬ。それから同部の消炎法として右腸骨窩に二三の氷嚢を貼するか、または炎症劇烈なる時は、十乃至二十條の水蛭を貼用するのである。それから藥劑は下劑を初期に投ぜんとする人と、尿管を安寧にする爲め阿片劑を用ひる人と、臨床醫家に二派あるが、宿便が原因なることが確實に判つたならば初期に下劑を投ずるもよからうが、早期手術の結果によれば、宿便を認

むることは殆んど皆無である云ふ事實に徴すれば阿片劑を用ひた方がよい様であるが、併し阿片劑もまた注意を要するもの故、これは實地に臨んで熟練なる醫師に於て始めて判斷し與ふ處である。

◆外科的療法 内科的療法には下劑にも阿片劑にも各々一長一短あるが、これに反して外科醫は過激な起炎は外科的治療によつて全癒するもの、即ち外科的疾痼であると主張して居る、尤も單純性のものにあつては、内科的に治癒し得るは誰しも知つて居る處なるも、必ず外科手術を要する破壊性のものとの鑑別は十分で無いから早期に手術を受けることが安全である。

### 第百十三節 十二指腸潰瘍と其治療法

- ◆原因 胃潰瘍と同様であるが、特に肥すべきは、外皮の廣汎なる火傷は往々本症の原因となることである
- ◆症候 右腹上部に疼痛あり、多くは食後三時間乃至五時間を経て現るものである、また十二指腸出血を來し血便を排出し、稀れに吐血を來すことがある。
- ◆豫後 時として突然穿孔性腹膜炎を來して死に至ることがあるから油斷の出來ぬ病氣である。





◆療法 胃潰瘍と同様である。

第百十四節 腸結核と其治療法

◆原因 本症は多く腸管に於て、殊に多く肺結核の経過中に來るものである。

◆症候 本症の特有の徴候は下痢であるが、殊に腸に於て下痢するので、これを鶏鳴下痢と別稱して居るのである。腹部は稍膨滿れ、右骨窩を壓すれば、雷鳴音を觸知し、且つ疼痛を發し、糞便は液性若しくは粥狀にして之を鏡檢すれば結核菌を發見し得るものである。

◆豫後 不良にして多くは原發性疾患の爲めに倒るゝものである。

◆療法 一般結核療法を行ふの外、左の藥劑を處するも、容易に下痢は止らずに、道々に全身に陥るを常とす

▲カンベヒア煎(一五、〇)(二〇〇、〇) 阿片丁幾 三〇滴

單舍利那 二〇、〇

右混和爲二日量、一日三回分服

またゲンノウシウコを煎じて服むがよろしく、カルアグレス錠を長く服用するがよい。

第百十五節 腸癌腫と其治療法

◆原因 本症は胃癌に比すれば稀有にして、四十歳以上の男子に於て多く來り、また直腸に發生すること最も頻繁に、小腸に於ては最も稀れである。

◆症候 直腸に癌腫を來せば、腸管の狭窄を起して排泄せられたる糞便は特有の形状、即ち筒々斷絶せる羊糞狀の糞便を排泄するものである。其他裏急後重と直腸部に疼痛あり、時としては糞便に血液を交へ、漸次膿液質となり、二三年を出ずして死の轉圖を取るものである。

◆療法 内服薬は麻酔薬には一時的緩解を招くのみにて、外科的手術によつて腫瘍を切除するより外に方法無きも、若し轉移症を發すれば他日再發を免れざるものである。

### 第一百十六節 直腸梅毒と其治療法

- ◆原因 梅毒の第二期若しくは第三期に於て發し、殊に直腸の最下部に最も多く發するものである。
- ◆症候 多くは緩徐に發するものであつて、其初期には便通の不整を來し、間々糞便に血液を交へ、裏急後重疼痛ありて羊糞狀の糞便を洩すに至り、患者は漸次瀉度に陥り、多くは一二年にして穿孔性腹膜炎を起して死に至るものである。
- ◆療法 ヨードカリウムの内服、水銀軟膏の塗擦等其他梅毒療法を行ひ、若し局部に狭窄を來せば消息子を以て擴張療法を行はねばならぬものである。

### 第一百十七節 直腸と其治療法

- ◆原因 本症は腸壁に器質的變化なくして起るものであつて、神經衰弱、ヒステリー、脊髄癆、貧血、痛風等に發し、また尿管痛、鉛毒痛、銅毒痛となりて現れ、其他腸寄生蟲、子宮、肝臟、腎臟の疾患によつ

### 第一百十八節 痔疾の一般的研究

- ◆原因 痔は非常に多い病氣であつて日本人の殆ど半数はこれにかゝつて居る位多數のものである。處て此痔疾は何の爲めに起るか、即ち痔疾の原因は如何と云ふに、其主なるものは肛門内に直腸下部の靜脈體血である處が我々の肛門は誠に鮮血し易く出來て居る、即ち原因の一部は造物主が拵へて居ると云ふのは我々に痔靜脈と云ふものが肛門にある、一體全身を循環して居る總ての靜脈血管には、瓣膜と云ふ一種の膜が血管の内壁に附いて居つて、血液が其處を通ると、後で其通路を蓋する働きを爲し、其れが爲めに一旦通つた血液が逆

流しないやりに仕組んであるのが普通である。然るに此痔靜脈のみにはどうしたわけか此瘻膜が無い、ないからして上行しやうとする血液も逆行することが無いとも限らぬ、それに靜脈自身の位置を下方殊に坐位に生活する日本人には痔靜脈が最下位に位置することになる。加之に血壓は弱し、どうしても血液は自然に停滞するの已むを得ざるに至るわけである、それにまた此靜脈の周圍は脂肪層が多いので何分軟かく出来て居り、靜脈の擴張に對する抵抗力が弱いから、どこまでも凹まされると云ふ様なわけであつて、痔疾の方から云ふと誠に都合が良く出来て居るのである。

それから一般的原因としては常習便秘、坐業をする人、俳優、音楽家、其他常に大座を發し、腹部に力を入る人、大食家、大酒家、多血質の人、茶、コーヒの類を澤山に用ひ或は刺激性の香料薬味等を好む人、病氣では肺氣腫、心臟病、肝臓病、腎臟腺肥大、子宮後屈症、子宮並に卵巢の腫瘍、それから妊娠等である。

年齢の長幼は大し、關係は無いが、何れかと云へば老人に多い、殊に安坐逸居の樂隠居は多く停される。それから日本人は生活法と肉食及び便所の不完全等の爲めに西洋人よりは遙に多いと云ふ説である。今一つは此病氣は遺傳する傾きを持つて、親に痔があれば其子は大抵痔にかゝる、其割合は十人に五人位あると説いて居

る學者もあるが、これは將來大に研究を要する問題である。

◆豫防法 さて痔疾の多くは後天性の不養生より來るものであるから、其人の心が次第では随分豫防も出来る。豫防法は、一言以て之を云へば其原因を去ることである。尤も痔疾の養生法は豫防法になるから、次に述ぶる養生法を豫防法と心得て宜しいのです。序ながら痔は癒るか癒らぬかと云ふことに就て一言述べて置きます。どうも多くの人は痔にかゝると餘り苦痛を感じぬ程のものであれば大抵は癒らぬものとして打捨て、置くやうであるが、これは甚しき間違である。痔瘻の如き重症のものでさへ其治療法宜しきを得れば無論癒るものである、痔核の如きは或は單に養生法を嚴守した丈けでも癒ることがある、殊に其原因が一時的のものであると最もよく癒る、假へば婦人の妊娠時に起る痔疾の如きは分娩をしてへば大抵は癒るやうなものである、それからよく人は痔は假令一旦癒つても大抵は再發するものであると云ふが、痔疾其ものは決して再發性を帯びて居るものではない、一體一度でも痔にかゝる人は必ずかゝる丈けの原因があつてかゝるのであるから、一時治療によつて癒つても、矢張其原因假へば不養生とか始終其人にありとすれば、再發することになるのであるから、絕對的に其原因を去れば決して再發するものではない。

●衛生法 運動は痔疾には最も大切な關係があるから、若し運動不足の人が本病に罹つたならば從來の生活法を一變すると云ふことは必要なことである、日本人にして軽度の痔疾を有する人が、海外に渡りて知らず識らずの間に全消したと云ふことは、往々耳にする處である、それは多少飲食物の關係にもよることであるが、其主たる點は適度の運動をするからである、此運動法には種々ありて何れを選ぶも敢て悪くはないが、殊に良好なりと信するものは、晩餐後三十分乃至一時間位を過ぎてから、暫く散歩することである、其他玉突きローンテニス等は最も賞用すべきものゝ一つで、また運動に兼ねて新鮮の空氣中に呼吸すると云ふことは、ヨリ必要なことである、併し過度の運動例へば自転車乗り、騎馬等の宜しからざることは勿論である、

飲食物の中で悪いのは第一酒である、酒は何病にもあまりよろしくはないが、痔疾には殊に悪い、上戸黨には氣の毒であるが何とも致し方が無い、然らば下戸黨であるかと云ふに、餅も殆ど酒に類らぬ害を爲すのであるから兩黨共に大打撃である、然らばどんなものを飲ればよろしいかと云ふに何品によらず、一時に暴食するのは宜しくない、成るべく消化し易く、淡泊なものを少量づゝ數回に用ひねばならぬ、假へば脂肪少き肉汁、スープ、ラカン、鶏卵、牛乳、肉類では小羊、野鳥、鱈、野菜では大根、馬鈴薯、サラダの如く煮便

を硬固ならしめざるものは宜しきも、煮便の量を多大ならしむるは避くるがよい、また果物は、林檎、梨、桃、葡萄等を食後に食するは宜しきも、柿は便秘を促すものなれば用ひてはならぬ、また生姜、芥子、胡椒、ワサビ、煙草、濃厚たる茶、コーヒ等の如き刺激性のものゝ不良たるは勿論である、併し食間に平野水、サイダー、リモナーデ、シトロン等の如き飲料を用ひるは敢て妨げない、

それから便通の調節を計ると云ふことは實に肝要なこと、毎日二回排便を滿する習慣をつけねばならぬ、そこで常に便秘する人は食後果實を食するか、毎朝冷水を飲んで適宜の運動をするかをせねばならぬ、それでも便秘の氣味があれば緩下劑を投するか、瀉腸させねばならぬ、則ち努責むは悪い、また下劑には種々あるが、痔疾に賞用せらるゝものは左の處方である、

- ▲精製硫黄 一〇、〇
- 茴香末 一〇、〇
- 白糖 五〇、〇
- セナ葉末 一〇、〇

右硯和毎夕四、〇宛頓服す

次に排便後の拭淨用には新鮮にして柔軟なる脱脂綿、日本紙、海綿等がよい、用に臨んでは海綿を初め水

に潤して軽く搾つたもので肛門に拭ひ、次で乾いた方で乾燥する様によく拭かねばならぬ。新聞紙や小説類の如き廢物を利用するのは最も好むべきことである。

溫浴も世上によく行はれて居るが、自然清潔法の本旨にも適ひ、また一時血行を旺盛ならしむるから局部の鬱血を掃流し、病勢を緩解する効力は確かにある、また唯單に局部のみを洗ふにても宜しく、此際にはまた水にて洗ふもよろしく、入浴後バケツに水を汲み込んだるものの中に肛門を入れて冷す等は殊に効がある方法である。溫泉にては熱海、有間湯本等は強壯なるものに適し、虛弱なるものにあつては伊香保がよろしい、併し溫浴のみよりて全治を望むはチト無理な注文であるから、必ず適當なる治療法を施さねばならぬのである。

### 第一百十九節 痔核(イボチ)と其治療法

◆**症狀** 痔核と云ふのは肛門並に直腸下部に靜脈血が體の深部にある門脈系と云ふ大靜脈に滯流するを妨げられ、茲に鬱血を起し、それが丁度袋の中に血液を盛つた様な風になつて、肛門の内壁に大小種々の結節が出来る、此結節が即ち疣痔である。然るに此處は歩行や其他に際して擦れ易い場所なのでどうかすると上皮の袋

が破れて鮮血淋漓と送り出づることになるものである。

痔核が益々重篤くなれば肛門の内外には宛然葡萄の實の様に、果々たる大小數多の結節が横垂れ相重なる様になるが、此肛門の内部にあるのが内痔核で外部にあるのが外痔核と云ふものがあるが、唯さへ狭き肛門に斯様に深山の結節が出来ては坐臥歩行に不便であり、遂には核が破れてだら／＼始終出血することがあり、或は此處より細菌が入つて膿毒症など云ふ恐ろしき病氣を惹き起すこともある。肛門の四圍に結節があつてはどうしても糞便の通行の邪魔になるからして、便通の際に平素よりは餘計に力むことになるから益々悪くなるのである。

◆**療法** 俗間に籠甲を熱して肛門を温め、或は無花果の葉を温湯に入れて痔核を蒸すが、これは一種の蒸療法である、何れも用ひて効あるが、醫師の用ひる蒸療法は

百倍鉛糖水

四〇〇、〇

をガーゼに浸して其を局部にあて、上に油紙、脫脂綿等を加へて軽く縛するやうになし、ガーゼが乾いたならまた取かへるのであるが、これは主に痔核が十分に緊縮して熱い、灼かれるやうな感のある場合に應用する

である。

痔核には、また入浴が偉大なる効力を奏するものである。入浴は血行を盛んならしめ、静脈血の還流を促し、また局部を清潔にして神経を緩解し、若しまた損傷あるものには肉芽の發生を助くるなど、輕症のものには入浴療法のみにて快癒することもあるもの故、痔核患者は成るべく頻回入浴するがよい。それから冷水瀉も効あり、また鮮血の甚しきものには水蛭をつけ、また刺絡によりて射血すること等もあるが、これは得て習慣になり易きもの故、成るべくならば應用せぬがよい。

痔核は外部に出て居るもの故、外用塗附薬は割合に利くものである。尤も中には單に塗布薬のみにては全癒を期し難き場合のあるは無諭なるも、少くとも塗附薬によつて、如何なる症にても輕快するものである。塗布薬にて普通應用されるものは五倍または十倍の單寧酸軟膏であるが、尙ほ

- ▲クロサロビン 〇、五 沃度ホルム 〇、二五
  - ロートエキス 〇、五 ワセリン(若しくは單軟膏) 一五、〇
- 右混和塗附料

をリント(紋羽のやうなもの)に塗りて局部に貼用すると宜しい。それから痛みの劇しいのは

- ▲單寧酸 一、〇 コカイン 〇、三
- ロートエキス 一、〇 單軟膏 一〇、〇

右混和塗布料を塗るがよろしい。

坐薬と云ふは、肛門内に挿入する圓筒或は圓錐狀の、大さは小指位、長さは一寸位のものである、其處は痔核は普通は切ることになつて居るが、最近注射で痛みも無く治すことが出来るやうになつた。

- ▲クリサロビン 〇、八 柯々阿酪 二〇、〇
- 右混和坐薬十個となし朝夕一個づつ

### 第二百二十節 脱肛(ヌケヂ)と其治療法

◆症候 脱肛、これには排便時に於ける特徴が二つある、第一は出血で、第二は肛門の脱出である、第一の出血は、初期の間は僅かに糞塊の表面を染め、或は拭拭に用ひたる紙片に着色せるを見て始めて發見する位であ

るけれども、重症にありては如露より水を注ぐ如く純血を流すやうになる。第二の肛門の脱出は、軽度の間は其脱出部も豆粒程だが、段々胡桃大より鶏卵大乃至手拳大になるものである。さて此脱出部は輕度の間は、空氣を吸ふ氣味にするとは自然元の通りに還納する、また指頭で押ししても直に元の通りに戻る、けれども段々月日が経つて病勢が進むに従ひ、容易に還納し難いのみならず、咳嗽、嘔吐、努力は申すに及ばず、僅かの歩行にも直に脱出して心地の悪いこと此上も無い、夫れのみならず時としては腫脹疼痛を發し、また出血の結果として腸貧血を起し、輕きは頭重、頭痛より、重きは卒倒して人事不省に陥り、其他種々の續發症を起して身體の衰弱を來すものである。また若し同病者にして腸加管兒か赤痢のやうな再三大便に通ふ病氣にかゝるときは其脱出部を肛門内に押し込む傾が無い爲め、其部が發熱、腫脹、疼痛を起して、遂には壞死に陥り膿毒症を起して生命に關すやうなことになるものである。

◆脱肛還納法。 感脱肛が起つたとか、或は起りさうなときの手當は、先づ第一は灌腸療法で、痔核の緊張して居る時に行ふと、未だ出でざる脱肛を防ぎ、また既に出たる脱肛も輕いのなら納まることになる、用液は前者には冷水のみにても可なるが、後者には百倍の單寧酸水、或は二百倍の明礬水の何れなりを四百グラム（約

二合五勺）程一回に灌腸するのである。

脱肛は時と場所とを問はずに出ることあるが、多くは便通の時に出るものである、これは早く納めないと、種々の障害を來すものであるがさて其納め方は、先づ筒ふ様の姿勢を取り、腹面に脂肪を塗つた布片を脱肛の上を被ひ、指頭で此布片の上から脱肛を肛門内に押し納めるか、または脱肛に油を塗つて収縮してもよいが此際用ひる油は單純の胡麻油なり、オリーブ油なりでも差支無いが、成るべくは單寧酸軟膏のやうな收斂性の油を用ひた方がよろしい。脱肛も脱た直ぐなら容易く納まるが、少し長くなるとなかく復納は困難のもので、斯様の場合には腰油を使ふて（殊に無花果の葉を入れたものがよい）よく温めたる上ですると案外樂に出来るものである。そして納めた後は脱脂綿、ガーゼ等を通常繙帯する様にして其上に襪を強く締めて置くがよい。

若しまた脱肛の度々出る人や、老人等にあつては脱肛固定器を用ひるとよい。

第二百一十一節 痔瘻（アナヂ）と其治療法

◆症候 孔痔即ち痔瘻は痔疾中最も重症なものである。痔瘻の直腸粘膜と外面とを交通せぬのが不全痔瘻と云ひまた外面より直腸まで穿孔して堪へず直腸内容物の外面に流れ出づるのが全痔瘻、それから同じく孔が穿くにしても、肛門外に穿くのは外痔瘻で肛門括約筋の内部に孔の穿くのは内痔瘻と云ふものである。

さて痔瘻には右の通り數種あるが、輕いのであると御常人頗る平氣の平左で、時々膿が出るので驚く位のものであるが、少し重いになるとなかく困難のもので、全痔瘻とは、直腸の内外に孔の通じてあるものとしてあるが、不潔なる腸の内容物が絶えず内孔から外孔に流れ出で、そして其内容物が通る度に瘻腔壁を刺戟され、分泌が多くなり、外孔の周圍は常に濕潤して、遂には濕疹を發するなど非常に氣持の悪いものである。内痔瘻は直腸の内部にばかり孔の穿いて居るものなるが、これも矢張り絶えず、直腸内容物の爲めに刺戟され、疼痛を發するが、其内孔にある膿が直腸の方へ出て了へば、膿が閉塞になるものである。外痔瘻は直腸の外部に孔のあるもの故、前二者の如く直腸内容物のために刺戟されることは無いが、よく其外孔口が寒り易い爲めに膿が蓄積して新しく炎症を發し、疼痛を發することがある。そして以上の痔瘻は其何れの種類を問はずなかく容易に癒らぬものである。

◆原因 さて斯様にしき痔瘻は何の爲めに起るか云ふに、前の痔核を充分に治療しなかつた場合、直腸周囲炎、肛門周圍炎、糞便中の魚骨等の爲めに傷つけられたるもの、直腸潰瘍、淋病、梅毒、結核等が主なる原因であるが、其中に結核性が一般に多い結核性にあつては其分泌物に結核菌があつて、それより他の傳染の危険あるもの故、其分泌物または分泌物を處理したものは總て消毒の上捨てるのが必要の注意である。

◆療法 次に痔瘻の治療法はと云ふに、どうしても外科手術によつて切開しなければならぬ、併し姑息法としては前に痔核の處で述べた坐薬を挿入して一時の安を貪ることは出来るが根治法は矢張り外科的手術によらねばならぬのである。

俗間に痔瘻を切れば肺病になると云ふてゐるが、これは穴痔さうとも限らぬ、尤も結核性の痔瘻を切開して結核菌が血管其他によりて肺に行く場合は無いが、これは滅多にあることは無い、否寧ろ皆無と云ふて宜しく、痔に結核があれば多くは其以前に肺若しくは膿に結核があるもの故、手術によつて身體の弱つた爲めに、肺の方が悪くなつたと云ふ方が多いのであるから、手術するにしても能く其時期を認むが肝要であるから、此等は然るべき大家に依頼するがよい。



第二百二十二節 直腸脱(ヂヌケ)と其治療法

- ◆症候 此れは小兒に多い病氣であるが、大人にも大分ある、小兒のは成長するに従ひ何時とはなしに治癒するものもあるが、多くは次第に増進するものであるから決して粗末にしてはならぬ。
- ◆原因 直腸加答兒、廻回分娩、難産、尿道狹窄常型便秘等である。
- ◆療法 單寧酸軟膏を塗りて脱肛の如く完癒するがよろしく、そして其後には直腸壓定器を用ひて固定して置くがよい。

第二百二十三節 裂痔と其治療法

- ◆症候 此れは多く肛門の後部に發し、便通時或は其後または起居動作によりて疼痛を發するが、其痛みは一瞬特別 恰も灼くが如く、刺すが如く何とも云へぬ厭た痛みである。
- ◆療法 痔核の條下に記載した、第一の處方を塗布するがよい。

第二百二十四節 痒痔と其治療法

- ◆症候 此れは多く痔核、脱肛等の持病を有する人が其原病を隠却して、治療を怠る爲めに、其分泌物が絶えず肛門を刺戟して、其部が漸々消耗菲薄となりて濕疹を起すからである。また往々寄生蟲の如戦の爲めに本病を起すこともある 何れにしても肛門が何とも云へぬ程痒くて夜間などは安眠が出来ないで精神不安となり、爪にて搔傷を起し、疼痛を發することになる。
- ◆療法 寄生蟲のあるのは驅蟲劑によつてそれを驅除するがよろしく、其他には温浴によつて局部をよく清潔になし、よく拭ひ取りたる後に

▲硼酸末	二、〇	亞鉛華	四、〇
澱粉	四、〇		

右混和撒布料

を汗知らずのやうに袋に入れて、シト／＼と打ち撒るがよい。或は杏棟の實を粉末にしてつけるもよい。

第二百二十五節 下血(ハシリチ)と其治療法

◆症候 此は前述の脱肛、痔核、裂痔等より續發するものであるが、最も多く發するは脱肛であつて、時として大量に達し、種々恐るべき續發症を惹き起すことは脱肛の處で述べた通りである。然るに素人は下血があると悪血が取れるとか云ふて喜んで居るが、これは以ての外のことであつて、後には全身貧血を來すことにあるから、下血があらば一日も早く根治療法を受けねばならぬ。

◆療法 根治法には注射法其他があるが、下血に對して用ひる藥劑は左の通りである。

▲アドレナリン

十滴

ワセリン 一〇、〇

右混和塗布料

▲單 寧 酸

二、〇

柯々阿糖 一〇、〇

右坐藥五個に造る

第二百二十六節 線蟲と其驅除法

◆種類と形態 線蟲は其種類なかく多いもので、人間の腸内に寄生するものだけでも十餘種に及ぶものであるが、其中最も普通なのは有鉤線蟲、無鉤線蟲、裂頭線蟲の三種類である。

有鉤線蟲は豚肉を中間宿主とするもので、糞糞を含有する豚肉を食すれば、其被膜は胃液の爲めに消化せられ唯頭のみなる幼蟲となつて小腸内に達し茲に成熟を遂げるもので、卵の發育は大抵三ヶ月、糞糞より成蟲に發育する迄にはまた三四ヶ月を費すもので、其生活年限は十五年に達するものである。成蟲の長さは平均二乃至三、五メートルに達し、頭部は球形帽針大にして中央に二十五乃至三十八鉤を有するものである。無鉤線蟲は牛を中間宿主とするもので、成蟲の身長四乃至八或は一〇メートルに達するものである。裂頭線蟲は魚類、鱒、鱒等を中間宿主として發育し、成蟲の長さは八乃至九メートルに達するものである。

◆症候 條蟲が寄生しても少しも障害を與へない、即ち無症候の場合もあつて、條蟲の片筋が排泄されて初めて判ることもあるが、多く胃腸の症候として食思不振或は反對に飢餓をして早朝の嘔吐、唾液分泌亢進するこ

ともある、そして香料、毒等を食すれば腹痛、嘔吐等あつて、甚しきは腸内に何物か蠢動するやうな感じがあ  
り、牛乳または鶏卵等を食すれば其反對に今まであつた蠢動が忽然として消失する等面白き症候を呈するも  
のである、また便通は不定にして時として下痢、時として便秘等を發し、其他心悸亢進、小動の不整、頭痛、  
眩暈、甚しきは人事不省に至ることあり、また中毒症候として貧血、殊に悪性貧血の状態を呈するに至るもの  
である。

◆豫防法 條虫の寄生を豫防するには、肉類の衛生警察的検査を嚴重にすると共に、前記の魚獸肉の生食を嚴  
し、加ふるに小兒の犬猫等と遊ぶを禁するがよい。

◆驅虫療法 昔はいろ／＼準備を要したが、今は準備なしに簡単に驅除が出来るやうになつた。驅虫剤には種  
々あるが副作用なき點に於てヘノボチ油を服用せしむる、また榎の實を一日三回五個づゝ食べて居ると何時の  
間にか驅除されるものである。

### 第二百二十七節 吸蟲と其驅除法

◆種類と形態 種に見せらるゝものには、其主要なるものは肥大吸蟲、ヂストロムムヘテロフ、井エスの二  
種である、前者は扁平にして後者は長卵形を呈するものである。

◆症候 腸胃の症状と血性下痢を來すものである。  
◆驅除法 無し。

### 第二百二十八節 蛔蟲と其驅除法

◆形態と侵入徑路 蛔蟲は誰も知る如く蚯蚓に似たる小虫であつて、仔虫を含有する卵が蔬菜に附着して人體  
に入るものにて、我國に於ては糞便を肥料とする關係上最も多く其傳播を見るものである。

◆症候 蛔蟲が寄生するも多くは無症候であつて、糞便または吐物中より偶然に發見するを常とするが、其呈  
する症候の一般を擧ぐれば食慾が不振になることもあれば、または其反對に非常に食慾進みて飢餓症を呈する  
こともある、其他口内の悪臭、疝痛等を發し、甚しきは瞳孔不同、鼻腺癢痒、心悸亢進、眩暈、人事不省を  
來すことがある、また數多寄生するときは合併症として腸閉塞症、黄疸、膽石、胃瘻、窒息、肺膿瘍等其他種

その重篤なる症状を呈することがある故、蛔虫の寄生と雖も大に注意せねばならぬものであつて、若し四歳以下の小兒にあつて理由なく不機嫌になつたり、腹痛を訴ふる様なことがあらば腫孔を見て、若し平素より開がつて居るとか、開き方が左右不同あるとか云ふ場合に本虫の寄生に疑ひを措ても宜しい。

◆驅虫療法 これも惟の實で驅除される。また海人草を煎じて飲んでもよい。

### 第二百二十九節 蟯蟲と其驅除法

◆形態 蟯蟲は丁度絹絲を細く切つたやうな白色の小圓蟲であつて、雌蟲は長さ三乃至五ミリメートル、雄蟲は一〇ミリメートル、厚さ〇、六ミリメートルあり、卵は不規則形或は橢圓形にして長さ五〇ミクロン、幅二四ミクロン程ある、此蟲も亦中間宿主を要せずして人體に侵入するもので、卵が若し嚥下せらるれば、卵数は胃液の爲めに溶解せられ、仔虫は胃より小腸に達して茲に成熟し、後大腸に至りて産卵するものである。本虫は主として不潔なる社會に多く、手または衣服等より傳染する故、一家族中一人これにかゝれば容易に他の家族にも傳染するものである。

◆症候 蟯蟲が寄生しても時として無症候なることあるが、其多くは肛門部に搔痒を覺ゆるもので、其搔痒は茶、コーヒー等を用ひたる際、または夜間夢中に入りたる時に甚だしく、爲めに不眠症を來すことあり、或はまた外部、鼻、眼、口内下等に侵入して充血、搔痒、炎症を發し、爲めに手淫を誘發し、或は肺炎、直腸加害兒等を起すことがある。

◆豫防法と驅虫法 豫防法としては、室内及び衣服其他を清潔にして飲食物は煮沸して用ひ、局處に觸れたる手指は充分清洗するがよい。

驅虫法は蛔蟲の如くカヤの實を食べると共に八十倍酢酸水或は石鹼水を以て腸瀉腸を行ひ、また本蟲の肛門外に出づるを防ぐ爲めには肛門周圍に灰白軟膏を塗布する等は何れも専門家の推奨する處である。

### 第三百十節 十二指腸蟲と蟲驅除法

◆成蟲と其卵 十二指腸蟲と云ふのは十二指腸に寄生する小蟲であるが、また空腸にも寄生することもある。成蟲は圓柱状にして細長、上端は背側に向つて屈曲し、上端に巨口を有し、これに數箇の鋭齒を有するもので